
バカとテストと召喚獣 ~常識人はつらいよ~

さすらいの旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～常識人はつらいよ～

【Nコード】

N3704X

【作者名】

さすらいの旅人

【あらすじ】

文月学園に入学して2度目の春を迎えた天城修哉。常日頃から平穩に過ごしたいと思っている彼であったが、Fクラスに入ってしまった事によって平穩と言う単語は完全になくなってしまった。クラスメイトで友人である吉井明久、代表の坂本雄二等が色々トラブルを起こしてしまうので、天城修哉は毎回巻き込まれてしまう。そんな常識人である彼が加わったドタバタ学園コメディ話です。

プロローグ（前書き）

さすらいの旅人です。試しとしてバカテスの原作沿いを書いてみました。

コレの更新は遅いですので、温かい目で見てください。

プロローグ

文月学園に入学して2度目の春。

道行く先には新入生を歓迎するかのように桜が咲き誇っている。見慣れている光景ではあるが、それでも目を奪われてしまう。そんな感じで歩いている俺、天城修哉あまきしゅうやは学園の玄関前に着く。

「おはよう、天城」

「おはよう御座います、西村先生」

玄関前には黒い素肌にスーツを纏った、文月学園の生活指導担当の西村先生が立つており、声を掛けられた俺は挨拶をする。

この人はトリアスロンが趣味であり、生徒からは“鉄人”と呼ばれていた。因みに“鉄人”と呼ばれる事を嫌っている。

不届きな事をしている生徒にとっては恐ろしい人だが、そうでない生徒には気さくに話しかけて相談に乗ってくれる優しい先生だ。

「どうしたんだ？ いつもは余裕を持って登校する天城が、ギリギリで来るとは珍しいな」

俺は後者の類に入るので、心配そうに何か遭ったのかと思って西村先生は尋ねてくる。

「……………何処かのバカが“もしかしたら遅刻しそうだから、明日の朝は起こしてくれないかな？”と頼まれたんですが、中々起きな

くて……」

「……………アイツか」

ギリギリで来る事になった理由を言うと、西村先生は呆れた顔をすする。それは俺に対してではなく、バカの方に対してだ。

「と言う訳ですので、アイツは遅刻して来ます」

「……………はあっ…分かった。まあアイツの事は後にしよう。取り敢えず、コレを受け取れ。試験の結果だ」

「結果は見なくても分かるんですけどね」

西村先生は茶封筒を出すと、俺は渋々と言った感じで受け取る。

「しかしまあ、世界的に注目されている最先端システムを導入している学園なのに、何でこんな面倒な発表の仕方をするんですか？ こう言ったクラス編成の結果は、掲示板で張り出すと思いますが」

「普通はそうなんだがな。まあ、天城の言ったとおり、此処は注目の的となっている試験校だからな。この変わったやり方もその一環だ」

「試験校故の行為ってやつですか……………俺としては面倒ですけど」

俺は話を聞きながら茶封筒を破って中身を見ると、その中には紙一枚が入っており……………。

「……………言うまでも無く、Fクラスですね」

紙には“天城修哉……Fクラス”と書かれていた。

「俺としては、天城を次の日に試験を受けさせたかったが……学園の方針でな」

「仕方ありませんよ。俺は振り分け試験当日に欠席しちゃったんですから」

本来であつたら試験に出席していた俺であつたが、訳あつて欠席してしまつた。その事に西村先生は氣遣つてくれたのか、俺の肩に手を置く。

「まあとにかく、今の教室で我慢してくれ……としか言えんな」

西村先生にそう言われた後、俺は校舎へと入つてFクラスへと向かつた。

Fクラスに向かつている途中……。

「あら、天城君じゃない。おはよう」

「おはよう、木下さん」

去年のクラスメイトであつた、優等生の木下優子が俺の前に立っていた。

「試験の結果はどうだったの？　もしかしてAクラスかしら？」

「まさか。俺程度の頭じゃ到底Aクラスは無理。良くてDクラス辺りだ。それに俺は試験を受けてないから、Fクラスだよ」

「試験を受けてないって……何か遭ったの？　まさか……」

「違う違う、今回は俺がちょっとしたトラブルに巻き込まれたって話。アイツは関係無いよ……まあ今朝は面倒な事になったけど」

木下が試験を受けなくなった原因が、俺の友人ではないかと思っ
て顔を顰めていたが、俺はすぐに訂正する。

「はあっ……どの道、貴方に迷惑を掛けているのね。天城君、もう吉井君と関わらないほうがいいんじゃない？　何時もトラブルを起こしては、貴方にまで被害が及んでいるし」

「最初はそう考えたけど、今はもう慣れたよ。それにアイツを放っておくと、また何を仕出かすか分からないから」

木下の言う吉井とは、俺の友人である吉井明久の事だ。明久とは中学からの付き合いで、騒動を起こしては、俺が毎回巻き込まれると言った展開になるトラブルメーカーだ。そして明久が騒動を起こした後は、俺が即行で鎮圧し、明久と騒動を起こした奴も一緒に説教する。そんな流れが何回も続いていた為、西村先生や他の教師達にまで同情的な眼差しを送られているのだ。

まあ何度も明久を説教している俺だが、それでも交友関係は続いている。明久は騒動を起こさなければ良い奴であり、俺が“明久以外

”の悩みがある時は励ましてくれるのだ。

と、俺がそんな事を考えている際に……。

キンコンカーンコーン！

「あ、予鈴が鳴っちゃった。それじゃあ天城君、アタシはこれで」

「じゃあな」

予鈴のチャイムが鳴ってしまったので、木下はすぐに自分の教室に戻り始めた。

「ああそれと、Fクラスにはアタシの弟がいるから、何か変な事を仕出かしたら遠慮なく説教していいわよ」

「……………俺は説教役じゃないんだがな」

「冗談よ。それじゃ」

俺に別れを告げた木下が教室に入った場所は、高級ホテルかと勘違いする位の立派な設備であるAクラスだった。

「やはり木下はAクラスか……まあ成績優秀なアイツなら当然だろうが。さて、俺はさっさとFクラスへと行くか」

Aクラスに入った木下を見て少々羨ましいと思った俺であったが、すぐにFクラスへと向かったのであった。

オリキャラ紹介

名前 天城 修哉

身長 178cm 体重 62kg

趣味 読書・ゲーム

特技 剣道

外見 黒髪の短髪で、穏やかそうな顔付き。

性格 温厚（但し、キレたら物凄く怖い）

得意科目 現国・英語

本作品の主人公。

文月学園2-Fの男子生徒であり、数少ない常識人。何処にでもいそうな、真面目な少年。

振り分け試験時には、学園へ向かっている最中にトラブルが発生し、欠席扱いされてFクラス入りになってしまう。

クラスメイトである吉井明久とは中学からの友達で、明久がバカな事を起こしている際は、巻き添えに遭っている。明久を説教している事が多々あり、教師からは明久のストッパー役と認識して信頼さ

ねている。

第一問 (第一巻開始) (前書き)

原作本を片手に書いていると大変ですね。オリジナルを書いているより、時間が掛かります。

第一問（第一巻開始）

バカテスト 科学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応する為危険であるという点』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

天城修哉の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するからである』

合金の例……鉄

コメント……恐らく明久は妙ちきりんな回答をしていると思います』

教師のコメント

おしいです。問題点は合っていますが、合金の方は引っかけかっ

まいましたね。次からは間違えないように。
それとコメントは書く必要はありませんよ、天城君。友達である吉井君に失礼だと思いませんか？

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（　　）　　すごく強い』

教師のコメント

すごく強いと言われても……本当に天城君の言ったとおり、妙ちきりんな回答ですね。

「……………本当にみすばらしい教室で、Aクラスとは大違いだ。月とすっぽんだよ」

Fクラス前に着いて早々、俺は余りの酷さに思わずAクラスと比較

してしまつた……比較する事態、Aクラスに大変失礼であるが。

「まあ今更何を言つた所で無駄だ。さつさと入ろう」

何時までも悲観する訳には行かないので、俺がドアを開けると……。

ガラツ！

「早く座れ、このウジ虫野郎」

いきなり長身のツンツン赤毛男に悪口を言われる事となつた。

「ん？ げっ！ 天城！ 何でてめえが此処に！？」

「……………おい坂本、お前は俺が入つて早々に悪口を言つておいて、嫌そつな顔をするとは……………喧嘩売つてるのか？」

教壇に上がっている男の名は、坂本雄二。コイツは明久と同様に、騒ぎを起こすトラブルメーカーだ。しかし坂本は明久より性質が悪く、騒ぎを起こしたにも拘らず、何食わぬ顔で明久の所為にしたり、捨て駒の如く平然と見捨てるのだ。言うまでもなく、コイツも明久と一緒に説教する対象の一人だ。坂本が責任転嫁したり、自分だけ助かつて逃げようとしている時は、俺の方で体罰を与えている。普通はそんな事したら問題になるのだが、先生達からは許可を得ているので問題無い。

そんな訳で坂本は俺を苦手としているので、下手に逆らう事は無いのだが…………。

「ち…違つ！！ 俺はてつきり明久が来たんだと思つて…………！！」

「謝罪もしないで、すぐに言い訳か……どうやらまた説教をする必要がありそうだな、坂本」

「！！！！ わ…悪かった！！ 俺が悪かったから、説教は止めてくれ！！」

説教と言った途端に、坂本は俺に頭を下げながら謝った。

「全く、お前と言う奴は……今回はこれで勘弁してやる。次からは気を付ける」

「……………分かったよ。所で、何で天城が此処にいるんだ？ 俺の知ってる限りじゃ、お前の成績はCかDクラス並だった筈だが…………」
話題を変える坂本は、俺が此処にいる理由を聞いてくる。

「訳あって試験を受けてない。その所為で俺はFクラス行き確定になって、此処に来たってことだ」

「……………珍しいな。何時も真面目なお前が試験をすっぱかすとは……………」
「だから言っただろ。俺は訳があつて受けてないと……………」

「じゃあ一体何があつたんだ？ お前が試験を受けないってのは余程大事な事があつたのか？」

「……………それは……………」

坂本に言った所で絶対に信用はしないだろうと思いつつも、取り敢

えず言おうとしたが……。

「雄二よ。修哉が言いたくない事を無理に聞くのは良くないぞい」
横から爺言葉を喋りながら、話を中断させる男子生徒が割って入ってきた。

「何だよ秀吉。お前は聞きたくないのか？」

「お主の事じゃから、仕返しがてらに修哉の欠席理由をネタして、からかうつもりだったのじゃろう？」

「……………」

「俺はからかわれた所で聞き流すがな……………」

秀吉と呼ばれる男子生徒が俺を加勢するかのように、俺の前に立って坂本に指摘すると、坂本は凶星を突かれたかのように無言となる。そんな事をした所で俺には無意味だが…………しつこかったら黙らせるけど。

それと俺の目の前にいる男子生徒は木下秀吉と言う。苗字で分かると思うが、コイツは木下優子の双子の弟だ。容姿が木下姉にそっくりで、女の子みみたいな可愛い顔立ちをしているが、真正正銘の男。最初に会った時は、木下姉と勘違いをしていたが、男子の制服を着ていたので、すぐに男だと分かった。その事を木下姉に言ってみたら、何故か妙に感心してた事に疑問を抱いた。

その翌日に、秀吉は何故か別クラスである俺に会いに来て、友達になつて欲しいと言われたので、俺は快く了承したのであった。秀吉

が何故か俺と一緒にトイレで連れションをしたり、更衣室で一緒に着替えている事に嬉しそうな表情をしていたが。木下姉弟が揃って不可解な事をしている事に俺は全く分からなかった。

「ったく、相変わらず天城の味方をするんだな、秀吉」

「ワシは修哉の友達として、当然の事をしたまでじゃ。修哉よ、お主はもう座る席を決めておるかの？」

坂本に言うだけ言った秀吉は、俺の方を向いて話しかける。

「いいや。ってかその言い方だと、座る席は自由なのか？」

「うむ、此処は席順が自由なのじゃ。良かったらワシの隣に座らんかの？」

「別に構わないが」

「そうか。ではワシの席はあそこじゃから、お主はその隣じゃ」

秀吉が指をさした方には、誰も座っている形跡が無い古そうな卓袱台とボロボロの座布団であった。俺は秀吉に言われたまま、その席にあったボロボロの座布団の上に座る。

「これから一年間、宜しくのう」

「……………随分と嬉しそうだな、秀吉。何か良い事でもあったのか？」

俺の隣に座りながら笑顔で言う秀吉に、俺は疑問に思いながら聞いてみたが……………。

「お主と一緒にじゃから嬉しいのじゃ。去年は別クラスじゃったから
のう」

「……………俺がいると嬉しい？ ってか秀吉、男のお前が男の俺に、
そんな事を言われるのは妙に気味悪いんだが……………」

「！！！！ ち…違うのじゃ！！ ワシはただ、お主と一緒に勉強出
来るから嬉しいと言ったのじゃ！」

「……………なら良いが」

何故か顔を赤らめて否定する秀吉であったが、理由を聞いたので余
りに気にしないことにした。

「う…うむ。じゃからワシが勉強で分からん時があったら、教えて
くれぬかのう？」

「俺が出来る範囲でならな。それじゃ一年間宜しく、秀吉」

「宜しくなのじゃ、修哉」

秀吉が女の子みたいな笑みで俺を見てくるが……………。

「何だその顔は？ 男ならもっとシャキッとしろ」

「……………うむ。男らしくじゃな」

「？」

俺が指摘すると、妙に男を強調して言う秀吉に疑問を抱かざるを得なかった。

と、そんな時……。

ガラッ！

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

ドアの方からバカっぽい顔をした男子生徒……俺の友人である吉井明久が笑顔で言いながら入って来ると、坂本が先程俺に言った台詞を言ったのであった。

おい坂本、お前はそんなに明久を罵倒したいのか？

「……………」

「聞こえないのか？ ああ？」

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？ なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久と雄二の会話に俺は少しばかりゲンナリした。最高成績者であ

る坂本がFクラスの代表となると、必ず何かやらかしそうだと思うのだ。

俺や此処にいるFクラスの生徒は暫く坂本に振り回されそうだと思うっていた時……。

「シュウ！！ 君もFクラスだったの！？」

明久が漸く俺がいる事に気付いたみたいだ。

「何でシュウがFクラスに！？」

「明久、後で説明してやるから、さつさと席に付け。後ろにいる福原先生が通れなくて困っているぞ」

「え？」

「その通りです。ちょっと通してもらえますかね？」

俺の指摘に明久が後ろを向くと、福原先生がいたので………恐らく明久は冴えない風体のオジサンだと失礼な事を考えているだろうが。

「明久、さつさと適当な席につけ。それと坂本、お前は何時まで教壇に立っているんだ？」

「う…うん」

「お前に言われなくても分かっているよ」

「天城君、お心遣いありがとうございます」

明久と坂本が席につくと、福原先生は教壇に立ちながら俺に礼を言うってくる。

「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

福原先生は挨拶をした後に、薄汚れた黒板に名前を書こうとしたのだが、チョークが無かったので止めた。おい、此処はチョークすらまともに支給されていないのか？

「皆さん、全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

福原先生の言葉にFクラスの生徒達が申し出たが、俺は余りの対応

の酷さに言葉を失う。

これがFクラスの対応なのかと思っていると……

「必要なものがあれば、極力自分で調達するようにしてください」

極め付けは自分で調達と言われた事に、俺は頭を抱えるのであった。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

自己紹介が始まると、俺の隣に座っていた秀吉が立ち上がって自己紹介を始める。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる　と、いうわけじや。今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉の自己紹介を終えて笑みを浮かべると、Fクラスの男子大半が見惚れているかのような顔をしていた。男相手に惚れたのかと思っで呆れている俺であったが、明久も男子達と同様に見惚れていたの
で更に呆れた。

「……土屋康太」

次の生徒は小柄の男子だった。俺の記憶が正しければ、確かアイツは盗撮をしている犯罪予備軍の一人だ。捕まえるのに一苦労する奴なのだが、それでも何とか捕まえては俺の方で説教をしている。土屋は信念を曲げないとか訳の分からん事を言っで盗撮を止めないので、俺は放置する事にした。教師に突き出した所で、絶対に止めないだろうと思っだから。

「ーです。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」

俺が考え事をしてる最中に他の生徒の自己紹介が続けられていた。今度は女子の自己紹介だったので、俺は女子の顔を見ようとしたが……。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

ソイツは特定の人物にターゲットを絞る危険な趣味の持ち主である、ポニーテールをした島田美波であった。

「はろはろー」

「……あう。し、島田さん」

明久に笑顔で手を振る島田に、振られた本人は若干引き気味だ。

「おい島田。お前がそんな危険な趣味を持っているなら、俺はお前を明久に近寄らせないようにしなければいけないんだが」

「げっ！ あ…アンタ、このクラスにいたの!？」

「気付くのが遅いぞ」

次は俺の自己紹介だったので、立ち上がりながら島田に指摘すると、島田はやばい相手に見付かったかのように俺を見る。

島田は去年から明久に何かしら暴力を振るっており、俺が度々目撃

しては止めさせて説教している一人だ。殴っている理由は明久の自業自得であったのだが、それでもやり過ぎだから少しは自重しろと俺は何度も言ってる。俺に説教されている島田は“アキが悪いから”と言つて聞かなくて、手に負えなかった。後になつて分かったのだが、どうやら島田は明久に好意を抱いているみたいだ。何度も説教をしてる最中に一度ソレを指摘してみたが、当の本人は顔を真っ赤にして去つて行つた。その時に島田はツンデレ……ではなく、ボコデレな性格だと分かった俺は、取り敢えず応援だけはしてやろうと思つた。

で、その当人は今でも明久を殴つており、坂本と同様に俺を苦手としている。

「はあっ……やれやれ、また説教する相手が増えたみたいだな」

「人を問題児扱いしないでよ!!」

「そう言われなくなったら、少しは自重する事だな」

「天城君、話は後にして自己紹介をお願いします」

「あ……すいません」

島田と言い合っていると、福原先生が注意してきたので俺は謝つて自己紹介をする事にした。

「天城修哉です。既に俺の事を知っていると思われますが、何時も騒ぎを起こして周囲に迷惑を掛けている吉井や坂本を説教しています。2人が何かやらかした時は連絡して下さい」

「ちょっと、シュウ！ 自己紹介と一緒に僕の事を悪者みたいに言わないでよ！？ 雄二はともかくとして！」

「何言つてやがる明久、お前は何時も迷惑を起こしているから、天城に目を付けられて……！」

「何だと雄二！ 君だってシュウに何時も……！」

急に言い争いになる明久と坂本を見た俺は……

「……………お前等、今すぐ俺に説教されたいか、謝るか、好きな方を選べ」

「「すみませんでした」」

声を低くして言ったら、2人は即座に謝ったのであった。

「全く……と言つ訳で、今年一年よろしくお願いします」

自己紹介を終えた俺は座り、他の生徒の自己紹介がある程度進むと、明久の自己紹介の番となる。

「コホン、えーっと、吉井明久です。気がするに『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアーリイーン……！』

明久がアホな自己紹介をすると、野太い声の大合唱が響いた。ダーリンと呼んでない俺は聞いてて、実に耳障りな単語だった。

「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしく願います」

呼ばれた明久は作り笑いをしながら席に着いているが、吐きそうな顔をしていた。最初から、あんな下らん事を言わなければ良い物を……。

俺が明久の行動に呆れている最中、自己紹介は続いて行くと……。

ガラリッ

「あの、遅れてすみま、せん……」

『えっ?』

ピンク色のロングヘアである女子生徒が謝りながら教室に入ると、教室全体から驚いた声が出る。当然俺も驚いた声を出した一人だ。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願います」

生徒全員が驚いている中、福原先生は特に驚かずに姫路と呼ばれた女子生徒に自己紹介をするように促す。

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います」
緊張しながら自己紹介をする姫路に……。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を高々と挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

その質問の仕方は苛めと捉えられるが、男子生徒がそう言うのは無理もない。それは俺も含め、他の生徒全員も思っている事なのだ。何故なら彼女は、容姿端麗で成績優秀。入学して最初のテストでは学年2位を記録しており、その後も一桁以内に常に名前を残している才色兼備な女子だ。

そんな彼女が最底辺とも呼べるFクラスにいるのがおかしい。学年中の誰もが、彼女はAクラス行き確実だと思っていたのだから。

「そ……その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

『ああ、なるほど』

姫路の言葉を聞いた俺達は一斉に納得した。

試験途中の退席は0点扱いとなるのは学園の方針となっている。彼女は昨年度の振り分け試験を最後まで受ける事が出来ずに、Fクラス行きが確定したと言う訳だ。俺の場合は完全に欠席で0点だったが。

そして姫路の言い分を聞いたFクラスの男子生徒達が……。

『そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

明久と同様なバカな言い訳をしていたのであった。

「……………はあっ」

「しゅ…修哉。溜息なんか吐いてどうしたのじゃ？」

思わず俺は説教する相手が増えて溜息を吐くと、隣にいる秀吉が俺を気遣うように声を掛ける。

「で、では、一年間よろしくお願いしますっ！」

姫路はバカな連中の空気に耐えられなかったのか、逃げる様に明久と坂本の隣の席に着く。

席に着いた姫路が明久や坂本と話しており、坂本が明久をブサイク呼ばわりしたり、明久に興味がある男子がいる言われて、明久はさめざめと泣いていた。坂本、俺からして見れば、お前は聞き分けの無い野生のゴリラだぞ。それと明久に興味を抱いている久保は……アイツはちよっとな……………。

と、俺が危ない道に走っている去年のクラスメイトだった久保の事を考えていると……。

パンパン！

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

「あ、すみませ………」

バキィツ！ パラパラパラ……

福原先生が教卓を叩いて警告を発したので、明久が謝ろうとすると、教卓がすぐに壊れてゴミとなってしまった。いずれ崩れるのではないかと思っていたが、こんなに早く崩れたのは予想外だ。

「えー………替えを用意してきます。少し待っていてください。」

気まずそうに告げて、福原先生は教室から出て行く。

Fクラスの扱いが相当酷いという事を改めて知った俺は、この先大丈夫なのだろうかと不安になった。

第一問 (第一卷開始) (後書き)

修哉と同じく、この先ずっと書き続けられるかと不安になっています。

第二問（前書き）

今までに無い位の長めです。

第二問

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

天城修哉の答え

- 『(1) 上手の手から水が漏る』
- 『(2) 痛い上の針』

教師のコメント

正解です。得意科目である天城君ならではの答えですね。私が例をあげたのにも拘らず、他の類義語を知っていたとは。先生も学ばされました。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ 面蹴つ たり』

教師のコメント

君は鬼ですか

「やれやれ、ここまで設備の悪い教室だと先が思いやられるな」

「確かに修哉の言うとおりじゃ。チョークだけでなく、あのようなボロボロの教壇を見れば……」

福原先生が教室を出た後、俺が愚痴りながら言っていると、秀吉も賛同するかのよう to 頷く。しかしそんな事を言った所で、教室が改善される訳でも無い。

「ふうっ……いつまでもネガティブになってないで、少しはポジティブに考えるか」

「んむ？ 先程まで愚痴ってた修哉の言葉とは思えぬのう」

「ずっと愚痴った所で教室が改善されるわけじゃ無いからな。だったらいつその事、課せられた試練だと思って頑張るよ」

「ふむ、そう言う捉え方もあるのじゃ」

「では秀吉、試練を乗り越える為に、一緒にAクラスを目指す為に今から猛勉強するか？」

「そ…それはちょっと……ワシは今、演劇の方が大事で……」

俺の提案に秀吉は冷や汗を掻きながら、さりげなく断っていた。

「秀吉は演劇ばかりに集中した所為で、Fクラスに来る羽目になったんだろ？ だったら今すぐ俺が秀吉に勉強を……」

「い…今は遠慮しておくのじゃ」

勉強が嫌なのか、秀吉が完全に手を振りながら断ると、俺はわざとらしく落胆する表情をする。

「何だよ。友達からの手伝いを断るのか？」

「そ…そう言う訳では無くてのう……」

「俺は秀吉を男と見込んで手伝おうとしたのに」

「！……！ お…男と見込んで……じゃと？」

秀吉が何か食い付いたかのように、俺の顔をジッと見ている事に予想通りだと思った。秀吉は何故か“男”と言う単語に食いついて来るのは知っていたので、俺にとっては面白い展開になっている。

「ほ…本当に……ワシを男として見込んでおるのかのう？」

これはまた俺の予想通り、秀吉は何かを確認するかのよう聞いてくる。

「当然。何だつたら男同士の誓いでもやるか？」

「……………コホンツ……………し、仕方ないのう。男同士の誓いと
言われたら……………」

と、秀吉が物の見事に引つ掛かってくれて、俺がすぐに冗談だと言おうとするが……………。

「あれ？ 明久と坂本は何処へ行った？」

「ん？ そう言えば、おらぬのう……………」

明久と坂本が教室からいなくなっている事に今更気付いた。

「アイツ等、新学期早々に何かをやらかす気が？ だとしたら……………」

「そ…それは総計ではないかのう、修哉。いくらあの2人とて、お主の目を盗んでそんな事はしないと思うのじゃ。ワシは多分トイレに行ったのではないかと思うのじゃ」

「だがな……………」

俺は2人を探そうと立ち上がるが、秀吉が考え過ぎだと言って宥められていると、明久と坂本と一緒に福原先生が戻ってきた。やはり秀吉の言ったとおり、考え過ぎかと思っただ俺は席に座る。

福原先生が新しい教壇……と言っても古い物だが、ソレを持って入ってくる、また自己紹介が再開された。

「えー、須川亮です。趣味は」

淡々と自己紹介の時間が流れていると、漸く最後尾まで進んだ。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれて坂本が席を立ち、ゆっくりと教壇に歩み寄っている。それと同時に、先程までのふざけた雰囲気が無くなっており、まるで何か重大発表をするかのような感じであった。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原先生に問われて、頷く坂本。けれど代表と言った所で、あくまでこのFクラスの中での話だ。あくまで最低クラスの中での成績優秀者に過ぎなく、言っちゃ悪いが何の自慢にもならない。現段階で俺の成績は坂本より下だが、去年の成績を考えると、間違いなく俺の方が上だ。とは言え、俺もあまり成績は良くないのだが。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

教壇に立って言う坂本であるが、まだ他にも言う事があるんだろう
など思っている俺は直感した。

「さて、皆にひとつ聞きたい」

「……………はあっ」

やはりと言うべきか。坂本が、ゆっくりと、全員の間を見るように
告げる。俺が溜息を吐いても坂本は無視して、クラス全員視線が
自分に集まる事を確認する。確認した坂本は教室内の各所に移りだ
す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

移動している坂本を視線で追い、同時に備品を見ているFクラス生
徒達。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が」

次の坂本の言葉に……………。

「不満は無いか？」

『大ありじゃあつ!!』

Fクラス生徒達は一斉に叫んだのであった。雄二は予想通りと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

不満だったら、振り分け試験前に真面目に勉強してれば良かったんじゃないかと、俺は内心で突っ込む。

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる!』

それはちゃんと普段から勉強している奴が言う台詞だと思うんだが。

「みんなの意見は尤もだ。そこで」

(俺を除く) Fクラス生徒達の反応に満足したのか、坂本は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて……。

「これは代表としての提案だが」

ここからが本番だと言わんばかりに……。

「 Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思っ」

戦争の引き金を引いたのであった。

「……………“試験召喚戦争”ねえ」

坂本の提案に俺はポツリと呟く。確かに坂本の言うとおり“試験召喚戦争”をやれば、この教室の問題は解決出来る。

だが……。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何もいらぬ』

予想通り（最後の奴は除く）と言える不満な声が続々と出てきた。

それは当然だろう。はつきり言っ雄二は、最低成績者であるFクラスが最高成績者のAクラスに勉強で挑むと言っているのだ。勝率は言うまでもないが、もしそれで負けたら設備を1ランク落とされて、ただでさえ最低な教室が更に酷くなるのだから。勝ち目の無い戦いを挑む事に、先程まで高揚していた生徒達が不満を言うのは無理も無い。

因みに“試験召喚戦争”と言うのは、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』を使って、テストの点数に応じた

強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦い、それを利用したクラス単位の戦争と言う物だ。

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

けれど坂本が自信を持って答える。

『何を馬鹿な事を』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡った。

無論、俺も否定的な意見の方に入っている。一体坂本は何故あそこまで自信を持って答えているのが不可解であった。いくらFクラスに成績優秀な姫路がいたとしても、それだけで勝るとは言えない。坂本が姫路に頼った策を使った所で、逆に俺達が足手纏いになつてしまう。そんな事は坂本も重々承知しているはずだが。

「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている」

何だと？ まさか本当に姫路だけを当てにしているのか？ だったら俺としては、もうこれ以上、こんな茶番に付き合つ気はない。

「そこまでだ、坂本。何を根拠に言ってるのかは知らんが、お前一人の勝手でクラス全員を巻き込まないでもらおうか」

「まあ最後まで話を聞けよ、天城。これはお前にとっても良い話だ」
俺が立ち上がって抗議すると、坂本は分かっていたみたいに、俺をあしらうかのように言ってくる。

「聞く気は無いな。第一、お前の言う良い話とは、何かしら必ず裏がありそうだ。だから俺は信用出来ない」

俺が話はこちらまでだと打ち切ろうとしたが……。

「修哉よ、取り敢えず話だけは聞いてみないかのう。雄二があそこまで言い切るのじゃから、少しは信用してみたらどうじゃ？」

「そ…：そうだよシユウ。折角ここまで進んでいるから、雄二に最後まで話を続けさせようよ」

秀吉と明久が俺を宥めようとした……：明久が妙に焦っていたかのように見えたが。

「……………」

「まあ、天城が俺を普段から信用出来ないのは分かる。だが一応、話を最後まで聞いてくれないか？ 聞いても信じられないなら、抗議でも何でもしてくれ。それなら文句は無いだろ？」

2人の掩護射撃によって、雄二は便乗して俺を説得するように言うて来た。

「……………では最後まで聞こう」

「助かる。さて、ちょっとばかり話の腰が折れてしまったが、これから説明する」

俺が席に着くと、坂本は不敵な笑みを浮かべ、壇上から見下ろす。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振る否定のポーズを取る土屋。スカートを覗かれた姫路が裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔に付いた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出す。

本当なら不届きな事をしている土屋に説教をする所だが、苦し紛れの言い訳ばかりしかないので、やっても無駄だと理解しているから無視……………度が過ぎる事をしてれば説教をするが。

「土屋康太。コイツがあ有名な、^{ムツリーニ}寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニ？……………そうか、土屋がムツリーニだったのか。ムツリーニは俺もよく知っている。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。思春期な男として尊敬されるだろうが、俺は全くその気が無かった。俺とて女の子に当然興味はあるが、軽蔑される行動はしたくない。

『ムツツリー二だと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。ああまで明らかなきの証拠を未だに隠そうとしていくぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

周りが納得していると、土屋は否定しながらも類に付いた畳の跡を隠していた。もう分かっている事なのに、あそこまで必死に否定すると逆に感心してしまう。

「????」

姫路だけが頭に“?”ばかり浮かべながら、分からないと言う顔で首を傾げている。俺としては知らない方が良いと思う。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

やはり坂本は姫路を一番の頼りにしているみたいだ。それだけじゃダメだろうと思いつながら、俺は黙って聞いている。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『ああ。彼女さえいれば何もいらぬ』

さつきから誰が姫路に熱烈なラブコールをしているんだ？ 姫路の事が好きなら、思い切って告白をすれば良いと思うんだが……いや、そんな事したら明久が黙っていないか。アイツは以前から姫路の事が気になっていたからな。

「木下秀吉だっている」

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

おいおい坂本、お前は何を考えている。友達である秀吉には悪いが、そんなに大した成績じゃないぞ。いくら成績優秀な双子の姉がいるからと言って、秀吉も成績優秀じゃ……

「そして天城修哉もいる」

……………何だと？

「おい坂本、それはどう言っ……」

「天城はお前達の知ってるの通り、俺や明久、そしてムツツリー二を簡単に捕まえる事が出来る実力の持ち主だ。それにコイツは振り分け試験を受けていないから現在Fクラスにいるが、成績は俺達より上だ。姫路の次にな」

俺の名が出された事に再び立ち上がるが、坂本が好機と言わんばかりに俺を持ち上げると……。

『確かに、天城は鉄人みたいだからなあ』

『それと真面目で勉強熱心だ』

『俺達より成績が上なのは確かだ。姫路さんの次つてのが気に食わないけど……』

おい最初の奴、俺を西村先生と一緒にするな。あの人に失礼だろうが。それと坂本、お前は俺も当てにしていたのか。

「坂本、まさかお前、俺も参加させる為にあんな……」

「当然、この俺も全力を尽くす」

坂本は俺の言葉を無視し、代表として責任感を持った表情をしながら言う……。

『確かに何だかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良かなかだったのか』

『実力がAクラスレベルが二人もいるって事だよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

しかし……。

「それに、吉井明久だっている」

……シ～ン

さっきまで上がっていた士気が、一気に落ちてしまった。士気云々はどうでもいいのだが、俺は坂本の発言に脱力してしまった。一体コイツは何がしたいんだ？

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

それについては俺も同感だ。

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、知らん』

『でもアイツ、以前から天城に説教されてた奴じゃないか？』

「ホラ！ せつかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを ちよつとシユウ！ なんで僕に呆れた視線を送るの！？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「士気は関係無い。俺が呆れているのは、自称“普通の人間”であ

るお前が、どうして俺にいつも説教されているんだ？　そこを詳しく聞かせてくれないか？」

「うぐっ！」

俺の台詞に、明久は痛い所を突かれたかのように押し黙った。どうやら身に覚えがあるみたいで、俺に何も言い返せないみたいだ。例え言い返したとしても、過去にやらかした事を掘り出して切り返すが……あくまで人がいない所だ。いくら俺でも、こんな公衆の面前で言うつもりは無い。

そんな俺と明久のやり取りを見ながらも、坂本は説明を続けようとする。

「そうか。皆は余り知らないようだから教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

坂本、お前はそんなに人前で明久の恥を晒したいのか？　そんな不名誉な肩書きをここで出すなんて……本当にコイツは何がしたいんだ？

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

言っまでもなく、その肩書きは他の生徒も知っていた。

「ち、違っよっ！　ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

《観察処分者》。学園生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分、明久がこの学園で唯一、その処分を受けている。

どうしてその処分を受けたのかと俺は過去に明久に聞いたのだが、当の本人は当然の報いだからと言って、はぐらかしている。アイツは俺に迷惑を掛けない様に気を遣っているんだろうが、何を今更と思った。けどアイツがそこまで頑なにしていると言う事は、誰かを守る為に敢えて自ら汚名を被ったのだろうと俺は考えた。あんなに決意に満ちた眼差しで俺を見ていたのだから。だが、あくまで俺の推測に過ぎないが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首を傾げながら、何なのかと坂本に聞いてきた。まあ、成績優秀の姫路には、とても縁の無い物だから知らないのは当然だろう。

そんな姫路の質問に坂本は答えようとする。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすと言った具合だ」

坂本の答えに姫路はキラキラと目を輝かせながら、明久に若干の羨望と尊敬の籠った視線を送る。

そんな姫路の視線に……。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ、姫路さん」

明久は姫路に向かって手を振りながら否定した。

けど実際、明久の言うとおりだ。

召喚獣を自分の思い通りに動かせると言うのは凄く便利で、腕力も普通の人間の何倍もある。その気になれば岩だって砕く事が出来るだろう。

確かにそれは一見、素晴らしい機能だと思われるだろう。だが、それとは裏腹にかなりのデメリットがある。

何故なら、召喚獣は教師の監視下で呼び出さないといけないからだ。つまり、明久が便利に使えたくても使えない。教師が召喚獣を使つての雑用作業を明久に任せ、明久は教師に頼まれた雑用作業をする。それだけの事だ。だから先ほど言ったメリットは教師の監視下でやっているに過ぎなく、明久には自由に召喚獣を活用する事が出来ない。

それに加えて、物理干渉が出来る召喚獣に負担が掛かると、何割かが召喚者の明久にフィードバックされる。簡単に言えば、召喚獣に重い物を持たせて移動している最中に疲労していると、召喚者にもその疲労の何割かが返ってくるのだ。更には、物にぶつかった時の痛みも、そのまま帰ってくる。聞くだけで、これはもう罰だろうと思うだろう。

だからこそその《観察処分者》だ。凄い事でも便利でもない。学園にとって問題児とされる相手に課せられるペナルティ。坂本が領いて行ったバカの代名詞と呼ばれる理由がそこにあるのだ。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ?』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

当然、そんなペナルティを課せられた奴が、自分から戦闘に参加する気は無い。召喚獣が戦闘中によって受けた痛みが自分に帰ってくるのだから。

だからこそ俺は理解出来なかった。どうして坂本が、そんな事をバラスのかと。

まあ、他の連中とは違って、召喚獣の扱いに長けているからとでもフォローするのかと思っていたが……。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよな?」

ただ単に明久の恥を暴露したかっただけみたいだった。

平然と人の恥をばらす坂本に、俺が目細めながら睨んでいると……。

「!!!!!!……………ゴホンツ!!! ま…まあ、他の召喚者達とは違って、召喚獣の扱いには慣れているから、それなりの役には立つぞ」

「……………雄二、今更フォローしても遅いんだけどね」

睨みに気付いた坂本は調子に乗り過ぎたと思つて、俺に取り繕うかのように明久に対するフォローをした……明久は呆れながら言つてたが。

坂本、今更そんな事を言つても無駄だ。もうお前に説教する事は確定なんだから。

「と……とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思つ」

俺に対して冷や汗を掻いている坂本が、自信を持って言い切つた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

「ならば全員筆^ペを執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！っ！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！っ！』

「お、おー……」

「……………」

下準備が出来たと言わんばかりに坂本が号令を出すと、クラスの生徒達は一斉に雄叫びをあげる。姫路も小さく拳を作り掲げていた。

俺はもう、この状況を止める事が出来ないと察知し、無言で座った。坂本は俺が座って何も言わない俺を見て、予想通りだと言わんばかりに笑みを浮かべている。

坂本は恐らく、俺が今回の“試験召喚戦争”に反対だったのを予想していたと思う。

でなければクラス全員に鼓舞させるかのような演説と、勝利の鍵を握っているであろう土屋、姫路、秀吉。そして俺を持ち上げたのだから。坂本も自分の過去の功績を利用して、見事にクラス全員の心を掴んだ……明久の方は余計だったが。そして最後には参加しようと号令をして、クラス全員は“試験召喚戦争”に参加しようと意気込んでいる。

そう考えていると、坂本は「これでも反対できるか？」と言う様なイヤらしい笑みで俺を見ている。

坂本に一杯喰わされたと思いつながら俺は黙っていた。もし此処で俺が反対だと言ったら、クラス中から後ろ指をさされるだろう。そう計算しての行動だったのだ。

全く、アイツは普段から碌でも無い事しかやらないくせに、こう言う悪知恵に関しては物凄く長けているな。

黙っている俺に、坂本は次の段階に進もうとしている。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役

を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

あのハカ
坂本はまた明久を捨て駒にしようと考えているみたいだ。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

明久に優しく諭す様に言う坂本であるが、俺は全く信じなかった。
あれは完全に明久を騙している。

そんな坂本に明久は警戒を解き……。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

更に追い討ちの一言を掛けられて、騙されたのであった。坂本、お
前がそこまで明久を騙そうとするなら、俺にだって考えがあるぞ。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

完全に騙されている明久は、Dクラスへ向かう為に教室から出よう
とする……。

「待て明久、どうせなら俺も一緒に行こう」

「え？」

「！！！」

俺が立ち上がって名乗り出ると、明久は素っ頓狂な顔をしながら俺を見ており、坂本は急に焦ったかのような顔になった。

「ちょっとシユウ、僕の事が信用出来ないの？」

「お前だけに使者を任せると、また何かしらの騒ぎを起こしそうな気がするからな。そう思わないか、坂本？」

「……………」

俺の問いに坂本は、ひたすら汗を掻きまくって無言となっている。

「まあ、流石に宣戦布告をするだけで騒ぎは起こさないと思うが、それでも念の為に俺も行かせて貰う。明久、俺をバックアップだと思って、遠慮なく宣戦布告しろ」

「……………だったら良いけど。じゃあ行こうか」

「ああ、行こう」

明久は俺を伴って教室から出ようとする……………。

「坂本、お前が明久に言った事が、もし嘘だったら……………覚悟するんだな」

「……………」

俺が坂本に向かって死刑宣告を下し、坂本は無言で膝を地面に付けると、クラス全員は坂本に同情的な眼差しを送ったのであった……
… 姫路だけは坂本の行動に全く分からなかったが。

そして教室を出た明久と俺はDクラスへと向かったのであった。

第二問（後書き）

旅人『流石は修哉だな。雄二の嘘を見破って、あんな事をするとは』

修哉「アイツは普段から、明久に対してだけ平然と騙していますからね。それにアイツは明久を騙す時に、必ず目が笑っていますし」

旅人『……よく観察している事で』

修哉「そうでもしなければ、明久は散々な目に遭います。と言うか、俺は明久に、雄二に騙されているぞと何度も教えているんですが……いい加減に気付いて欲しいですよ」

旅人『……今の明久を見ると、修哉の助言を完璧に忘れて
いるみたいだな』

それでは次回もお楽しみに!!!

第三問（前書き）

今回はちょっと原作から離れています。

それに加えて、無駄に長いです。

第三問

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

天城修哉の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。 姫路さんと天城君はきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは
』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『 * x
』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。それと余り妙ちきりんな回答をしていると、天城君が説教すると言っていましたよ。だから真面目に答えて下さい。

若干ボロボロになっている明久と俺がDクラスに宣戦布告をした後、Fクラスに戻り……。

「酷いじゃないか雄二！！ 僕を騙したんだね!？」

「何か言い訳はあるか、坂本？」

「……………」

無言で正座している坂本を見下ろしていた。

「もしシユウがいなかったら、僕はDクラスの皆にボコボコにされていたよ!？」

「何も言い返さないと言う事は、やはり下位勢力の使者が暴行される事を予想していたみたいだな。それを分かかって、明久に行かせるとは……………」

「シユウ！ この外道に体罰をやる必要があるよね!？」

「そうだな、人を騙しておいて何の罪悪感も抱いていない奴には、それ相応の報いを受けなきゃいけないな。だが……」

「だったら!!」

明久は雄二に襲い掛かろうとしたが……。

「待て明久、俺の話最後まで聞け」

「何で止めるの!?!」

俺が明久の襟首を掴んで阻止したのであった。

「雄二には罰を与えなきゃいけないのに!」

「確かにそうだが、それは後回しだ。Dクラスに宣戦布告をした以上、坂本に手を出す訳にはいかない」

「何で!?!」

「今すぐ坂本に罰を下したら、試験召喚戦争に支障が出るかもしれないからな。だから手を出さない……“今”は」

「……………分かったよ」

明久は渋々従って落ち着くと、俺は掴んでいた明久の襟首を離す。

そして……。

「坂本、今は何もしないでおこう。だが覚えておくんだな。Aクラ

スとの試召戦争が終わった後は、即座に説教してやるから覚悟しとけ」

「……………はい」

俺が威圧感を放って坂本に警告すると、坂本は頷くのであった。

「そつだよ雄二！ 君のふざけた根性は僕が叩き直して……………」

「何度も坂本に騙されている明久も、どうかと思うんだがな……………」

「……………」

明久は俺の突っ込みに何も言い返すことが出来ずに無言となる。

「まあまあ、修哉もその位にしておくのじゃ」

気まずい雰囲気を出している明久と坂本に秀吉が助け舟をだした。

「それにしても修哉、お主は明久と違って無傷じゃのう」

「明久に暴行する奴を止めただけだからな。その後は……………」

俺がDクラスに言った事を秀吉達に話し始める。

明久と俺がDクラスの前に辿り着くと……。

「それじゃあシユウ、君は此処で待ってて」

「はいはい」

一人でDクラスに入る明久を見送る俺は、入り口前に立っていた。

「どうも、2・Fの吉井明久です。僕達Fクラスは、Dクラスに試験戦争の宣戦布告に来ました」

『何だと！？』

明久が即座に試験召喚戦争（以降は試験戦争）の宣戦布告をする時、Dクラスの生徒達は驚愕する声を出した。

「Dクラスの皆さん、お手柔らかに」

と、明久の呑気な発言に……。

「Fクラス風情が俺達Dクラスにだと！ ふざけるな！？」

「立場を分からせる為に伸してやる！！」

「かかれ〜！！！！！！」

「え！？ ちょ！？ 何で！？」

Dクラス生徒の大半が明久に襲い掛かったのであった。

「やはりな……坂本は説教確定だ」

予想通りの展開になっていると思った俺は即座にDクラスの教室に入る。

「お前等、そこまでにしてもらおうか」

『天城！？』

俺が入った途端にDクラス生徒達は俺の顔を見て驚愕した。

そんなDクラス生徒達に気にせず、俺は明久に暴行している奴等を見て……。

「取り敢えず、下らん理由で明久に手を出した奴等には報いを受けてもらおうか……」

バキッ！ ドゴッ！ ゴスッ！

『ガハッ！！』

一瞬で近づき、ソイツ等を一撃で伸して気絶させた。

「全く、一人相手に集団で襲い掛かるとは……大丈夫か、明久？」

「た…助かったよ、シュウ」

気絶しているDクラス生徒数名を尻目に、倒れている明久に手を差し出す。明久が俺の手を握ると、俺は引っ張って立ち上がらせる。

立ち上がった明久が制服に付いた埃を払っていると、俺は他のDクラス生徒達を睨み……。

「それで、此処の代表は誰だ？」

「……………お…俺だ、天城」

Dクラス代表を呼ぶと、去年のクラスメイトであった平賀源二が前に出てきた。

「ほお？ お前がDクラス代表だったか」

「あ…ああ。けど天城、お前が何で此処にいるんだ？ 俺はてつきり、天城がCクラスに行ったのかと……………」

「訳あって振り分け試験を受けていないから、今の俺はFクラスの生徒だ。それと平賀、俺の成績はお前と同じ位なんだから、Cクラスに行ける訳が無いだろう」

「だ…だが、お前は特化している教科があるから……………って、天城がFクラスだと!？」

平賀が俺を見て信じられない顔をしている。まあ今は、そんな事を言っている場合じゃないから、さっさと本題に入る。

「俺がFクラスにいる事はどうでもいい。平賀、お前は何で明久が暴行されるのを黙って見ていた？ 本来なら代表である、お前が止める筈だが？」

「そ…それは……」

「いくら最低なFクラスだからと言って、お前達が暴行する権利は無いんだぞ」

「……………」

「もう一度聞く、何故止めなかった？」

俺の質問に平賀は金縛りにあつたかのように体が動かず黙っており、他のDクラス生徒達も同様に黙っていた。

「……………」

「どうやら答える気は無いみたいだな。だったらコッチにも考えがある。平賀、お前は後で説教だ」

「……………」

俺が説教宣告をすると平賀はビクツと体が震える。

「あ…あ……あああ………」

「何をそんなに怯えているんだ？俺はただ説教を言っただけだぞ。無論、そこで気絶している奴と、その他もな」

「……………」

俺が追い討ちをかけるかの如く言うと、平賀とその他はガクガクと体が震えて、この世の終わりみたいな顔になっている。しかし解せ

なかった。何故平賀達がこんなに怯えているのかを……たかが説教をする程度で、あんな恐怖に満ちた顔をしなくても良いのに。

俺が内心そう思っていると……。

「吉井！！ 代表として謝罪する！！ すまなかった！！」

『すいませんでした！！！！』

「へ？」

平賀と明久に暴行をしようとしたDクラス生徒達は即座に土下座をした。その事に明久は素っ頓狂な声を出しているが。

「ね……ねえ、シュウ。僕はどうすればいいのかな？」

「……まあ十分反省しているみたいだし、明久に暴行をした奴等には俺の方で手を下したからな。今回はこれで勘弁してやろう」

「……はあつ、危なかったあ」

いきなりの展開に明久は戸惑っていたが、俺は怒る気も失せて許す事にした……何故か平賀が命拾いしたかのように安堵していたが。

「確かにのう。修哉の怒った説教は恐ろしいから、即座に土下座したくなる気持ちは分かるのじゃ」

「それはどう言う意味だ、秀吉？」

俺がDクラスとの出来事を話すと、秀吉は何故か納得している顔をしていた。

「そのままの意味じゃ。お主は怒ると恐いからのう。そんな状態で説教される事を考えると、プライドを捨ててまで土下座するのは当然じゃ」

「……………俺ってそんなに恐いのか？」

秀吉の何気ない言葉に俺が少々傷付いていると……………。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

姫路が心配そうな顔をして明久に駆け寄っていた。それを見た俺は羨ましそうに見ている。

「吉井、本当に大丈夫」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

今度は島田も明久に駆け寄っている。

ここで優しく気遣うと明久にちょっとしたアピールが出来るなと思
って島田を見ていたが……。

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

わざとらしく慌てて腕を押さえて転げまわる明久に、俺は呆れてい
た……無論、島田に対してだ。もし殴ったらすぐに島田を止めなけ
ればいけないが。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行う
ぞ」

取り敢えず俺から解放された坂本は他の場所で話し合うのか、教室
の戸を開けて出て行った。一瞬、俺から逃げたい為の行動かと思っ
たが、それはないかと考え直す。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路が明久にそう告げて、小走りに雄二の後を追う……。

「大変じゃったの」

秀吉が明久の肩を叩いて廊下に出て……。

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら土屋が続いた。と言うか土屋、姫路

のスカートの中を覗いてた時に付いた跡をまだ隠してたのか？

「土屋、お前いつまで……」

と、俺が土屋に突っ込もうとしたが……。

ピンポンパンポン！

“2年Fクラスの天城修哉君、2年Fクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい。繰り返しです、2年Fクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい”

突然、校内放送で俺を指名してきた。

「あれ？ 何でシュウが？」

「職員室に來いだなんて……アンタ何かやらかしたの？」

「……天城、悪い事は言わない。正直に白状した方が良いと思う」

校内放送に明久は心配そうに俺を見ており、島田と土屋が俺を問題児扱いする様な目で俺を見て来る。

「明久は良いんだが……暴力女と犯罪者に、そんな事を言われる筋合いは無いな」

「………何か今、不快な呼び方をされた様な気がするんだけど」

「………失礼極まりない」

俺が悪口にルピを付けると、島田と土屋は不快そうな顔をして俺を睨んだ。

「気のせいだろ。ってかお前等、あたかも自分達には身に覚えが無い様な言い方をしているが、十分に問題を起こしているから」

明久に暴力を振りまくったり、盗撮した写真を勝手に売り捌いているとか……これで問題ないだろうと言う奴がいたら、是非お目にかかりたいが。

「失礼ね！ 自己紹介の時にも言ったけど、ウチを問題児扱いしないでよ！」

「……俺は何の問題も起こしていない」

「……自覚が全く無いみたいだな……まあいい。明久、いつまでも倒れていないで、さっさと立て」

「う…うん」

これ以上言った所で平行線のままになるので、俺は倒れている明久を立ち上げさせた後、教室を出て職員室へと向かった。

俺が職員室に着いて数分後

「天城君！！ Dクラスの生徒に手を上げるなんて、どう言ってもりですか!？」

俺はDクラス担任教師に詰問されていた。

「落ち着いて下さい。天城がそう言う事をするのには、必ず理由がある筈です。そうだろう、天城？」

「勿論です」

憤慨しているDクラス担任教師を西村先生が宥めながら俺に尋ねて来たので、俺はすぐに答える。

「西村先生！！ Fクラスの天城君が、内の生徒に暴力を振るったんですよ！ これが落ち着いていられますか!？」

このDクラス担任教師は俺が手を下した理由を知らないのだろうか、一方的に俺が悪いかのように決め付けている。

「ですから、まずは天城の話聞いてからにしましょう」

「Fクラス生徒の話聞く気はありません！ それとも西村先生は、こんな落ちこぼれのFクラス生徒を庇うつもりですか!？」

「.....」

差別的な発言に俺は無言で顔を顰めるが、Dクラス担任教師は余り俺の事を知らないみたいだ。そうでなければ、ここまで騒ぎ立てる事はない筈。恐らく今年付けに赴任された教師なのだろう。新学期早々に担任を持った先生が頑張ろうと思った矢先、最底辺のFクラス生徒である俺が問題を起こしたと知り、憤慨しているのだろう。

そんなDクラス担任教師に西村先生が……。

「言葉を謹んで下さい。教師である貴方が、その様な差別発言をするのは如何かと思えますが？」

「!!!! …… す… すいません」

顔を顰めながら低い声で言うと、Dクラス担任教師は威嚇されたかのように、先程まで憤慨していたのが嘘みたいに無くなった。

流石は西村先生だ。少し威圧を込めただけに、相手を一瞬で静かにさせるとは。

「天城、お前がどうしてもDクラス生徒に手を上げたのかを聞かせてもらいたい」

「はい。実は……」

俺が西村先生とDクラス担任教師に、明久と一緒にDクラスへ宣戦布告をした時の事を話すと……。

「ふむ……どうやら問題があったのはDクラスの方ですな」

「……………」
「まるで弱者を甚振る様な感じでして。その時に俺は、とてもDクラスやる事じゃないと思いましたよ」

西村先生が隣の方を見ながら言うと、Dクラス担任教師は無言となっていた。

「問題児とは言え、宣戦布告をした吉井を一方的に痛めつけようとするとは……俺が天城の立場であつたら、同じ事をしているでしょう」

「……しかし、私の聞いた話では、天城君が一方的に殴って来たところ……」

「誰が言ったのかは知りませんが、恐らくソイツは俺に仕返しをしてやろうと思って、大げさに言ったんでしょう。まだ俺が信じられないのでしたら、代表の平賀や他のDクラス生徒に聞いて見て下さい。それで裏付けが取れますから」

「……………」

俺の切り返しに、Dクラス担任教師は何も言い返すことが出来ないみたいだ。

「ではすぐに確認するでしょう。天城、もう行っても良いぞ」

「そうですか。では失礼します」

退室して良いと言われた俺は、職員室から出ようとドアを開けると

……。

「疑ってすまなかったな」

「いえいえ。俺は別に気にしてませんよ、西村先生」

西村先生が謝るが、俺は気にせずに出て行った。

「さて、確認の為に代表の平賀と、天城を陥れようとしたDクラス生徒を呼びましょう」

「え…ええ、そうですね」

完全に恥を掻かされたDクラス担任教師は、すぐに校内放送を使って平賀と、嘘の証言をした生徒を呼ぶのであった。

「ったく！ 誰が言ったかは知らんが、反省していなかったみたいだな。ソイツは後で俺が説教を……」

俺が舌打ちをしながら、廊下を歩いていると……。

ピンポンパンポン！

“2年Dクラスの平賀源二君、×××君、至急職員室へ来て下さい。繰り返します、2年Dクラスの平賀源二君、×××君、至急職員室へ来て下さい”

校内放送で、平賀とDクラス担任教師に嘘の証言をした生徒が呼ばれた。

「……………どうせ西村先生と担任が説教するだろうから、勘弁してやるか」

恐らく恥を搔かされたDクラス担任教師が、物凄い勢いでソイツを問いただすだろうと思ったから。そう考えると、俺はさっきまで憤っていた怒りが一気に静まった。

「しかしまあ、西村先生がいてくれて助かったよ」

あの教師の鑑とも言える西村先生のお蔭で、事がスムーズに進む事が出来たのだから。あの担任だけだったら、Fクラスだからと言って人の話を全く聞かず、一方的に俺が悪いと決め付けていただろう。

「本当、あの人には頭が上がらないな。流石は俺の尊敬する先生だ」

明久や坂本が聞いたら嫌そうな顔をするだろうが、俺にとって西村先生はとても素晴らしい先生だと思う。

そんな俺が西村先生に感謝していると…………。

「天城君」

「ん？」

後ろから声を掛けられた俺が振り向くと、そこには木下優子がいた。

「おや？ 誰かと思ったら、木下さんじゃないか。数時間ぶりだね」

「そうね。で、貴方は新学期早々に何をやらかしたのかしら？ 校内放送を聞いた時、内のクラスの数人が驚いてたわよ」

「ほほう。それって俺がついに悪さをしたかって意味で？」

「違うわよ。皆が、“あの真面目な天城君がどうして……!?”って驚いてたの……アタシもその一人だけだ」

「おやおや？ Aクラスの木下さんが、Fクラスの俺を心配してくれるとは光栄ですな」

俺が大げさな仕草をして驚いていると、木下は笑みを浮かべている。

「別に大して心配してないわよ。アタシはただ、去年のクラスメイ卜としての誼みで聞いているだけに過ぎないわ」

「おおう！ これは手厳しい事で、もうちょっと優しい言葉を期待していたんだけど……」

「事実を言ったままでよ。それと、その面白そうな仕草は止めて。思わず笑いそうになるわ」

木下の切り返しに俺が更に大げさな仕草をすると、木下は止める様に言っ来て来た。

もう気付いていると思うが、俺と木下は去年のクラスメイトだけの関係だけでなく、お互いに軽口をたたきあう仲だ。それと同時に学級委員も一緒にやっていた。俺に近い性格なのか、木下とは馬が合って仲が良いと言う訳だ……若干、相手を見下すキツイ所はあるが。

「……………天城君、今何か失礼な事を考えなかったかしら？」

「別に何も」

一瞬、木下をエスパーかと思った俺であったが、何とか顔に出さず否定する。

「……………まあいいわ。それより天城君、貴方はお弁当を持ってきている？」

「いいや、今日は食堂で食べようかと」

「ふうん……………アタシも食堂で食べる予定だから、昼休みに御一緒にいいかしら？」

「別に構わないけど、木下さんが俺を誘うって……………もしかして俺に気があるとか？」

木下の予想外な誘いに、俺が冗談交じりで尋ねると……………。

「そんな訳無いでしょ。それにアタシだけじゃなく、愛子や久保君もいるわよ」

「はあ……………残念」

これは予想通りの返答だったので、俺はわざとらしく残念そうに咳く。

確か聞いた話では木下のタイプの男性って……。

「アタシは知的な男性が好きだって言ったでしょ？ 勿論、見た目だけじゃなく中身もね」

「だよねえ〜」

当然、俺はそのカテゴリに入らず、成績の低い俺はタイプじゃ無いらしい。かと言って俺は別に、木下に対して恋愛感情は抱いていない。

確かに木下は美人で成績優秀で、周囲からは高嶺の花とも呼ばれている。一緒に学級委員の仕事をしていた時に、クラスメイトや他のクラスの男子生徒から嫉妬されていた。木下に恋愛感情を抱いていない俺には鬱陶しく、何度も説教しようかと思った日々があった。

とまあ話がちょっと脱線していたが、俺と木下は互いに異性として見ていないと言う事であり、ただの友達に過ぎない。

それに俺の好みのタイプの女の子は、木下より胸がある……。

「……………ねえ天城君、アタシに対して物凄く失礼な事を考えなかったかしら？」

「滅相も御座いません」

何で木下は俺の考えている事が分かるんだと思いつつも、俺は必死にポーカーフェイスを保って否定した。

「本当かしらねえ？ てっきり人が一番気にしている事を考えたんじゃないかと思っただけど……」

「まさか。友達である木下さんに、そんな事は微塵も思っただけよ」

「……………」

未だに疑っている視線を送る木下に、俺は早く退散した方が良く考えて……。

「おっと。俺は今から屋上に行かなきゃいけないから、失礼するよ。じゃあ後でな」

「あつ……………」

木下に適当な口実を言いながら、逃げる様に去ったのであった。

「……………何よ、天城君ったら。アタシの前でハッキリと友達って言わなくても……………」

「ふう〜〜危ない危ない。もし気付かれたら、絶対に折檻されて
いただけるかな」

木下から何とか屋上の出入り口まで逃げ切った俺は、安堵の息を吐
いていた。

「それにしても木下の奴、何であそこまで俺の考えている事が読め
たんだ？ ポーカーフェイスで考えていたんだが……ひよっとして
本当にエスパーだったりしてな」

俺はそう考えながらも、明久達がいる屋上の扉を開けると……。

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?! 雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?! どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れな
い!?!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

……………アイツ等は一体何の会話をしているんだ?

可笑しな会話だと思いつつ近寄ると、明久達は俺が来た事に気付く。

「あれ？ シュウじゃない。いつの間に来てたの？」

「ついさっきだ。ってかお前等、さっきの会話は何なんだ？ 突っ込み所が満載で可笑し過ぎる会話だったんだが」

「そんな事より、お前がどうして職員室に呼ばれたんだ？ 放送を聞いた時は驚いたんだが」

俺が明久に尋ねると、坂本が遮るかのように話しかけて来た……まるで自身の失態を隠すかのように。

「……………Dクラスでの宣戦布告の件でちょっとな」

「え？」

「何じゃと？ それはどう言う事なのじゃ？」

坂本の質問に答えると、明久と秀吉が俺を心配そうに見てくる。

……………秀吉の顔を見て少しばかり優子が追いかけて来たかと錯覚したが、敢えて気にせず職員室での出来事を話す。

そして俺が話し終えると……………。

「何だよそれ。僕をボコボコにしておきながら、シュウに仕返しをするなんて……………」

「自業自得じゃと言うのに、許せんもの」

明久と秀吉が見事に怒っており……………。

「バカだなソイツ。普段から教師達に信頼されている天城相手に、そんな下らん事をするとは。そしたら更に手痛い反撃をされるのに」

「……愚かな奴」

坂本と土屋は俺に仕返しを考えたDクラス生徒を嘲笑っていて……。

「確かにそれは相手の自業自得だけど、天城にも問題があると思うわよ。元はと言えば、アンタが暴力を振るったりするんだから」

「そう言えば、先程また校内放送でDクラスの人達が呼ばれていましたね」

島田は呆れながら見ており、姫路はさっきあった校内放送の事を思い出した。

それと島田、いつも明久に暴力で黙らせているお前に、そんな事を言われる筋合いは無いって何度も言ってるだろうが。

「ソイツは今頃、西村先生と担任に、こっ तरी搾られているだろうな。特に担任の方は、西村先生や他の教師の前で恥を掻いたから……」

更にヒートアップしてるかもしれない俺が付け加える。

「担任と一緒に鉄人の説教か……これで天城の説教が追加されたら地獄だな」

「そうだね、シュウの説教も恐ろしいから」

「……………おい、その2人。人をあたかも鬼みたいな言い方をするな」

俺の説教を思い出したのか、坂本と明久は身震いしながら思った事を言うので、俺がすぐに突っ込むが…………。

「まあ、その件は置いてだ……………天城、さっき明久達と話していたんだが、どうして俺が今回の試召戦争でAクラスじゃなく、Dクラスに挑んだのかは分かるか？」

坂本は無視して俺にDクラスを挑む理由を聞いてきた。

「いきなり質問かよ……………まあ大方の察しは付いているが」

「ほう……………じゃあもう一つ、Eクラスを攻めない理由は分かるか？」

「どうせお前の事だ。俺や姫路さんがいれば、正面からでもEクラスに勝てるかと判断した筈だ。それに加えて、Aクラスが目標である以上、Eクラス程度と戦っても意味は無い……………とでも考えているんだろう？」

「正解だ。良く分かってるじゃねえか」

俺の返答に満足した坂本は笑みを浮かべた。

「でもシュウ、その言い方だとDクラスとは正面からぶつかるか、厳しいの？」

「ああ、確実には勝てないだろうな」

「そうなんだ……。ねえ雄二、だったら最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「？」

俺の答えを聞いた明久は、雄二にDクラスからAクラスに変更しようと言う……。その事に俺は疑問を抱き始める。

何故かAクラスに拘っている感じがするなと思いつつも俺は……。

「明久、今の俺達がAクラスに挑んだ所で瞬殺されるぞ」

「え？ どうして？」

無駄だと言うが、明久はまだ理解していないみたいだ。

「お前な……。だったらRPGゲームで言えば、レベル1の主人公がラスボスに挑みたいな物だ。それで勝てると思うか？ 無論、裏技やチートなんか一切使わないで真正面からだぞ」

言うまでもなく、レベル1の主人公がFクラスで、ラスボスはAクラスだ。

「う……。確かにそれは無理だね」

「明久でも分かりやすい説明の仕方だな。流石、付き合いが長いだけあって、明久の保護者みたいな奴だ」

明久に対する説明に、坂本は感心した様な顔をして俺を茶化す。

「茶化すな、坂本。でだ明久、Dクラスに挑むのは、Aクラスに挑む前の経験地稼ぎと下準備みたいなもの。決戦に挑む前には必要な行動だという事くらい、お前も分かっている筈だ」

「そう言う事だ、明久。お前が天城に言った、打倒Aクラスの前には作戦に必要なプロセスがあるからな」

俺と坂本の追加した説明で明久は完全に理解し、秀吉や土屋に島田、そして姫路も理解したのであった。

と、そんな時……。

「あ、あの！」

いきなり姫路が珍しい大きな声を出した。

「ん？ どうした姫路？」

「えっと、その。天城君に言った、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

姫路の質問に俺も同様に思った。確かに、坂本がいきなりAクラスに試召戦争をやると言い出した事に、明久は何の疑問も抱かずに参加しようとしていた。

ただでさえ観察処分者の肩書きを持ってしまった明久は、召喚獣によって受けた痛みがフィードバックされる。ハッキリ言って自殺行為に等しい。そんな事は当然、明久も分かっている筈なのだが……？

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為にって明久に相談されて……」

「それはそうと！」

雄二が言っている最中に明久が、いきなり遮るかのように大声を出した。

だが少しばかり遅かったな、明久。もう俺は読めたぞ。お前が姫路の為に試召戦争を起こし、勝利して良い設備を与えようとしている事を。

聞いた話だが、姫路は病弱気味で運動神経も余り無い。そんな彼女がFクラスと言う劣悪な環境に居続けてしまったら、更に体調が悪くなるだろうと明久は考えた筈だ。

明久の事だから、姫路に良い環境で勉強させる為に、試召戦争で勝とうと考えて坂本と結託したのだろう。

恐らく坂本も理由がある筈だ。でなければ、新学期早々いきなり試召戦争をやるだなんて言い出す訳が無い。まあ聞いた所で、坂本は俺に話す気は無いと思う。

坂本は俺に対して余り本当の事は言わないし、もし言った所で俺が絶対に反対すると思っっているから、俺が説教中に問い質しても沈黙を貫こうと考えているに違いない。

まあそれは友達の明久にも言える事だが……アイツの場合は誰かを守る為や庇う為に沈黙を貫いているけど。

明久と坂本は似てないようで、似ていると思っっている俺であったが……。

「それじゃ、作戦を説明しよう。おい天城、何を考えているのかは知らんが、お前もちゃんと聞けよ」

考え事をしている最中に会話が進んでいたの、俺はすぐに頭の中を切り替えて、坂本の言う作戦内容を聞き始めるのであった。

第四問

バカテスト 数学

問 以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ の中から選びなさい

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B +$$

$$\cos A \sin B$$

姫路瑞希の答え

$$(1) X = \frac{\pi}{6}$$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 \circ 』ではなく『 $^\circ$ 』で書いてありますし、完璧です。

天城修哉の答え

(1) 大変恥ずかしいのですが、解りません。後ほど解説をお願いします。

(2) ?

教師のコメント

(1) は出来なかったみたいですが、(2) は正解です。それに出来なかったからと言って恥じる事はありませんよ。西村先生が天城君に解説をすと言っていましたので、少し待って下さい。

土屋康太の答え

(1) X II およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ?

教師のコメント

先生は今までたくさん生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

Dクラスと試召戦争前の昼休みにて……。

「FクラスがDクラスに試召戦争ねえ。勝てる見込みはあるのかしら、天城君？」

「さあ、どうだろうな？」

俺は食堂で、約束した木下と一緒に飯を食っており……。

「けど天城君は災難だねえ。Fクラスの代表は一体何を考えているのかな？」

「全くだよ。新学期早々に試召戦争をやるだなんて」

他にも俺と木下の向かいに座っているAクラス生徒である工藤愛子と久保利光もいた。

「坂本は俺の前で本当の事は喋らないから、理由は分からんな」

「天城君でも分からないの？ 何時も説教してるのに？」

「あんな、工藤さん。説教しているからと言って、相手の事が分かるって訳じゃ無いんだぞ」

俺は工藤の質問に顔を顰めながら答える。

工藤は1年の終わり頃に転入して来た、俺と木下の去年のクラスメイトだった。性格は木下とは対照的でフレンドリーな女子だ。そん

な工藤の性格が幸いしてか、すぐに友達が何人か出来て、いち早くクラスのムードメーカーになった。ついでに得意科目は保健体育であり、性に関しての知識がやたらと豊富だ。本人曰く、実技で身に付けたと言ってる。それが本当か嘘かは知らないけど、確かに保健体育の成績は凄く高い。何故そんなに知っているのだった？ それは工藤が自慢げに語っていたからだ。まあ保健体育だけじゃなく、他の科目の成績も高いからAクラスにいるんだろうが。

「まあ坂本君の事はいいとして、天城君は何で試召戦争をやる事に反対しなかったんだい？ 平穩を好む君にして見れば、止めると思っただが」

「無論、反対して止めるつもりだったんだが……坂本に一杯食わされてな。試召戦争に参加せざるを得なかったんだ」

次に久保は、俺と木下が学級委員の集まりで知り合った男子だ。久保は眼鏡を掛けた理知的なイケメンで、真面目で頭も良さそうに見えるが、実際その通りだ。女子生徒には優しく接し、テストでは常に上位の記録を持つ成績優秀で勤勉なイケメン学生だ。これできめかない女子はいないだろう……優子のタイプの男性に入ると思うが、本人は何故か久保はタイプでは無いみたいと言っている。まあ、そんな事はどうでもいいとして、久保の事を聞いただけで羨ましいだろうと思っただろうが……実は久保にはちょっとした秘密があった。

「それに今回の試召戦争は、明久も積極的に参加するみたいでな」

「吉井君が！？」

俺が明久と言った途端に久保は敏感に反応して、テーブルに身を乗

り出して俺に顔を近づける。

「どうして吉井君も参加するんだ!? 彼は確か観察処分者で、召喚獣によって受けたダメージがフィードバックされるのに!」

「……………久保、取り敢えず離れてくれ。そんなに近づかれると飯が食えん」

「あ……………す…すまない。取り乱してしまった」

「……………」

俺の突っ込みに久保は咳払いをしながら、俺から離れて椅子に座る……………その様子に木下と工藤は生暖かい目で見ながら無言となっているが。

「……………しかし、吉井君はどうして参加しよう?」

「悪いが明久の友人として、黙秘させて貰う」

「……………!!…!! どうして!??」

久保はショックを受けたかのような顔になる。だって教えたら、お前は絶対に凄まじいほどのショックを受けると思っから。

「天城君、いくら君が吉井君の友人だからと言って、教えないとは酷いじゃないか! 僕は純粋に吉井君を心配して……………」

「まあまあ、落ち着いて」

「そうよ久保君。Aクラスの貴方が取り乱してたら、周りに示しがつかないわ。それに無理矢理聞き出すというのは、余り良くないと思うし」

「け…けど僕は……」

工藤と木下が宥めようとするが、久保はまだ落ち着かないので……。

「久保、お前は俺が明久の友人である事に気に食わないのは分かる。だがな、もしソレを無理矢理聞いて明久が知ったら……嫌われると思うぞ？」

「……！！……わ…分かった……もう聞かないよ」

俺がちよつとした警告をすると、すぐに身を引いた。本当にコイツは明久の事となると、面白い位に変わる。

もう気付いたと思うだろうが、久保は明久の事が好きなのだ……恋愛対象として。それは俺だけでなく、此処にいる木下や工藤も知っている。

どうして久保が明久の事を好きになったのかは知らないが、俺にはとても考えられなかった。別に同性愛自体を否定している訳ではないが、まさかこんな身近にいたなんて思いもしなかったのだ。もし明久や久保が友人でなければ密かに応援していただろうが、2人も俺の友人なので無理だった。だから俺は明久を余り久保には近寄らせず一定の距離を取らせており、久保が明久に近づこうとするのを阻止する為に俺が話し掛ける。

とまあ、そんな久保を生殺し状態にさせ続けた結果、久保の明久に

対する恋心が更に強まって今に至るのだ。その時の俺は、多少は明久と会話させれば良かったと後悔していたが。だからと言って今の久保に明久を近づけさせたら何を仕出かすか分からないので、今でもそれを続けている。

俺がそんな事を考えながら飯を食っていると……。

「所で天城君。聞き忘れたんだけど、どうして貴方が職員室に呼ばれたのかを聞いてもいいかしら？」

木下は話題を変えたいのか、俺が職員室に呼ばれた理由を聞くのであった。

「ああ、それね。実は……いや、此処で話す話題じゃないから止めておく。だから別の話を……」

「何ですよ？ 別に良いじゃない。アタシ達に話せない事なの？」

「あ、それボクも聞きたい。校内放送を聞いた時は驚いたよ。一体何があったの？」

「僕も気になっていたよ。どうして呼び出されたんだい？」

俺が他の話題にしようとしたのだが、木下や工藤、復活した久保がすぐに問い質す。

この3人は俺の事を心配して聞いたのだろうが、俺としては今此処で言いたくないのだ。いや、別に話しても良いんだけど、久保がな……。

「……………分かった。じゃあ話そう。ってかこの話をするのは、もう3回目だよ」

そして俺が職員室に呼ばれた理由と、Dクラスでの宣戦布告での出来事を話すと……………。

「何を考えていたのかしら？ そのDクラス生徒は」

「自業自得なのに、天城君に仕返しをしようだなんて……………」

「確かに大変許し難い行為だが……………吉井君に暴行をしていた事が更に許せない!!」

「「あ……………」」

木下と工藤は呆れた顔をしており、久保は俺に嘘の証言をしたDクラス生徒に憤っていた……………主に明久に対してだが。久保の反応を見た木下と工藤は、俺が話したくない理由がすぐに分かった。

「だから話したくなかったんだよ」

「「……………ゴメン」」

俺の突っ込みに2人が揃って謝ると、久保が……………。

「僕としては今すぐDクラスに試召戦争を……………!」

メラメラと燃え始めて、今すぐDクラスに行って天誅を下そうみたいな感じになっていた。

「……………悪いけど2人とも、俺もう教室に戻るから」

これ以上、久保といると他にも何か聞かれそうだと思った俺は既に食べ終えた空の食器を持って、席を立とうとする。

「それじゃあ御三方、俺は試召戦争があるから失礼するよ」

「え…ええ。一応、応援だけはしておくわ。頑張って」

「頑張つてねえ〜天城君、ボクも応援してるから」

木下と工藤は俺にエールを送り……………。

「吉井君に暴行をする奴には、僕が天誅を……………！」

「久保、試召戦争中に勝手な事はしないでくれよ」

久保の独り言に突っ込みを入れた俺は颯爽と食器を片付けて、食堂から出て行ったのであった。

試召戦争は開始されたのだが……………。

「やれやれ、開始早々に回復試験を受けなきゃいけないとは……」

「仕方ないですよ。私達の持ち点は今0点ですから」

俺は姫路と一緒に回復試験を受けていた。

既に知っているだろうが、振り分け試験で俺は欠席、姫路が途中退席なので、全科目が0点扱いとなっているのだ。試召戦争は点数が無ければ参加する事は出来ないの、0点の俺と姫路は回復試験を受けていると言う事だ。

「出来れば一科目だけに絞って、すぐに前線に立ちたいんだがな」

「そう言う訳には行かないだろうが」

「だよな」

俺の呟きに坂本がすぐに突っ込み、俺は頷きながらも回復試験を続けている。因みに今は俺の得意科目である現国だ。えっと、今度は四字熟語と意味か……これは。

「……………」

「何だ？」

「お前、得意科目に関しては姫路並だな」

「そりゃどうも」

坂本の台詞に適当に返事をしながらも俺は問題を解いており、姫路

も同様に問題をスラスラと解いていた。

俺と姫路が回復試験をやっている最中……。

「さて、そろそろ明久が逃げようと考えている頃だな。おい横田、ちよつといいか？」

「何ですか？」

坂本が横田を呼んで、メモ用紙に何かを書いた後に渡した。

「これは？」

「俺からの伝言だ。それを明久に渡せ」

「了解しました。では」

横田はメモ用紙を持ちながら、すぐに教室を出て行く。

「戦意喪失気味だと思われる明久に湯を入れるのか？」

「アイツの事だから、戦死した奴が鉄人に連行されるのを見て、自分達は良くやったと言いなながら此处に戻ろうと考えている筈だ。だからそうした」

「……………確かにアイツは自分がされるのを考えただけで、すぐに逃げ出そうとするな」

坂本の言葉に俺は頷く。

そして横田が出て少し経った後に、秀吉率いる前線部隊が戻って来た。

「秀吉、状況は？」

「うむ。守りを明久達に任せておいたから、ワシ等はその間に点数を補充しに来たじゃ」

「分かった。なら早く始めろ」

坂本が秀吉達に回復試験を受けさせようと指示すると、秀吉と前線部隊はすぐに回復試験を始めた。

「天城君、吉井君は大丈夫でしょうか？」

「さあな。アイツは一応根性だけはあるから、それなりには持ち応えれると思っけど」

「だと良いんですが……」

俺の言葉に明久を心配する姫路であったが、俺は引き続き回復試験を受けるのであった。

また少し時間が経ち、俺が回復試験の大半を終わらせていると……。

「吉井の奴！！ 絶対に後で殺してやるんだから！！」

いきなり物騒な台詞を言った島田が、須川に羽交い絞めされながら教室に入ってきた。島田の台詞により教室にいる一同が引き気味になっている。

「おい島田、明久にそんな事をしたら、俺はお前の動きを封じた後に警察に連絡して引き渡さなきゃいけないんだが……」

「あのバカはウチを見捨てたのよ！！」

島田が憤慨しながら言っているのを察するに、明久は島田を見捨てる行動を取ったのだろう。

「後で吉井はウチがグロテスクに……」

「……………取り敢えず後の事を考えて、お前には少し大人しくしててもらおう」

俺は殺気を振りまいている島田にそっと近づき……。

ドンッ！

「うっ！」

バタンッ！

島田の首筋に手刀を打ち込むと、島田は気絶したのであった。

「これでよじつと」

「……………おい天城、味方を気絶させてどうする」

俺が島田を気絶させた事に、雄二は顔を顰める。秀吉や前線部隊、回復試験中の姫路も見てて呆然としていた……………その中で須川だけは安堵しながら教室から出て行ったが。

「島田が味方殺しだけじゃなく、本物の殺人犯になる前に手を打っただけだ」

「だからと言って、此处で島田を気絶させたら支障が出るだろうが」

「それは俺が責任を持って対応するから安心しろ。と言う訳で坂本、俺は前線に行かせてもらうぞ」

「お…おい、待て！ お前はまだ完全に補充しきっていないだろうが」

「必要最低限の科目は受けたから、取り敢えず大丈夫だ」

教室から出ようとする俺に坂本が引き止めようとするが、俺は無視する。

「それに俺が行けば、姫路が完全に回復試験が終える為の時間稼ぎにもなる。他にもDクラスの連中は俺を恐れている節が見受けられるから、多少のハツタリもかけれる。それでもまだ俺を行かせないつもりか？」

「……………」

俺が行く理由を並べると、坂本は少し考えている顔をしているが…。

「分かった、なるべく時間を稼いでくれ。それと出来れば、姫路が代表の所へすんなりと進める位に敵を倒して欲しい」

「出来ればの話だがな、なるべくやってみよう。姫路、早く終わらせておけよ」

「は、はい！ 分かりました！」

俺の言葉に姫路が返事をした後に物凄い集中力で回復試験を続行し、俺は教室から出て行ったのであった。

「さて、戦況は……持ち堪えているとは言え、やはり苦戦しているな」

状況を見る限りでは、明久と中堅部隊が何とか持ち堪えているみたいだ。それと同時にDクラスが此方の時間稼ぎ目的に気付いており、早めに決着を付けたがっている。恐らく平賀が俺が回復試験を完全に終える前に早く終わらそうとしているのだろう。

明久が須川と話しているみたいで聞き取れないが、何か作戦を練っ

ていそうな感じだった。一応、明久は隊長としての役割は果たしているみたいだな……それでも後方から指揮をして、自分から戦わずに安全な所にいるけど。

俺がそう思っていると、須川が前線から引いて再び教室に戻ろうとしている。その間に須川が俺の顔を見て……。

「天城、悪いがすぐに吉井の援護を頼む」

そう言いながら、すぐに教室へと入った……何故か奴の顔が妙に活き活きとしていた顔になっていたが、敢えて気にしない事にする。

「どうやら須川は明久が言った作戦について、坂本に知恵を借りに行っただって所か。どんな作戦かは知らんが、取り敢えずは……おい明久」

「え？ ……シュウ!？」

安全地帯にいる明久に声を掛けると、明久はキョトンとして後ろを見た途端に俺の顔を見て驚く。

「どうしてシュウが？ もう回復試験は終わったの？」

「必要最低限はな……で、お前は一体、須川に何の作戦の指示をしたんだ？」

「う…うん。須川君にDクラス側にいる先生たちが、他の場所に言ってくるように偽情報を流して欲しいって頼んだんだ」

「偽情報ねえ……」

明久の作戦を聞いて何か嫌な予感がした。妙に生き活きとした須川の顔を思い出して、俺は碌でもない情報を流しそうだと思う。

まあ作戦は作戦だから、取り敢えずは須川の作戦に期待はしておくが。

「では俺も行くでしょう、いつまでも見物している訳には行かないからな」

「ま……待ってシュウ！ どうせなら指揮官の僕を護衛してくれない？ 僕がやられたら不味い事になると思うし」

尤もな事を言っている明久であつたが……。

「……………で、本音は？」

「僕を危険から遠ざけて欲しい」

「……………」

俺が本当の事を言わせると、やはり保身の為であつた。

「……………自分の身は自分で守る事だな」

「ああっ！ シュウ！ 僕を見捨てないでえ〜！」

離すまいと俺の腕を引っ張ろうとする明久だったが、俺は即座に前線へと向かった。

「ではDクラスの皆さん、今度は俺も参戦させてもらおうよ」

『天城！？』

俺が参戦するとDクラスの連中は驚いたかのような顔になっている。

『た…大変だ塚本！ 天城が来たぞ！！』

『何だと！？ もうアイツは回復試験を終えたのか！？』

「驚いている所を悪いが…：…試験召喚サモン！」

Dクラスが戸惑いながら後方にいる塚本に大きな声を出して報告している最中、俺は召喚獣を呼び出す為のキーワードを言う。

そして俺の足元からは魔方陣みたいな図形が現れ、その中心からは召喚獣が出て来た。

その召喚獣は黒のロングコートを纏っている中に防刃ベストを着て、黒のスラックスにロングブーツを穿いており、左手には鞘に納まっている刀を持ったデフォルメの俺だった。

「では行こう。俺の相手をするのは誰だ？」

『うっ！！』

俺と召喚獣が進むと、Dクラスは何故か引き気味になる。

「何をそんなに恐がっているんだ？　これは試召戦争だぞ、さっさと掛かって来い」

『ひいっ！』

目を細めながら睨む俺にDクラスの連中は召喚獣と共に恐がっており、向かって来る気配が無い。

「来ないなら……此方から攻めさせてもらう！」

掛け声と同時に俺の召喚獣が、消耗して動いていないDクラスの召喚獣に襲いかかり……。

『Fクラス　天城修哉　化学　128点

VS

Dクラス　鈴木一郎　化学　92点

Dクラス　笹島圭吾　化学　98点』

「先ずは2人」

シャキンッ！ ザシュッ！ ザシュッ！

「「ああっ！！！」」

俺の召喚獣は居合を使ってDクラスの召喚獣2体の首を刎ねると、すぐに倒した。

『Dクラス 鈴木一郎 化学 0点』

Dクラス 笹島圭吾 化学 0点』

「0点になった戦死者は補習〜〜！！！！」

2人が戦死した途端、すぐに西村先生が物凄いスピードを出しながら現れて、戦死したDクラス生徒2名を担ぐ。

「「た…助けてくれえ〜〜！！！！ 鬼の補習は嫌だ〜〜！！！！」」

「これは立派な教育だ！！ 趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎と言う、理想的な生徒に仕立ててやるから覚悟しろ！」

「「いやだあ〜〜！！！！」」

Dクラス生徒2名の叫びは虚しくも、西村先生によって補習室へと連行されてしまった。

「ふむ……………戦死云々は兎も角として、西村先生の補習授業なら受けても構わないな。あの人の教え方は丁寧で大変分かり易いから」

『なにいつ!!!』

俺の台詞にDクラス生徒達だけでなく、味方のFクラス生徒達も驚きの声を発していた。

「ちょ…ちょっとシユウ!! それ本気で言ってるの!? 自分から鉄人の補習を受けても構わないって!?!」

「お前は頭が可笑しいんじゃないのか!?!」

「あの地獄の拷問を自ら受けたいと言っのか!?!」

「天城はどこまで規格外なんだ!?!」

「……………おい貴様等、それはどう言っ意味だ?」

明久を含めた中堅部隊が失礼な事を言ってるので、俺が振り向いて睨むが…………。

『塚本お〜〜!!!! やっぱ天城は恐ろしい奴だ!!!』

『負けても自分から補習室に行くと言ってるぞ〜〜!!!』

『しかも天城は鉄人を神聖視している〜〜!!!』

『マジか!? じゃあアイツの強さは鉄人を崇拜した為に強くなっ

たと言っのか！？ 天城修哉は何処まで恐ろしい奴なんだ！！」

「……………待てコラ」

Dクラスの方も俺に大変失礼な事をほざいていた。

『だが天城は数学が苦手だと平賀が言ってた！ もう少しで数学の船越先生が来る！！ それまで何とか耐えてくれ！！』

「……………船越先生だと？」

後方の塚本の大声を聞いて、俺は少し顔を歪めた。

数学の船越先生……………45歳独身。婚期を逃し、単位を盾にし生徒に交際を申し込んでいると言う、噂の女性教師。当然それは噂ではなく真実である。

俺は以前、職員室に行つて西村先生に数学で分からない所を聞きに行つた際に船越先生が現れて、いきなり俺を自分の席に連れて、教えて欲しかったら交際しろと迫られたのだ。言うまでもなく俺は断つたのだが船越先生はしつこく、更には単位を落とされなくなかつたら付き合えと脅された。もう絶体絶命だと思いきや、西村先生が助けてくれて、俺は九死に一生を得たのだ。

そんな事があつた所為で、俺は少しばかり得意であつた数学が嫌になつて成績も落ちたのだ。数学のテストで赤点を取つた時に他の数学教師の先生が、特例中の特例として謝罪しながら追試を免除してくれたのだ。その代わり西村先生の補習授業を受ける事になつたが……………その時の西村先生は懇切丁寧に教えてくれた。

と言う訳があつた故に、数学の成績が落ちた元凶となつた船越先生には近寄らないようにしていたが、まさかDクラスが此処で呼ぶとは思わなかつた。

「船越先生が来る前に、さっさと目の前の連中を倒すでしょう」

俺はDクラス生徒の召喚獣を倒そうと思っていたが……。

ピンポンパンポーン！

《連絡致します》

「ん？ この声……須川か？」

突然、校内放送から須川の声が聞こえた。

まさかアイツ、校内放送を使って偽情報を流すつもりなのか？

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出す相手が船越先生か。俺にとっては物凄く都合だ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

何……だと？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

……………明久、お前の犠牲を無駄にはしないで。恐らく須川か坂本のどちらかが考えた作戦だろうが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「吉井隊長……アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

他のFクラス生徒達は明久が自分から自己犠牲をしていると勘違いしているのか、明久を物凄く感心しているかのような目で見ていた。

「違う！ 違うんだよ！ 僕はそんな指示を出してはいないよ！！ シュウ！ 君は分かる筈だよね！？ 僕がそんな指示を出していないって事に！？」

「……………そうは言うがな、明久。Dクラスの方をみてみる」

「え？」

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ』

『ただでさえ鉄人に洗脳された天城だけじゃなく、あんなに確固たる意思を持つてる奴等に勝てるのか……？』

Dクラスも校内放送を聞いて戦慄をするかのように呟いていた……
……ってか最後の奴は余計だったが。

「向こうは完全に勘違いしているぞ」

「うわあ~~~~!!!!　これじゃドンドン否定しにくくなっちゃよう
お~~~~!!!!!!」

俺の一言を言った後に明久は頭に手を置いて、顔を上の方に向けながら叫びを上げる。

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞー！」

「俺達も天城に続けー！！！」

Fクラスは士気が上がってDクラスに突進し始める。

「……………」

「さて、俺は引き続きDクラスの部隊を倒すとするか」

俺が再び、Dクラスの召喚獣の方に意識を向けると……。

「須川あああああああ……!!!!!!」

明久は怨念めいた叫びを上げていたのであった。

第四問（後書き）

旅人『今回は怒らないんだな』

修哉「苦手な船越先生の事を考えると、あんまりそんな気になれないんですよ」

旅人『まあ交際を迫られてトラウマになり、成績を下げた元凶の船越先生が相手じゃあ……そうなる気持ちも分かるね』

修哉「船越先生の事があるから見逃しておくが、それ以外の事だったら説教しますよ」

旅人『そうかい……ではそうしてくれ』

第五問（前書き）

いつもより若干短いです。

第五問

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

天城修哉の答え

『量子』

教師のコメント
間違つてはいないのですが、残念ながらこの問題での答えは粒子です。
私個人としては丸を付けますが。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

それと天城君が言っていましたよ。次の問題でふざけた回答をしたら容赦なく説教をします。

俺は確実にDクラスの召喚獣を薙ぎ倒していたが……。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻ってこない！ やられたか!？」

俺以外のFクラス生徒が盛り上がった土気のまま一緒に戦っている最中、段々と戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い方向へと進んでいた。工藤と森川が補習室送りになり、俺を含めた明久と

中堅部隊は残り6名。

ふむ………やはり士気が高くなったとは言え、Dクラス相手じゃ点数差が違うか。出来ればそろそろ援軍を差し向けて欲しいが。

「隙ありい〜!」

俺の召喚獣が動きが止まった瞬間に、Dクラス生徒の召喚獣は攻撃を仕掛けようとしたが……。

「甘い」

シヤキンッ! ザシユッ!

「なっ!?!」

言葉を発すると同時に、俺の召喚獣が背後から襲いかかってきた召喚獣を居合で薙ぎ倒す。

「背後からの攻撃に、声を出したら折角のチャンスが台無しだろうが」

『Fクラス 天城修哉 化学 128点』

俺の召喚獣は未だにダメージを受けずに、一人一人倒していた。

「くっ! さっきから攻撃をしているのに、何故当たらない!?!」

「召喚獣の扱いは俺達と同じく大して慣れていない筈なのに!？」

「何であそこまで正確な操作が出来るんだ!？」

それはDクラスだけでなく味方の中堅部隊も疑問に思っている……
明久は少々苦い顔をしているが。

俺には明久があんな顔をしている理由は分かる。それは……。

「天城、明久、あと少し持ちこたえろ！」

と、いきなり後ろから俺と明久に檄が飛んできた。俺が後ろを見ると遙か後方には坂本達の姿が見える。

坂本達がいると言う事は……援軍か。此方としては助かる。中堅部隊が殆ど補習室送りにされていたからな。

「援軍だ！ 合流される前に早く吉井達をすぐに全滅させろ！ そうしたら天城に集中攻撃をするんだ!!」

ふむ……そうされたら俺としてはかなり不味い状況になるな。だったらそうなる前に、何とか持ちこたえるか。

と、俺が中堅部隊に気を取られているDクラスの召喚獣に攻撃を仕掛けようとしたが……。

「させるかあ！」

「おっとー！」

俺の召喚獣の横からDクラスの召喚獣2体が攻撃を仕掛けたので、即座にかわして距離を取った。

「Fクラスの部隊が全滅するまで、俺達の相手をしてもらっぞ！」

「覚悟しろ天城！」

「やれやれ、お前達に構っている暇は無いんだが」

Dクラスの召喚獣2体が一斉攻撃を仕掛けてきたので、俺の召喚獣はかわしながら居合をやる。

シャキンッ！ ザシュ！ ザシュ！

「邪魔だ」

「くそっ！ 何でだ!?!」

「お前イカサマしてるんじゃないのか!?!」

俺の召喚獣がDクラス召喚獣を倒すと、相手が俺に文句を言った。

「そんな訳あるか。俺は明久が雑用をしている際に監視を……」

「戦死者は補習……!!!!」

「「うわあああ……!!!!」」

俺が理由を言っている際に西村先生が現れて、戦死したDクラス生

徒2人を担いで連れて行った。

凄いな西村先生は……すぐに逃げようとしたDクラス2人を一瞬で捕まえるとは。

で、残りは俺と明久、そして中堅部隊の3人だけになってしまったか。

「シュウ……雄二達が来るまで、どうする？」

明久が自身の召喚獣と一緒にDクラスの攻撃を掻い潜りながら俺の所まで来た。

コイツは回避や逃走に関しては矢鱈とずば抜けているから、俺の所にいれば安心だと思いつながら近づいたのだろう。

「どうすると言っても……坂本達が来る前に持ち堪えるしかないだろ」

「……………だよな」

「とは言え、多少は倒しても……これだけの人数相手に持ち堪えるのはキツイな」

俺と明久は前を見ながらDクラス生徒達を見て話している。そんな会話をしているのにも拘らずDクラス生徒達は、すぐには攻撃を仕掛けようとはしない。

「どうやらDクラスの皆はシュウを警戒しているみたいだね」

「下手に俺を攻撃したら反撃を喰らうと思っているんだろ」

「シユウは無傷で8体ほど倒しているからね……にしても凄いよ、そんなに倒すなんて。そこまで召喚獣を上手く操れるのは、僕と一緒に雑用をやったお蔭かな？」

「違う。お前が召喚獣を使用している際に下らん事を仕出かさないかの監視だ」

「うぐ……それを言わないでよ」

明久は苦々しそうな顔をする。

「まあその監視があつた事で俺も明久並に召喚獣の操作が可能になつたけど……」

知つての通り、明久は観察処分者なので召喚獣を使用して教師の雑用を押し付けられている。それによって明久は召喚獣の扱いに関して誰よりも長けていた。明久が2学年の中で召喚獣を扱うのに使い慣れているのは分かるが、どうして俺も召喚獣を使い慣れている事に疑問を抱くだろう。

理由は俺が召喚獣を使って雑用をしている明久を監視していたからだ。それだけで召喚獣の扱いは関係無いだろうと思われるだろうが、俺は明久の監視と一緒に召喚獣も出していたのだ。

明久は以前に西村先生以外の先生に雑用を任されていた時に、人使いが荒い先生に散々扱き使われた所為で少しかり暴走し、召喚獣を使って先生が目を逸らした隙に気絶させて逃走した事があつた。

それを偶々現場に居合わせた俺が逃げようとしていた明久を捕まえようとしたのだが、物理干渉が出来る明久の召喚獣が邪魔した所為によって、思うように簡単に捕まえる事が出来ずに苦戦していた。けれど召喚フィールドが未だに展開されていた事に気付いた俺は、自身の召喚獣を使って鎮圧させた後、フィードバックによる痛みで悶えている明久を捕まえて説教した。その事を知った西村先生が自分以外の雑用の時は、明久がまた暴走しない様に監視して欲しいと言われたので、俺は召喚獣を出しながら明久を監視していた。

もう気付いたと思われるが、俺は明久の監視も含めて自身の召喚獣の操作練習をした事によって、明久程では無いがそれなりの操作が出来ると言う訳だ。

「とまあ解説はこんな所で良いだろう」

「解説って……何を言ってるの？」

「コッチの話だから気にするな……それより、向こうもそろそろ攻撃を仕掛けそうだな」

Dクラスがタイミングを見計らっているように、Dクラスの召喚獣達が攻撃を仕掛けそうな雰囲気だった。

「だったらこれで……ああっ！霧島さんのスカートが捲れている！」

「おい明久、そんな稚拙な引っ掛けにDクラスが……」

明久がいきなりDクラスの背後を指差して叫ぶ事に、俺は呆れながら言おうとしたが……

『なにいつ!?!』

「……………引っ掛かったな」

Dクラス生徒達が一斉に後ろを向いた……男子だけでなく女子も。

おいおいDクラスの諸君、散々バカ扱いしていた明久の幼稚な引っ掛けに騙されているって事は、自分達もバカだって言ってるようなもんだぞ?

俺が内心でDクラスに突っ込みを入れていると……。

ガシャアアン!!

「は?」

『な、なんだ!?! 何事だ!?!』

明久が何を考えているのか、上靴を窓に向けて投げつけ、窓ガラスを割った。その事に俺やDクラス生徒達は一斉に窓を見る。

「うわっ! 島田さん! そんな物をどうする気だよ!」

窓の方に気を取られている隙に明久が何時の間にか消火器を持って……。

プシャアアアア！！！

Dクラスに向けて消火薬を噴射させた。

「う、うわっ！ 何だ！？」

「ぺっぺっ！ こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

「お…おい明久！ お前何を……」

俺は明久の行動を不可解に思いながらも止めようとしたが……。

「島田さん！ キミはなんてことを！ ……シュウ、逃げるよ」

「あ…明久、お前まさか」

やったのが島田だと思い込ませるようなデカイ声を上げた明久は、後から小声で俺に逃げるように言ってきた。

おい明久……逃走する為に窓をぶち破っただけでなく、消火器を噴射させたのを島田の仕業にするのかよ。

「Fクラスの島田め！ なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！ 彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！ 在学中には彼氏の出来ない状況にしてやる！」

「…………でも、男らしくてステキ…………。お姉さま…………」

そして勘違いしたDクラスは島田に対して恨み言をぶつけている……最後の女子は若干危険な雰囲気を漂わせていたが。

「…………それで明久、島田にどんな言い訳をするんだ？」

「あ……アハハハ……すまない、島田さん。君の犠牲は無駄にはしないよ」

俺の問いに明久は島田に黙祷を捧げていた…………当の本人は教室で俺によって気絶しているが。

明久、お前が島田に殴られても俺は知らんからな。今回の出来事については島田が明久を殴っても見過ごす事にしよう…………度が過ぎる行為に発展すれば止めはするが。

そう思っていると坂本達の姿が近くなつたのを見た俺は、取り敢えず劣勢から脱する事が出来たと安堵する。

しかし…………。

「だあああつ！」

ガンツ！ シュワアア

明久は消火薬を出し切った消火器を天井に投げて、ぶつけた拍子にスプリングカラーが作動した。

それによって水滴が辺りに舞う粉を落とし始めている。

「おい明久、お前は どうして……」

学校の器物を何の躊躇いもなく壊せるのかと問い質そうとしたが……。

「待たせたな、吉井、天城！ Fクラス、こんどつよしむね近藤吉宗が行きます！」

坂本率いるFクラス本隊の一人、近藤が遮ってしまった。

「サモン試獣召喚！」

『Fクラス 近藤吉宗 化学 91点』

Dクラス なかのけんたVS 中野健太 化学 43点』

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

Dクラスの塚本の撤退命令により中野や他のDクラス生徒達は退いて行ったのであった。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊と天城を回収したら一旦戻ろぞ」

Fクラス代表、坂本の命令により追撃をしようとした本隊が足を止めた。恐らく坂本は相手の本隊が出てくるのを嫌ったから、こんな消極的な命令を下したに違いない。

俺もその判断は正しいと思う。

「さて、無事なようだな。明久、天城」

「うん、まあね」

「坂本の要望に応える事が出来なかったがな」

明久は安堵しながら答え、俺は少しばかり苦い顔をしている。

「気にするな、天城。得意科目じゃない化学であそこまで善戦したんだ。にしても驚いたぞ。まさか天城があそこまで召喚獣の操作に慣れていたとはな……」

「今はそんな事どうでもいいだろう。戻るんじゃないのか？」

「おっと、そうだったな。お前等！ 一度教室に戻るぞ！」

坂本の指示により俺と明久、坂本率いる本隊が教室に戻るのだった。

教室に戻って、消耗した化学の点数を補充し終えた俺や明久達であつたが……。

「明久、よくやった」

いきなり坂本が明久にらしくなり台詞を言い放った。

アイツが褒めると言う事は……何か仕出かしたな。おまけに晴れやかな笑顔になつてるし。

「校内放送、聞いてた？」

「ああ。バッチリな」

坂本は笑顔で答える。アイツが明久に向かってあんな笑顔をするのは、明久の不幸を喜んでるからだ。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

明久は明久で取り敢えず坂本を放っておいて、校内放送を流した須川に恨みを晴らそうと躍起になつている。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

明久の燃え滾っている決意に対し、坂本は拍子抜けするような返事をする。

この反応からして、あの放送を指示した奴はやはり坂本だったか。

「やれる、僕なら殺れる……！」

「殺るなつての」

明久が須川を殺しそうな雰囲気だったので……。

「明久、確かに須川が放送したが、指示を下したのは坂本だ。そうだろう、坂本？」

「よく分かったな」

「シャアアアアアッ！！」

俺が坂本だと教えて、当の本人は正解だと言った。聞いた明久は何処からか持ち出したのかは知らない包丁を突き出して雄二に襲い掛かる。

「落ち着け、明久」

「離してシュウ！ この外道を刺した後は、頭の形を変えるほど殴らないといけないんだから！！」

「気持ちは分かるが、此処でソイツを殺したら試召戦争がFクラスの敗北になってしまうぞ」

坂本を殺そうとする明久に俺は羽交い絞めをして止めると、ジタバタと暴れている明久。

「あ、船越先生」

「!?!?!」

明久は忍者の如く俺の羽交い絞めから脱出して、即座に掃除用具入れの中に入ってドアを閉めた。

「……………逃げる事に関しては素早いな」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着を付けるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやのう」

「……………(コクコク)」

「おっしゃ！ Dクラス代表の首級くびを獲りに行くぞ！」

『おっっ！』

俺の台詞を他所に、雄二達は教室から出て行く。

「……………はあっ……………明久、坂本が言った事は嘘だ。もし船越先生がいたら、俺は即座に逃げているぞ」

「…………………………」

明久が恐る恐る掃除用具入れの扉をそつと開けて覗き……………。

「逃がすか。雄二いつ!」

教室には俺と姫路だけしかいなくなつたと分かつた途端に、明久は掃除用具入れの扉を蹴り開けて、廊下に飛び出したのであった。

「……………全く……………明久を平然と陥れる坂本に呆れるが、すぐに騙される明久も呆れるな」

「あの、天城君。私達も早く坂本君達に合流しないと」

明久と坂本の行動に物凄く呆れる俺は深い溜息を付くと、姫路が早く行こうと言う。

「いや、姫路は急ぐ必要は無い。平賀にさりげなく近づいて挑めばいい」

「さりげなく……………ですか？ でも私はFクラスですから……………」

「アイツは姫路がFクラスの生徒だと言う事をまだ知らない。だから今は姫路がDクラスに接近しても、警戒されずに素通りされるからな」

「そうなんですか……………」

「取り敢えず教室を出よう。それにDクラスの試召戦争が終わつたら、明久には後で説教しないといけないから……………」

「え？ どうして吉井君を説教するんですか？」

俺と一緒に教室を出る姫路は、明久が説教をされる事に疑問を抱く。

「アイツは試召戦争中に、窓ガラス破損に消火器の無断使用、スプ

リンクラーを勝手に作動させたんだ」

「そ…そんな事をやったんですか」

明久の罪状を言つと、姫路は汗を掻きながら苦笑する。

「まあ今は平賀に近づいて、さっさと終わらせるとしよう。行くぞ、
姫路」

「は…はいっ！」

俺と姫路は下校している生徒に紛れて平賀のいる所へと向かった。

「さてと、俺はここまでだ。後は姫路だけで平賀に近づいてくれ」

「わ…分かりました」

「それじゃあ後で」

下校中の生徒に紛れてギリギリまでDクラス本隊の近づいた俺は、
姫路に後を任せて平賀率いる本隊へと向かう。

「ちくしょう！ あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、流石にFクラスの間人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど……頼みの天城がいたら話は別だが」

「くっ！ まるで僕がシユウの腰巾着みたいな言い方だね！」

「事実だろ？ 彼氏くんは天城がいなければザコ同然だ」

明久をザコ扱いねえ。

「天城が何処にいるのかわからないが、取り敢えずお前を早く潰させてもらおうぞ」

と、平賀が本隊に明久を襲うように指示をしようとするが……。

「果たして出来るのかな？」

「え？ …………… なっ！？」

「シユウッ！？」

俺のいきなりの登場に驚いていた。

「^{サモン}試獣召喚」

『Fクラス	天城修哉	現代国語	310点
	VS		
Dクラス	本隊	現代国語	121点
Dクラス	本隊	現代国語	123点
Dクラス	本隊	現代国語	118点
Dクラス	本隊	現代国語	112点
Dクラス	本隊	現代国語	116点

「し…しまった！ 天城の得意科目だ！」

「今更気付いても遅いよ」

シャキンッ！ ザシュッ！ ザシュッ！ ザシュッ！ ザシュッ！
ザシュッ！

俺の召喚獣がDクラス本隊の召喚獣に神速の居合を使って一瞬で蹴散らした。

『Dクラス 本隊5名 現代国語 0点』

「助かったよ、シュウ！」

「残りはお前だけだぞ、平賀」

「くっ！ 吉井の近くに天城がいなかった事に油断した！」

予想外な展開になったと思っっているであろう平賀は、非常に苦い顔をしている。

「それと平賀、お前に一つ言っておく。明久をザコ扱いしているが、もしお前が1対1で明久とやったら負けていると思うぞ」

「な…何だと!？」

俺の意外な台詞に平賀は驚愕した。

「しゅ…シュウ、それって……」

「明久、それについては後回しだ。取り敢えずDクラス代表の止めは切り札に任せるとしよう」

「そ…そうだね。姫路さん、よろしくね」

「は？」

『何を言ってるんだ、この馬鹿は?』と言った顔になっている平賀。

「あ、あの……」

そんな平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が平賀の肩を叩く。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下を通らなかつたと思うけど」

未だに現状を把握出来ていない平賀に俺は内心苦笑いをしていた。平賀の戸惑いは無理もない。まさか姫路がFクラスの生徒だなんて誰もが思わないだろう。俺が平賀の立場だったら、間違いなく平賀と同様に戸惑っているだろう。

「いえ、そうじゃなくて……」

「おい姫路、早く決着を付けてくれ」

もじもじと言い辛そうに体を小さくする姫路に、俺が早く終わらせるように催促する。

「は……はい！ Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願ひします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語を申し込みます」

「……はあ、どうも」

「あの、えっと……さ、サモン試験召喚です」

『Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点

VS

「え？ あ、あれ？」

平賀は未だに戸惑いながらも召喚獣を出して、姫路の召喚獣と相対する。おい平賀、いつまでも惚けていないで戦闘体勢を取った方が良いと思うが？

と言うか姫路の召喚獣は凄く強そうだな。騎士の鎧を着て、背丈以上に大きな両手剣を持っているんだから。

「う、ごめんなさいっ」

そして姫路の召喚獣がアツサリと剣を振り抜くと、平賀の召喚獣が一瞬で倒されてしまった。

これによってDクラスの敗北が決まり、Fクラスが勝利したのであった。

第六問（前書き）

色々あって遅れました。

普段書いているやつのは3倍近く書いているんで、時間が掛かります。

第六問

バカテスト 社会

問 以下の問いに答えなさい

『三権分立と呼ばれる国の権力を3つ答えよ』

姫路瑞希の答え

『立法権・司法権・行政権』

天城修哉の答え

『立法・司法・行政』

教師のコメント

2人とも正解です。

立法権は法律を作る権限。司法権は法律に基づいて裁判を行う権限。
行政権は法律に基づいて政治を行う権限。
以上3つの権限があります。

吉井明久の答え

『立法・司法………憲法か漢方のどっちか』

教師のコメント

最初の2つは合っていますが、最後は両方とも間違えています。

土屋康太の答え

『覗き権・盗撮権・女子のパンチラ権』

教師のコメント

もうそれは国として成り立たず、無法地帯となってしまうですね。

Dクラス代表

平賀源二ひらがげんじ

討死うちじに

『うおおー！！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨かちどきとDクラスの悲鳴が混ざり、耳が響く様な大音響が校舎内に駆け巡る。

本当なら少し静かにしろと言いたい俺であるが、折角の勝利に水を差す真似はしない。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの物になるからな」

「坂本雄二さまさまだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

代表である坂本を褒める声がいたる所から聞こえる………と云うか最後の奴、お前はドサクサに紛れて姫路に告白をしているが、当の本人は全く聞いていないぞ。

それとは逆にDクラスはガツクリとうな垂れて悲壮感を漂わせている。あの様子から見てFクラスに負けた事が相当悔しいんだろうな。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

坂本にとってまだ通過点に過ぎないだろうが、それでも周りから褒められている雄二は満更でもない表情なりながらも明後日の方向を見る。

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

もう坂本は英雄扱いだ。Fクラス生徒達が坂本と握手するのを見て、相当あの教室に不満を抱いているのだろう。

「雄二！」

「ん？ 明久か」

今度は明久が坂本に近づいて……。

「僕も雄二と握手を！」

手を突き出した……握っている包丁を坂本に向けながら。

「ぬおおっ！」

ガシッ

言うまでも無く坂本は明久の手首を抑えて阻止する。

「雄二……！ どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！ フンッ！」

「ぐあっ！」

坂本が明久の手首を捻ると、明久は悲鳴を上げて握りこんでいた包丁を取り落とす。

良かったよ明久、お前が坂本を殺していたら警察に連絡しなきゃいけない所だったから。

「……………」

「……………」

明久と坂本は無言になっていたが……。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……………」

「明久、その台詞は無理があるぞ」

急に明久が笑顔で取り繕うように言っても坂本は無言だ。

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん。喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「……………はあっ」

更に明久の手首を捻る坂本に俺は溜息を吐く。

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！ 僕が悪かった！」

「……………チツ！」

ペンチを使うのは何かを曲げる気なのか？

「おい坂本、ペンチを何に使ったつもりなんだ？」

「……………ブツブツ……………」

「聞いているのか？」

「……………生爪……………」

……………明久もやる事が非道だが、坂本も十分に非道だった。

「ってか明久、お前の考えで坂本を殺すのは到底無理だぞ」

「うっつ……………」

俺の突っ込みに明久はしな垂れる。

「おい天城、このバカには後で説教しとけよ。俺を殺そうとしたんだからな」

「元はと言えば、お前があんな下らん校内放送を流す指示を出したからだろうが」

「さて、何の事やら？」

「お前な……………」

「けど天城にとっては好都合じゃねえのか？ もう船越女史に狙われる心配はないだろうが。寧ろ俺に感謝して欲しい位だな」

「……………」

どうやらこの外道は明久を陥れただけでなく、俺に貸しを作っておいた方が良くも思わないと思つてやったのだろつ。

つてか大きなお世話だ。坂本にそんな事されなくても、俺は船越先生を迎撃出来る許可を貰つていふと言つのに。

とは言え、坂本に貸しを作られたのは事実だ。ここは大人しくしておこつ。

「取り敢えず明久、お前は後で説教だからな」

「ええ！？ 何で!？」

「お前な……窓ガラス破損に消火器の無断使用、そしてスプリンクラーの作動。これだけの事をしておいて、ただで済むと思つていふのか？」

「え……あ……でも、それは作戦中の出来事だから……先生達も許してくれる筈……」

「西村先生が許すと思うか？ 俺だったら許さないぞ」

「……………」

俺の言葉に明久はうな垂れるしかなかった。

と、俺と明久がこんなやり取りをしていると……。

「まさか天城だけでなく姫路さんまでFクラスだなんて……信じら

れん」

背後から平賀の声が聞こえた。

俺が振り向くと、そこにはよたよたと歩み寄る平賀。余りに予想外な事が起き過ぎてショックを受けているんだろう。

「あ、その、さっきはすいません……」

そんな平賀に姫路は駆け寄りながら謝っている。

「いや、謝る事はない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。天城だけしか警戒していなかったからな」

姫路の謝罪に平賀は必要無いと言う。まあ確かに騙し討ちみたいだったけど、姫路が謝罪する必要は全く無い。

戦争にはイレギュラーが付き物だと付け加える平賀に、俺は代表としての責任感がちゃんとあるなと思った。

平賀は以前から負けた時には潔く認めて、それをバネに強くなるタイプだ。またDクラスと試召戦争をやる事になったら、何重の策を考えて挑むだろう。

「ルールに則^{のっと}ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

坂本に問う平賀に俺は少々気の毒だと思った。

平賀は再び試召戦争を挑む権利が回復するまでの3ヶ月間を、俺達

が使っていたFクラスの教室で過ごさなければいけない。それと同じ時にクラスメイトからも恨まれるのだ。

この試召戦争は勝てば代表は英雄扱いされて褒め称えられるが、負ければ戦犯扱いされて蔑まれて後ろ指をさされる。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「まさか、いくらお前でも今日中に済ませろだなんて酷な事は言わないよな？」

明久も俺と同じく平賀を気の毒に思っており、明日で良いかと雄二に聞く。

もし坂本がすぐにやれと言ったら……。

「いや、その必要は無い」

すぐに撤回させ……何だと？

「え？　なんで？」

「坂本、それはどう言う意味だ？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

坂本の予想外な返答に明久と俺は更に疑問を抱く。

「雄二、それはどういうこと？　折角普通の設備を手に入れる事が出来たのに」

「忘れたのか？ 俺達の目標はあくまでもAクラスの筈だろう？」

「……………成程な」

坂本の言葉に俺は納得が行った。

あくまでDクラスは通過点に過ぎないから、設備交換の変わりに何か別の要求をするだろうと俺は予想する。

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

明久は全然理解していないみたいだ。つてか明久、お前は俺が昼休みで言った時の事を忘れたのか？

「お前な…………天城が言った事を完全に忘れてるみたいだな。と言うか少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだ」

「なっ！ そんなに半端にリアルな嘘を吐かないでよ！」

「おつとすまない。近所の小学生だったか」

「おい坂本、いくらなんでもそれは無いだろうが」

俺が坂本に突っ込みを入れていたが…………。

「…………人違いです」

「ちょっと待て、明久……お前……」

「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

明久の返答に俺と坂本は信じられないような目でみると、明久は視線に耐えられなかったのか明後日の方向を向いた。

おいおい……お前は本当に小学生から『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれてるのかよ。年下にそんな事を言われるって……哀れな。

そして坂本は悲壮感を漂わせる空気から脱したかったのが、平賀に話しかける。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

やはりな。坂本がこのまま解散なんて言う訳が無い。

平賀も俺と同様に気付いている。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大した事じゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本が指したのはDクラスの窓の外にあるエアコンの室外機だ。

だがアレは本来Dクラスの物ではない。Dクラスの設備は普通の高校レベルの設備だから、あんな高価なエアコンは無い。

それが置いてあるのは、スペースの関係で此処を間借りしている隣のクラス。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

待て坂本。お前はBクラスに勝つ為の手段として室外機を壊すつもりか？

「あ……ま……まあ確かに……悪い取引じゃ無いんだが……その……」

「何か不満か？」

「いや……それはこちらとしては願っても無い提案だが……ってか坂本、それは天城に前もって説明したのか？」

「……あ……」

坂本が思い出したかのように恐る恐る俺を見ると……。

ガシッ！！

「さ〜か〜も〜とお〜？ お前は何ふざけた事を考えてんだ〜？」

「イダダダダダ!!! ま、待て天城!!! これにはちゃんと理由があるから落ち着いて聞け!!!」

俺が笑みを浮かべながら坂本の頭を思いっきり掴むと、痛そうな顔をしながらも俺に弁明を申し立てる坂本であつた。

「理由ねえ。いくら必要な準備とは言え、壊すのはやり過ぎじゃあないのかなあ?」

「イデデデデデ!!! つ…次のBクラス戦の作戦に必要なんだよ! だから離してくれえ!!!」

「そんな短い理由が通ると思ってるのか?」

「グアアアアアア~~~~!!! 握力が更に上がってねえか!!!」

握力を上げる俺に坂本は更に痛そうな顔になっている。

俺が坂本の頭にアイアンクローをやっている事に平賀だけでなく、他のDクラス生徒達やFクラスの面々も呆然としていた。

「ちょ…ちょっとシユウ! そこまでにしようよ! 試召戦争が終わるまでは手を出さないってシユウが言い出したんでしょ!?!」

「……………明久、何でそっちは覚えてて、屋上で話した事を忘れてるんだ?」

明久の微妙な記憶力に俺は微妙な顔をしながらも、アイアンクロー

は続行中。

「と…取り敢えず手を離そうよ。シユウが雄二にアイアンクローをしているのを見てみると、僕も頭が痛くなりそうだから」

坂本を擁護しているような感じであるが、以前に俺のアイアンクローを喰らった明久としては見ていたくないのだろう。

取り敢えず明久に言われたとおり掴んでいた坂本の頭を離すと、坂本はズキズキと痛みが襲っているのか頭を抱えている。

「それにさ、雄二だって何の意味もなく機材を壊す訳じゃないんだから」

「試召戦争だからと言って学校の物を壊すのはどうかと思うんだが……」

「それ位は大目に見ようよ。それにさ……」

明久が俺に近づいて小言で話しかける。

「確かにシユウの言うとおり許される行為じゃないけど、そうするだけで平賀君はクラスメイトから恨まれずに済むんだからさ」

「……………」

確かに明久の言う事には一理ある。設備交換はせず室外機を壊すだけで平賀は周りから攻められる事は無い。

「だからさ、ここは平賀君を助けると思って……………」

「……………はあっ」

明久の言葉に俺は溜息を吐きながら……………。

「……………坂本、今回だけだぞ」

「アタタタタ……………た…助かる」

「あくまで一度きりだからな。それは覚えて置けよ」

未だに頭を抱えている坂本に釘を刺しながら承諾する事にした。

「と…と言う訳で平賀、タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行ってもいいぞ」

「わ…分かった。お前等がAクラスに勝てるよう願っているよ」

何かしどろもどろな会話だが敢えて気にしない事にする。

「無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だ」

じゃあ、と手を上げて去ろうとする平賀に……………。

「待て平賀、ちょっと聞きたい事があるんだが」

「何だ？」

俺はある事を聞こうと引き止めた。

「午前中に放送で呼ばれた件だが……」

「放送……ああ、アレか」

平賀が午前中に担任から放送で呼びされた事を思い出す。

「お前と一緒に呼ばれた奴はどうしたんだ？ 今回の試召戦争で見かけなかったが」

「アイツは担任の先生から叱られた後、西村先生が罰として今回の試召戦争は参加しないようにって言われて、戦争が始まって早々に補習をされているよ」

「そうか……通りでいなかったわけだ」

ソイツはさぞかし後悔していただろうな。

「あの時はすまなかった。俺がちゃんと言ってれば、あんな事にはならず……」

「気にするな。全く反省していない奴には丁度良いお仕置きだと思ってるから」

「そう言ってくれると助かる。じゃあ俺はこれで」

「ああ。引き止めて悪かったな」

平賀は今度こそ去って行った。

「さて、皆！ 今日のご苦勞だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！ 解散！」

坂本の号令により、雑談を交えながら自分のクラスへと向かうクラス生徒達。

「雄二、僕らも帰ろうか」

「そうだな」

明久が坂本を連れて教室に戻ろうとしているが……。

「待て明久、何か忘れている事は無いか？」

「え？」

俺が笑みを浮かべながら立ち塞がった。

「忘れてるなら教えてやる。お前はその後、俺と一緒に職員室に行って先生達に器物破損の事を謝り、俺の説教が待っているんだぞ」

「……………」

俺の台詞に明久は大量の汗を掻きながら無言となっている。

「さあ行こうか」

「……………ね…ねえシユウ、それって明日にしてくれないかな？ 僕は今、物凄く疲れてて……………」

「そんな言い訳が通じると思うか？ それに明日にした所で、お前はすぐに逃げるからな。そうはさせないぞ」

「……………」

「さてと、俺は帰らせてもらっぞ」

「ちょ…ちょっと雄二！ 僕を置いていかないでよ！！」

帰ろうとする坂本に明久は引き止めようとするが……………。

「ま、自業自得だと思って天城に説教される事だな。それにお前は俺を殺そうとしてたし……………天城、遠慮なくやってくれ」

「お前に言われなくてもそのつもりだ。と言うか坂本の事について説教をする気はない。明久が坂本を殺す原因を作ったのはお前自身だからな。だから俺はお前を擁護する気は一切無い」

「……………そうかよ」

納得が行かない顔をしている坂本であったが、下手に突つつくと巻き添えに遭いそうだと思って引き下がった。

と、そんな時……………。

「あ、あの、坂本君っ」

「ん？」

坂本が教室に向かおうとすると姫路が呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

「おう、わかった」

坂本と姫路は俺と明久から離れて話を始める。

「では職員室に行くとするか、明久」

「……………」

「会話が気になるんだろうが、お前は俺と一緒に職員室へ行くぞ」

2人が会話している所を見ている明久に、俺は無言を言わず明久の腕を引っ張って職員室へ向かったのであった。

その途中で……………。

「……………悪魔に負けるか……………！ 僕の正義の心は……………」

変な事を言っている明久であったが、取り敢えず無視する事にした。

「やれやれ、俺が説教をする必要が無くなったな」

「うう……酷い目に遭ったよ」

「まあソレは明久の自業自得なんだが」

俺は明久を連れて職員室に行き、西村先生に明久が壊した物について説明しながら頭を下げて謝ったまでは良かった。けど西村先生がいきなり「吉井っ！天城が謝っているのに、事の発端である貴様が謝らんとは何事かあ！生徒指導室に來い！」と言って明久を指導室に連行されてしまったのだ。

抵抗していた明久は「助けてシユウ！」と懇願していたのだが、西村先生が有無を言わせず連れて行ってしまったので、どうする事も出来なかった。

そんな訳で取り残された俺は指導室前にいて、西村先生の説教が終わるまで明久を待って15分程経つと、明久が指導室から出て、今は一緒に帰っている途中だ。

「取り敢えず俺からも言っておこう。明久、作戦だからと言って勝手に物を壊すんじゃないぞ」

「わ…分かったよ」

明久は反省しながら頷いているが、また同じ事をするだろうと思っ
た。何しろ明久は俺に説教をされて数日経った後に、また同じ事を
しては俺に怒られると言う事が何度もあったからだ………とは言
え同じ事をするのは何か理由があるんだろうが。

ソレを問い質した所で明久は、いつもはぐらかしながら自分が悪い
と言っている。誰かの為に自ら汚名を被っているのは分かるんだが、
俺としては正直に言って欲しい。まあ明久は俺に迷惑を掛けない為
に黙秘しているんだろう。俺からして見れば何を今更と言いたいが。

「あのさあシユウ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

考え事を止めた俺は明久の方に耳を向ける。

「試召戦争中にシユウが、平賀君に“僕が平賀君と1対1でやった
ら僕が勝ってる”って言ったよね」

「ああ、言ったな」

「それって過大評価してないかな？ 僕みたいな点数の低いバカが
Dクラスの代表に勝てるとは思えないんだけど………」

「………相変わらずお前は自分を卑下しているな。少しは自信
を持ったらどうだ？」

「え？」

「まあ明久が言ったとおり点数では平賀に勝てないだろう。だがな明久、試召戦争で点数が低いからと言って相手には絶対に勝てない訳では無いんだぞ」

「？」

明久は俺の言ってる事が分かっていないみたいだ。

「つまり点数が低くても勝てる方法があると言ってるんだ」

「勝てるって……」

「……少し言い換えるか。格ゲーとかで攻撃力が高くても操作が扱いづらいキャラ、逆に攻撃力が低くても扱いやすいキャラがいるとする。お前だったらどっちを選ぶ？」

「そりゃあ、僕としては操作が扱いやすいキャラを使って地道に減らして……ってシユウ、それって……」

「漸く気付いたか」

やはりゲームに例えるとすぐに気付くみたいだ。

「召喚獣の扱いに慣れている僕でも充分に勝機があるってこと？」

「そう言う事だ。だから少しは自信を持て。2年の中でお前が一番のアドバンテージを持っているんだから」

とは言っても、点数差が余りにもあり過ぎたら勝てないが。

「そっか……僕が一番かぁ……何か自信が出てきたなあ。ありがとう、シユウ」

「一番だからと言って勉強は怠るなよ？」

「……………も…勿論だよ」

水を差されたかのような感じになっている明久であった。

「あ、それともう一つ」

「ん？」

明久はいきなり元気になって更に質問をしてくる。

「雄二の考えなんだけどさ。Dクラスとの勝負って本当に必要だったのかな？ 別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うのに」

「ああ、それか。大抵の予想は付いてる」

「どう言う事？ シユウの言った事は思い出したけど、召喚獣の操作に慣れる為なのは分かったけど……他にもあるの？」

「あくまで俺の予想に過ぎないが……アイツは多分、他のクラスにブレッシャーを与えようとか、Fクラス全員に自信をつけて士気を上げさせようとも考えたんだろっ」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「お前や坂本の目的はAクラスなんだろう？ Dクラスの設備を手に入れる事で、一部の生徒が満足して試召戦争を反対するかもしれないと思っただろう。だからそうさせない為に、不満によるモチベーションを維持しようと交換しなかつたんじゃないかと思う」

「成程。確かに雄二が考えそうだね」

予想に過ぎない俺の回答に、明久は納得するのであった。

「でもさ、僕達はホントにAクラスに勝てるのかな？」

「さあな。坂本の事だから勝つ為の策を考えているんだろう。でなきゃAクラスに勝てるとは言わないし」

「……………そうだね」

坂本は普段から明久を陥れる外道な奴だが、今回の試召戦争で人を纏める統率力と指揮能力、そして軍師としての才がある事が分かつたから期待は出来るだろう……………今の所は。

「お前も頑張る事だな、明久。Aクラスに勝ちたいと思うなら、明日の補給テストでしっかりと点数を稼ぐ事だな」

「……………ぐう」

俺の台詞に明久は苦い顔をしているが敢えて気にしないようにする。

「前にも言ったが、ゲームばかりしてないで、少しは勉強しておけ」

「教科書くらいは読んで……ん？」

「どうかしたか？」

明久がいきなり鞆を見る事に俺は聞き……。

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「……………はあっ……………勉強しろと言った矢先にこれか。先が思いやられる」

溜息を吐きながら呟くのであった。

「と言うか明久、こんなに歩いてて鞆が軽かった事に何の違和感も感じなかったのか？」

「うう……………。んじゃ、先に帰ってていいよ」

「先に帰っててと言っても、俺の家はもう目の前なんだがな」

俺が指を差すと、そこには2階建ての洋風一軒家がある。

「……………そうだね。じゃあシュウ、僕はまた学校に戻るから。また明日ね」

「ああ、また明日な」

明久は走りながら学校へと戻ると、俺は家に入るのであった。

第七問（前書き）

今回は時間があつたので早めに出しました。

第七問

翌朝、俺は学校に着いて早々、補給テストをやる前の確認で数学の教科書を見ている。

「えっと、この計算式の因数分解は……」

「何だ天城、随分と梃子摺っているな」

「……………俺は数学が苦手なんだ」

俺が計算問題を解いている際に、坂本が俺の様子を窺いながら話しかけてきた。

「苦手だと？ 意外だな。お前にも苦手科目があったとは」

「俺だって苦手科目くらいはある」

「ってかそんな計算問題で躓くか？ その式は一見難しそうに見えるが、コツさえ掴めば簡単に解けるぞ」

「……………数学の問題を解いていると……………思い出すんだ」

「何をだ？」

坂本は俺の発言に不可解そうな顔をして聞くと……………。

「恐ろしい顔をした船越先生に交際を迫られるのを……………」

「……………スマン、俺が悪かった」

すぐに後悔して俺に謝罪するのであった。

「あの時ほどトラウマになりかけた事は無かったな」

「……………大丈夫なのか？ 今日の一時間目にある数学テストは船越先生が試験監督だぞ」

「問題ない。船越先生が、もし再び俺に交際を迫ろうとしたら迎撃する。他の先生達からは許可を貰っているし」

「……………まあそうだな。充分正当防衛になるだろう」

坂本は普段から教師に信頼されている俺だからこそ貰えた許可なのだろうと考えていそうだ。

と、そんな時……………。

ガラッ

「おはよー」

明久が教室に入ってきた。

「おう明久。時間ギリギリだな」

「テストぐらいは早めに来い」

「ん、おはよう雄二、シユウ」

席に座っている俺と隣にいる坂本を見た明久は挨拶をする。

「ねえ雄二、皆には何も言われなかったの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備の事」

明久は早々に雄二に設備交換の事を聞くと、坂本は問題無さそうな顔をする。

「ああ。皆にもキチンと説明しておいたからな。問題無い」

「昨日は坂本を英雄扱いしてたからな。素直に聞いてたぞ」

「ふーん」

感心していそうな顔をしている明久を見て、昨日に俺と一緒に帰った時の話を思い出しているんだろう。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ」

後始末？ ……ああ、アレか。そう言えば島田の姿が見当たらない

いな。まだ来てないのか？

俺が教室の周りを見ているがまだ島田の姿がない事に気付く。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっただけながら行動するなんてあり得ないよ」

明久は見当違いな事を言っただけ。

と言うか明久、本当に昨日の事を忘れているのか？

「いや、俺の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい……」

と、明久が言っている最中に……。

「吉井っ！」

「いっばあっ……」

島田が現れると同時に拳が明久の顔にヒットした。顔を殴られた明久は、その拍子に倒れる。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

挨拶をする明久を見て、俺は昨日の事は完全に忘れていたと分かった。

それと島田、お前が殴った所為で明久の鼻から鼻血が出ているぞ。どれだけお前の攻撃力が高いんだ？

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器の悪戯と窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

そう言えば明久は確かに島田の所為にしていたな。明久が西村先生に説教されてたからすっかり忘れてた。

「お蔭で彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃないー！」

まだ上がる余地があつたんだな。

島田は元から彼女にしたくないランキング上位者だから、昨日の件を差し引いた所で大して変わらないが。と言うか島田、そんな不名誉なランキングが上がっているのは、お前のすぐ手が出る悪い癖があるからだぞ。下げたかつたら、そこを直す事だな。

「と、本来は掴みかかっているんだけど」

おいおい、掴み掛かっている前から既に殴っているぞ。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」

「いや、そうじゃなくてね」

「ん？ それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど」

島田が心から楽しそうな顔をして告げる。

「監督の先生、船越先生だつて」

明久は聞いた瞬間に、扉を開けて廊下を疾駆したのであった。

「さてと、吉井のお仕置きは済んだから……」

島田が俺の方に顔を向けると……。

「次はアンタよ!!」

「おっと」

即座に俺の顔を殴ろうとするが、俺は問題無く避けて距離を取った。ついでに坂本は島田が俺の顔を見た時に、巻き添えに遭いそうだと思つて避難している。

「何の真似だ、島田」

「アンタ！ よくもウチを殴つたわね！！ 絶対に許さないんだから!!」

島田は昨日の試召戦争で俺が気絶させた事を言っているのだろう。

「何が許さないだ。島田が明久を殺そうと危険な事を考えていたら、俺は止めただけだ。と言うかそんな事したら俺はお前を警察に引き渡しているがな」

「そんな言い訳が通じると思ってるの!? アンタは女の子であるウチを殴ったのよ!!」

俺が正論を言っても島田は聞く耳を持たなかった。寧ろ自分を被害者扱いしているから厚かましいにも程がある。

「お前な……………以前から散々明久を殴っておきながら、一回やられたからって被害者扱いするなよ」

「うるさい! 取り敢えずアンタはウチに殴られなさい!! それだけで勘弁してやるから!!」

「無茶苦茶な暴論だな」

島田は再び殴ろうとするが…………。

ガシッ!!

俺はすぐに島田の両手首を掴んで殴るのを阻止する。

「このっ! 離しなさいよ!!」

「殴られるのが分かってて、放すバカが何処にいる」

俺に両手首を握られている島田は逃れようと抵抗するが、俺は今の状態を維持するために力を込めて握っている。

「島田、お前がこれ以上続けるつもりなら、俺は実力行使で黙らせるぞ。それが嫌なら拳を引っ込めろ」

「なっ！ アンタ、またウチを殴る気なの！？」

「……………人を殴ろうとしておいて、勝手な事をほざくな」

「！！！！！！」

俺が目を細めながら低い声で言うと、島田は急に怯えるかのような顔になる。

「もう一度言う、さっさと拳を引っ込めろ。俺は明久と違って、向かって来る相手には容赦しない。たとえ相手が女だとしてもな」

「……………」

「それとも俺に説教されたいか？」

「……………わ…分かったわよ！ 止めればいいんですよ！！」

本気でやると分かった島田は拳を解いて力を抜くと、俺は掴んでいた島田の両手首を離す。

「けど天城、女の子相手でも容赦しないって正気？ どうかしてるわよ」

「女が男を平気で殴っておいて許されるとでも思ってるのか？俺からして見れば、お前の行動がどうかしてる。そんな事をしているから明久に……」

「天城、そこまでにしとけ」

俺が言っている最中に坂本が割って入り……。

「そうじゃぞ修哉。ここは落ち着くのじゃ」

何時の間にか教室に来ていた秀吉も参加した……何故か秀吉の髪型がポニーテールだった。が敢えて気にしなかった。

「2人とも邪魔しないでくれ。この際だから島田にハッキリと……」

「悪いがそれは後回しにして欲しい。俺達Fクラスは補給テストが終わり次第、Bクラスと試召戦争をするんだ。もし此処でいざこざが起こったのをBクラスの連中に知られたら面倒な事になる」

「……………」

坂本の言葉に俺は黙った。

確かに此処で島田と言い争えばFクラスの士気は下がるだろうし、Bクラスに知られたら付け入る隙を与えてしまうので……。

「……………分かった」

俺は仕方なく止めるにした。

「助かる。島田、お前も穏便に頼むぞ」

「ふん！ ソイツがウチを殴るからいけないのよ！」

島田は颯爽と自分の席に座り数学の教科書を出して内容を確認する。

「やれやれ……………天城にしては意外だったな。まさかお前があんな事を言い出すとは……………女相手でも容赦しないって」

「島田以外の女子が聞いたら怒ると思うのじゃ」

「じゃあ2人は俺に“島田に大人しく殴られる”とでも言うのか？」

俺の質問に坂本と秀吉は何とも言えなさそうな顔をする。

「いや、そこまでは言わないが」

「いくらお主が教師達に信頼されておるとは言え、女子を殴ったら問題になるのじゃ」

「ちゃんと理由を話せば先生達だって理解してくれる。それに女だからって理不尽な事をしても許されると言う、下らん考えを持っている奴がどうかしてる」

「……………」

「って、今はそんな事を言ってる場合じゃないな。苦手な数学の確認をするか」

俺はそう言うと、すぐに席に座って再び数学の教科書を見るのであ

った。

「ふうっ……少し疲れたな」

午前中の補給テストは取り敢えず四教科を終えて昼休みに入った。

「うむ。疲れたのう」

俺の隣にいる秀吉も俺と同調みたいで疲れたと言う。

ってか秀吉、朝も思ったんだが何でお前は髪型をポニーテールにしてるんだ？ 男のお前がそんな髪型をすると凄く違和感を感じるぞ。

と、俺がそう思いながら明久の方に近寄ると……。

「うあー……づがれだー」

明久は全て出し切ったのような声を出しながら机に突っ伏していた。

「大変だったな、明久。一時間目が特に……」

俺がそう言つと一時間目の光景を思い出す。

あの時はテストが始まる前に船越先生が明久に迫つて交際云々の話に突入したのだ。明久は船越先生に必死の説得（？）をして、明久の家の近所のお兄さん（39歳ノ独身……お兄さんじゃない気がするが）を紹介した。昨日の呼び出しはその人を紹介する為だったと言つ事にして。

明久に迫っている最中に船越先生が、時折俺を見ていたので迎撃出来る準備を構えていた。そんな俺を見た船越先生は諦めたかのように明久の方をじつと見るようになっていたが、それでも俺は一時間目のテストが終わるまで終始気を抜かずに構えていた。隣にいた秀吉は苦笑していたが。

そんな事があつて、今の明久は体力と精神の両方がかなり磨り減っているのだ。物凄く疲れているのだ。

「まあこれでもう船越先生に狙われずに済むから安心だな、明久」

「そ…そうだね」

「災難じゃつたのう」

明久が頷くと、秀吉は気の毒そうな顔をして言う………秀吉の顔を見た明久は何故か見惚れているような顔をしていたが。

おい明久、お前は秀吉の髪型を珍しそうに見ているんだよね？ 自分の好みのタイプだと思つて見てはいないよね？

俺が危険そんな感じで明久を見ていると……。

「……………（コクコク）」

何時の間にか土屋が俺達の近くにいた。

コイツは相変わらず気配を消しながら近づいているな……………まあ知っていたが。

「よし！ 昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「坂本、過食は体に悪いと思うが」

勢い良く立ち上がって疲れを感じないかのように食べようとしている昼飯を言うと、俺はすぐに突っ込む。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にしていい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

土屋が下心丸出しで頷いていると……………。

「って、天城も一緒なの？」

「人の顔を見てすぐに嫌そうな顔をしないで貰いたいんだが」

島田は俺を見て不機嫌そうな顔をしてきた。

どうやら島田は朝の出来事について、まだ根に持っているらしいな。

「言っておくけど、ウチはまだ許していないんだからね」

「許してもらおう為に殴られるのは嫌だぞ」

「何よ。随分と器の小さい男ね」

「そう言う問題じゃないんだがな……」

島田の発言に俺は呆れながら呟く。つてかコイツは仕返しと言う名の暴力を振るわないと気が収まらない性質なのか？ もしそうだとすれば幼稚な奴だ。

そんな俺と島田が不穏当な会話をしていると……。

「じゃ…じゃあ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを……」

「明久、塩水を英語にした所で意味は無いからな」

明久がいきなり仕様も無い事を言い出したので、俺がすぐに島田から視線を外して突っ込みを入れた。

「と言うかお前、相変わらず貧しい食生活を送っているんだな。俺は何度も言った筈だぞ。家族からの仕送りをゲームや漫画に全て費やすとな」

「う……でも、面白い作品が一杯あるからつい……」

「これも何度も言ってるがな、そんな事をし続けると仕送りが来なくなるって。その内、家族の誰かが来て明久の一人暮らしを止めさせようと思うぞ。あくまで俺の予想だがな」

「……………」

俺の発言に明久は何も言い返さなかった。と言うより何か思い当たる節がありそうな感じだが。

「やっぱり天城も知ってたか。明久の食生活を」

「一応な」

坂本の言葉に俺は頷く。

以前に明久の家へ遊びに言った時、大量のゲームや漫画がある代わりに食事が貧相だった事に疑問を抱いたので聞いて見ると、殆どの仕送りを趣味に使っているとアツサリと言ったのだ。

そう言った明久に俺は物凄く呆れ顔になりながらも、何度も忠告をしていたのだが、当の本人は現在に至るまで同じ事を繰り返している。

明久、もう仕送りが来なくなったら俺は知らんからな。

と、俺がそう考えていると…………。

「あ、あの。皆さん……………」

姫路が俺達に声を掛けてきた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

昨日の約束？ 何だソレは？

「おお、もしか弁当かの？」

「何だ？ 弁当を食べる約束でもしてたのか？」

「うむ。昨日、修哉が職員室に行ってる最中に姫路が全員分の弁当を作ると言ったのじゃ」

「ほう。だから姫路は弁当の入った大きいバッグを持っていると言
う訳か」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

姫路は体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあ〜」

顔を綻ばせながら安堵する姫路。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね」

姫路とは逆に不機嫌そうな顔をして明久を親の敵のように睨む島田。そう言えば島田は明久に好意を抱いていたんだっただんな。だったら弁当を作れば良かっただろうに。

「それでは、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行こうかのう」

「そうだね」

秀吉の提案に明久が賛成する。

まあこんな腐った畳のある所で姫路の作った弁当を食べるのは良くないと思っただろう。此処より屋上の気持ち良い空間で感謝を込めながら食べた方が良いと俺は思う。

「そうか。それならお前等は先に行っててくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田が坂本と一緒に飲み物を買に行こうとする。

大方、明久達の中に俺も混ざって屋上に行くのが嫌だと思って坂本

に付いて行くこうと思ったんだろう。自業自得だと言っのに何時まで根に持っているんだか。俺は島田の方が器が小さいと思う。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

坂本は島田の同行に感謝しながら受け入れている。恐らく坂本も俺と同じ事を考えている筈だ。朝の出来事や先程の俺と島田の会話を見て、連れて言った方が良いと思ったに違いない。

「きちんと俺達の分をとっておけよ。特に明久」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分からないけどね」

「そう遅くはならない筈だ。じゃ、行ってくる」

坂本と島田は財布を持って教室を出て行った。飲み物を買う為に一階の売店に向かったんだろう。

「僕等も行こうか」

「そうですね」

明久はそう言いながら姫路が抱えていたバッグを持って教室を出ようとしたが……。

「スマンが俺はちょっとトイレに行つて来る」

「そう。屋上で待ってるよ」

「ああ」

俺は一足先に教室から出てトイレに向かった。

その時の俺や明久達はまだ気づかなかった。これから屋上で悲劇が起こるといふ事を。

「さてと、さてと屋上に行くとするか」

トイレで用を足した俺はすぐに屋上へと向かう。

と、その時……。

「そんなに急いでどうしたの、天城君？」

「ん？」

秀吉の姉である木下優子が俺に話し掛けてきたので足を止めた。

「木下さんじゃないか。何か用か？」

「貴方が走ってたのを見て声を掛けただけよ。それに元学級委員の貴方が廊下を走るのはどうかと思うけど」

「悪い悪い。ちょっと急いでいたからな」

「もしかして職員室に来いって呼ばれたの？」

「違う。ってか木下さん、俺がまた問題を起こしたみたいな言い方をしないでくれるかな？」

「冗談よ。気を悪くしたなら謝るわ」

俺がヒクヒクと笑みを浮かべて言うと、木下は誠意の籠っていない謝罪をする。

「そう言えば聞いたわよ。試召戦争で貴方達FクラスがDクラスに勝ったみたいね」

「意外か？」

「それなりにね。天城君だけじゃなく、姫路さんもいたから勝てたんでしょ？」

「……その情報からして、もう姫路がFクラスにいるって事は他のクラスにも知れ渡っているみたいだな」

木下の質問に俺は特に焦る事も無く言い返す。

「ええ。姫路さんがFクラスにいたって事を聞いて、みんな驚いていたわよ」

「そうか」

「でもアタシとしては姫路さんの事より、他の事に疑問を抱いているわ。どうしてFクラスは設備交換をしなかったのかしら？」

「さあ？ 何でだろうね」

「質問を質問で聞き返さないで欲しいんだけど」

疑問を問う木下に俺は聞き流すと、木下は目を細めながら言った。

「悪いけど、その問いに関してはノーコメントだ」

「何だよ。それくらいは教えてくれたって良いじゃない」

「いくら元クラスメイトだからと言って、試召戦争についての情報は教えられないよ。もし木下さんが俺の立場だったら教えてくれるのかな？」

「……………確かにそうね。ごめんなさい、さっきの質問は無かった事にして」

「助かるよ」

流石に友達とは言え、他のクラスの試召戦争に対しての情報を聞き出すのはいけないと思った木下はすぐに謝罪した。

「所で、天城君は何処に行こうとしたのかしら？」

「屋上に行って昼飯を食べる約束をしているんだ」

「……………そう。急いでいるんなら早く行った方が良いわよ」

「おう、そうする。じゃあな」

何やら木下が少々残念そうな顔をしていたが、俺は気にせず屋上に向かうのであった。

「木下と話して少々遅れてしまったな。明久が全部食ってなければ良いけど」

屋上の入り口前に着いた俺はドアを開けると……………。

「……………は？」

そこには姫路と倒れている土屋に、ジュースをぶち撒けて倒れている坂本、そして何やら怯えながら相談している明久と秀吉がいた。

島田が何故かいなかったが。

何か妙な雰囲気だったので俺は思わず隠れた。

「あつ！ 姫路さん、アレはなんだ!？」

「えっ？ なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見ている最中……。

「何で明久は倒れている坂本に弁当を無理矢理……っておい」

その隙に明久は姫路が作ったと思われる弁当を坂本に食べせると、坂本は痙攣しているかのように体を震わせて死んだみたいになった顔になっていた。

………明久が楽しみにしていた姫路の作った弁当を食べないって事は相当不味いのか？ ってか坂本は死ぬ寸前になっているんだが。

「あ…あれえ〜、シユウじゃない。随分と遅かったねえ〜」

「お…遅かったではないか、修哉よ」

「あ…ああ」

隠れている俺を見つけた明久と秀吉は声を掛けると、俺は近づいて明久達の所に近寄って胡坐を掻く。

「どうしたんですか、天城君。来るのが遅かったみたいですけど」

「……ちよつと友達に会つてな」

「そうですか。もう少し早く来てたらお弁当を食べれたんですけど」

「そ…それはすまなかつたな」

何故だろう。姫路がお弁当と言つた瞬間に危険なオーラが感じるのだが。

（おい二人とも、大体の予想は付いているんだが、一体何があつた？）

（う…うん。ムツツリーニが姫路さんのお弁当を食べてすぐ倒れちゃつて）

（その後は雄二も食べた瞬間に倒れてしまったのじゃ）

（姫路さんの作つたお弁当が凄く危険だと判断した僕等は、弁当を全て雄二に食べさせたんだ。それで雄二はあんな状態になっているわけ）

（……………）

俺が小声で明久と秀吉に事情を聞くと、俺は無言になった。

坂本と土屋が一瞬で倒れるって……………ハッキリ言つて姫路の料理は毒物と言つても過言じゃないな。

「なあ姫路、ちよつと聞きたいんだが」

「はい、何ですか？」

「お前の作った弁当に何か隠し味になる物でも入れたのか？」

でなければ二人がすぐに倒れる訳がないからな。

「えっと、それぞれのおかずには硫酸や硝酸、クロロ酢酸を入れました」

「「「」」」」

「……………今何て言った？ 硫酸？ 硝酸？ クロロ酢酸？ 何でそんな物を入れるんだ？ 可笑し過ぎるにも程があるぞ。」

隠し味の中身を聞いた明久と秀吉は更に体を震わせている。

「……………姫路、何で化学薬品を入れるんだ？」

「そうした方が味が更に美味しくなると思いました」

「……………コイツ、料理を冒涇していないか？」

「……………ならハッキリ言おう。姫路、君は」

「ちょっとシユウ？ 君は何を言おうとしているのかなあ？」

俺が姫路にもう弁当は作らなくていいと言おうとしたが、明久が即座に俺の口を塞いだ。

「むぐむぐ!!」

「シユウ、ちょっと向こうへ行こうねえ」

明久は俺の口を塞ぎながら姫路から距離を取ると……。

(どう言ってもりだ、明久。何故止める？ お前は聞いてなかったのか？ 姫路がどれだけ料理を冒瀆しているのかを)

(何考えているんだよ！ もしシユウが弁当はもう作るなって言ったら姫路さんが凄く傷つくじゃないか!!)

(あのなあ、この場合は気遣うんじゃなくてハッキリ言った方が良いぞ。俺は化学薬品の入った料理なんて食いたくもない。増してや死にたくも無い)

(だからと言って、一生懸命に弁当を作った姫路さんに、そんな事を言ったら失礼じゃないか!)

(バカかお前は。姫路に気を遣うのと俺達の命、どっちが大事なのか分からないのか?)

(そ…それを言われると……)

俺を説得するが、すぐに意思が弱まった。

(とにかく、俺はハッキリと言っからな。邪魔するなよ)

「ちょ…ちょっと!?!」

明久から離れた俺はすぐに姫路のいる所に行く。

「スマンな姫路。で、さっきの続きだが……」

「えっと、その前にデザートを食べてからにしませんか？」

何……だと？ まだ他にもあったのか？

姫路が鞆から容器を取り出すと……。

「ああっ！ 姫路さんアレはなんだ!？」

「明久！ 次は俺でもきつと死ぬ!」

明久がさっき使った手をもう一回使おうとしたが、さっきまで倒れていた坂本が起き上がって必死に止めた。その途中から秀吉も一緒になって相談し始めている。

「……………もう付き合いきれん」

俺は明久達が相談をしている間に屋上から去ろうとする。此処で俺が姫路に本当の事を言おうとしても明久達が阻止するだろうと思っただからだ。

「あの、天城君。何処へ行くんですか？ デザートは……」

「悪いが遠慮しておくよ。それに俺はまだ飯を食ってないからな。デザートはあの3人にでも食わせてやってくれ」

「……………でも、一口くらいは……………」

「俺は今デザートより飯を食いたいからな。それじゃあ」

引き止めようとする姫路であったが、俺はすぐに屋上から去って行った。俺が屋上から出る事に気付いた明久達は阻止しようとしたのだが、姫路にデザートを勧められたので出来なかった。

そして屋上から去った俺はすぐに食堂へ行って、昼飯を食べて事無きを得たのであった。

第七問（後書き）

旅人「ハッハッハッハ！ 見事に姫路の弁当から回避したねえ、修哉」

修哉「明久には呆れますよ。何でハッキリと不味いって言わないのか」

旅人「アイツは女の子を傷つかせない為にああ言ってるからな」

修哉「だからと言って、命を散らしてまで気遣う必要は無いでしょうに。ってか坂本や秀吉にも言える事ですけど」

旅人「基本的にフェミニストだからね」

修哉「命に係わるなら、そんな物はドブに捨ててでも本当の事を言えば良いのに………はあっ」

第八問

俺は食堂で昼食を終えて教室に戻ると、屋上にいた明久達が既に戻っていた。特に土屋、坂本、秀吉がお茶をがぶ飲みしている。

教室に戻った俺を明久達は恨みがましい目で見ていたが、敢えて気にしないでいた。と言うか、最初から素直に死にたくないから食わないと言えば万事解決なんだが。

「で、結局デザートは秀吉が食ったんだな」

そして俺は隣の席でお茶を飲んでいる秀吉に聞く。

「う…うむ。…しかし、胃袋の強度を誇るワシでさえやられるとは……恐るべし」

「あのなあ。いくら胃袋に自信があるからと言って、危険な化学薬品の前では無意味だぞ。ってか化学薬品を聞いたのにも拘らず、それでも食べる秀吉もどうかと思うんだが」

「で、何でお茶を大量に飲んでいるんだ？」

「お茶には殺菌作用があるからのう。だから飲んでおるのじゃ」

「……確かにそうだが、お茶程度で殺菌されるのか？」

ゴクゴクの飲み続ける秀吉に突っ込む。

硫酸や硝酸やクロロ酢酸がお茶なんかで殺菌されるとはとても思え

ない。お茶を飲んでいる秀吉達を見ると多少は回復しているみたいだが。坂本や土屋を見ると、お茶のお蔭で何とか復活している。

それにしても、まさか姫路があそこまで酷い欠点があるとは知らなかった。料理に化学薬品を入れるなんて常軌を逸している。と言うか姫路は化学薬品を何処から調達しているんだ？ 一般には簡単に買えない物なんだが。

まあ姫路に何処で調達したかなんて聞く気はないし、知りたくも無い。取り敢えず姫路が再び明久達に弁当を作って出したとしても俺は絶対に食べない。たとえ姫路が食べて下さいと言ってても化学薬品の入った料理はいらなと言っ、それでもしつこかったら不味い毒物料理なんか食いたくないと言っ……俺がそう言おうとしても明久達が阻止するだろうが。

と、俺が考えている最中に……。

「そう言えば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

島田が坂本に試召戦争について聞こうとしていた。

あれ？ そう言えば島田は何で屋上にいなかったんだ？ 既に坂本は屋上に着いていたのに島田がいないなんて……まあいいか。別に俺が気にする必要は無い事だし。

「朝に坂本がBクラスと相手をするって言ってたけど、どうしてB

クラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

島田の質問には誰もがそう思っているだろう。Aクラスを目標としているFクラスとしては、態々Bクラスを相手にする必要は無いと考えているから。

「正直に言おう」

坂本が神妙な顔をして……。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」
勝てないと断言した。

明久達は意外そうな顔をしていたが、俺は当然だと内心で頷く。

確かに坂本の言うとおり、今のFクラスでAクラスに勝てる要素は一つも無い。点数の低いFクラスが奇襲や不意打ち、先制攻撃がどんなに上手く行った所で、Aクラスはそれを簡単に押し退ける実力があるので返り討ちに遭うのがオチだ。

坂本はDクラスとの試召戦争に勝利したFクラスの士気は上がっているから、このままAクラスにも勝てると思っっている奴がいるだろうと考えて正直に言ったのだろう。

「それじゃ、ウチ等の最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんな事は無い。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

島田の台詞を引き継ぐように明久が間に入ってきた。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「まさかAクラスと戦う為の準備として、Bクラスを利用する気か？」

「その通りだ。よく俺の考えが分かったな、天城」

「何となくだが」

「ちょっとシユウに雄二、僕達にも分かるように説明してよ」

俺と坂本の会話に明久は付いて行けないみたいに言ってくる。

「じゃあ明久、確認だが試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

坂本の質問に明久は分かるように言ってるが、俺は絶対に知らないだろうと思った。

明久、見栄を張らず素直に知らないと言えよ。そしたら俺が答えてやるのに。

因みに坂本の質問の答えは、下位クラスが負けたら設備のランクを一つ落とされるだ。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされる訳だ」

近くにいた姫路から答えをこっそり教えてもらった明久が答えると、坂本は少々呆れながらも話を続ける。

「そうだね。常識だね」

だったら常識と言える答えを姫路に聞いて今理解したと言った顔をしていたんだ？

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

阿呆。そんな訳無いだろうが。

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの体にする動きがっ」

明久のバカな回答に坂本が土屋にペンチを用意するように指示をするので……。

「明久、分からないなら分からないって素直に言え。上位クラスが

負けたら相手クラスと設備が入れ替えられるんだよ」

「そ…そうなんだ」

今度は俺がフォローを入れると、明久は助かったみたいな顔をした。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられる訳だね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

坂本の言葉に姫路が聞き返す。

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。先ず上手く行くだろう」

Bクラスに勝てればの話だけだな。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と言った具合にな」

「なるほどねー！」

明久は理解して分かった顔をする。

流石のAクラスと言えども、休みも無しに連戦するのはキツイ筈だ。逆にFクラスは連戦になっても、設備に対する不満と言う原動力があるから続けられる。おまけに体力があり余ってる男子生徒ばかりいるから連戦しても問題は無い。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに……」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？ こちらに姫路がいると言う事は知れ渡っている事じゃろう？」

確かに秀吉の言う通りだ。一騎討ちに持ち込んだ所で必ず勝てる訳でもないし、姫路がFクラスにいる事はもう他のクラスに知れ渡っている。現にAクラスの木下優子が知っているのだから。当然、何処のクラスでも姫路についての対策を練っている筈だ。

「その辺に関しては考えがある。心配するな」

「……………坂本、それは本当に勝算があるから言ってるんだよな？」

「勿論だ」

「……………ならいいが」

自信満々に答える坂本に俺は取り敢えずと言った感じで言うが、内

心余り信じる事が出来なかった。

いくら坂本がああ言っても不安だ………だが俺にはAクラスに勝てる策が浮かばないから、ここは坂本の言葉を信じるしかない。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かい事はその後で教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

明久もここは坂本を信じるしかないと思った感じた。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告を……」

坂本は明久にBクラスに行けと言つてる最中に……。

「どうやら坂本は説教するより体罰を与えた方がいいかもな」

俺がポキポキと指を鳴らしながら、いつでも坂本を殴る準備をする。

「……………ゴホンッ！ 明久、冗談だ」

「冗談？ 僕にはとてもそうは思えなかつたけど？」

坂本は俺を見て冷や汗を掻きながら咳払いをしてやり過ぎですが、明久はジト目で見ている。

「あまり調子に乗るなよ、坂本。いくらお前が代表だからと言って、やっていい事と悪い事があるぞ。これ以上、明久を陥れるなら今から此処で説教してやるうか？」

「……………すみませんでした」

俺の低い声に坂本は土下座して謝罪した。

「よろしい。ならば俺がBクラスに言って宣戦布告しても構わないだろう？」

「……………どうぞ」

「あ、シユウが行くんだつたら僕も一緒に行くよ」

俺が土下座している坂本に確認を取ると、明久も一緒に行くと言いつ出す。

「明久、今回は俺だけで充分だ」

「でも一人だけで大丈夫なの？　もし宣戦布告してBクラスにリンチでもされたら……………」

「問題無い。そうなたとしても一人だけ伸せば向こうから勝手に退いてくれる」

「じゃが修哉よ、そんな事したらまた教師に呼び出されるのではないのかの？」

「その時は俺を陥れようとしたDクラスの奴と同じ運命を辿っても

らっ」

明久と秀吉の質問に淡々と答えながら、俺は教室から出ようとする。

「それじゃあ、ちよっくら行って来る」

俺はそう言って教室から出たのであった。

「大丈夫かな？ シュウだけに行かせて……」

「明久と違って、天城はそれなりの対応は出来るからな」

「雄二、僕を行かせようとしておいて、よくそんな事が言えるね」

「まあ修哉は他のクラスでもよく知っておるから、心配は無いと思うのじゃ」

「……それに天城は荒事には慣れている」

「天城君に何かが起こらなければいいですけど」

「ふんっ！ ウチに言わせれば、女の子を殴る天城にはお仕置きされて欲しいわ」

「……島田、まだ根に持ってるのかよ」

「さて、さつさと宣戦布告をするか」

Bクラス前に着いた俺はドアを開ける。

「すいませ〜ん。Bクラスの代表はいますか〜？」

「ん？ 修哉か」

「やあ和人。久しぶり…… ってそんなに経っていないか」

俺が代表を呼ぶと、目の前にいる赤味が帯びた茶髪の男子生徒が俺の方に向かってきた。

「もしかして和人がBクラスの代表か？」

「いやいや、俺じゃないよ。ってか聞いたぞ修哉、お前Fクラスにいるんだって？ しかも訳ありで振り分け試験を受け損ねたみたいだな」

「まあな」

親しげに話す男子生徒の名は佐伯和人^{さへきかずと}。俺の幼馴染だ。

「俺としては残念だよ修哉。もし試験を受けてBクラスに来てくれたら、一緒に試召戦争をやって名コンビになろうと思ってたんだが」

「それは嫌味か？ 俺程度がBクラスに来れる訳がないだろうが……
…ってか和人、ちょっと離れてくれないか？」

「気にすんなよ。俺とお前の仲じゃないか」

「……………その台詞を女子が聞いたら完全に誤解されるだろうな」
寄り添うかのように腕を俺の肩に置いて、甘いマスクを浮かべながら俺に話しかける。俺と和人の近くにいる女子生徒は和人の笑みを
見てウツトリしている。

もう気付いていると思うが、和人はかなりのイケメンで女の子からは物凄くモテている。おまけに女子に対する接し方も巧く柔らかな笑みを浮かべて、見事に落とすプレイボーイだ。女子に告白された回数は20〜30を軽く超えている。正に男の敵と言えるだろう。

「で、お前が代表じゃ無いなら、一体誰なんだ？」

「ああ。代表はあそこにいる……………」

「おい佐伯、男相手に気色悪い事してんじゃないやねえよ」

和人が指した方向を見ると、若干キノコ頭みたいな男子生徒がいた。

確かコイツは……………。

「気にすんなよ根本。これは幼馴染のスキンシップだ」

「そうかよ。で、天城って言ったか？ 俺に何の用だ？」

根本……あ、もしかして根本恭二か。確か噂ではカンニングの常連で目的の為ならば手段を選ばない奴だと聞いたな。

余り噂とかは信じない俺だが、何度も耳にしているので恐らく真実なのだろう。見た目で判断してはいけないんだが、いかにもあくどい顔をしているので余計に真実味が増した。

まあそんな事はどうでもいいから、さっさと用件を済ませよう。

「えっと……俺達FクラスはBクラスに試召戦争の宣戦布告をしに来た」

『何だと!?!』

「ほぅ」

俺の宣戦布告にBクラス全員が驚いている中、和人だけは大して驚かず面白そうな顔をしている。

「正気か? Fクラス風情が俺達Bクラスに勝てると思ってるのか?」

「だから宣戦布告しに来たんだよ。それと和人、いい加減に離れてくれ」

「はいはい」

和人、お前は俺が言わなきゃ離れないのかよ。

「そう言う訳で明日の午後に挑むから、どうぞお手柔らかに」

「……………どうやらDクラス程度を倒した位でいい気になっているみたいだな。だったら教えてやる。お前等クズ揃いのFクラス風情が誰に向かって物を言っているのかをな」

「では承諾と言う事でいいんだな？　だったら俺はこれで失礼する」
挑発には乗らずに俺は教室から出ようとするが……………。

「まあ待てよ。その前に俺達からの挨拶を受け取ってくれ」

根本は俺に何かを渡すように引き止めた。

「何をだ？」

「はっ。分かってんだろ？　……………お前等！！　ソイツに挨拶をしてやれ！！」

『うおおおお……………！！！！！！』

根本の指示により、Bクラス生徒達が一斉に俺へと襲い掛かってきた。

「やはりこうなるか。仕方ない」

俺は大して慌てずに襲い掛かってくる一人を伸そうとしたが……………。

バキッ！！

「ぐあつ!!」

「なっ!? お…おい佐伯! 何の真似だ!？」

「ん？」

俺に攻撃を仕掛けた奴が、突然横から和人のパンチを喰らって伸ばされた。その事に根本は和人に激昂して怒鳴ると、他のBクラス生徒達は和人の行動によつて足を止めている。

「悪い悪い。ちょっと手が滑つてな」

「ふざけるな! 手が滑つたじゃないだろうが! 味方に攻撃するなんて何考えていやがる!？」

「と言うか和人、お前はそつち側だろ？」

根本の怒鳴り声を聞き流す和人に、俺は突っ込みを入れるが無視されている。

「おい根本。使者にランチするのがお前の挨拶なのか? とてもBクラスのやる事とは思えないぞ」

「何言つてやがる! 下位クラスには上位クラスに挑む事を後悔させる為の見せしめをするつて相場が決まってるだろうが!」

「やはりそう言う認識なんだな。本当に明久を行かせなくて良かったよ」

問題発言とも言える根本の台詞に俺は明久を行かせなかつた事に安堵する。

「おい和人、別に助けなくても俺一人で充分に対処出来たんだが」

「つれない事を言うなよ、修哉。幼馴染として放って置ける訳がないだろ」

「……………そうかい」

まあ和人のお節介は今に始まつた事じゃないが。

「さ、修哉。根本には俺が言っておくから、お前は教室に戻るといい」

「おい佐伯！ お前何勝手な事を！」

「なら俺はこれで失礼する」

「ま…待て！ って何やってるお前等！ アイツを捕まえる！」

俺がBクラスの教室から出ようとすると、根本はBクラス生徒達に俺を捕まえるように指示するが…………。

「悪いが根本。修哉には手を出させないぞ」

「なっ！」

佐伯が立ち塞がるように出入り口に立つたので捕まえる事が出来な

くなってしまった。

「それじゃあ和人、明日の試召戦争で」

「ああ。修哉と戦えるのを楽しみに待っているよ」

修哉は戻ったか。後は……。

「佐伯！ お前どう言つつもりだ!？」

さっきから怒鳴っている根本をどうにかするか。

「何がだ？」

「惚けるな！ 何で俺の邪魔をするのかと聞いているんだ!？」

「言っただろ？ 修哉は俺の幼馴染だから助けたんだ。幼馴染がリ
ンチされるのを黙って見ている訳が無いだろう」

「今回は試召戦争だぞ！ 下位クラスの士気を下げさせる為に見せ
しめをするのは当然だろうが!」

「だから一人相手にリンチするのか？　とてもBクラスのやる事とは思えないな」

と言っか、リンチするのが当たり前の様に言っお前がどうかしてる。ま、こんな小物にそんな事を言っても無駄だろうが。

「根本、お前は俺のやった事に対して憤っているみたいだがな。もし俺があそこで間に入っていなかったら、お前等の内の誰かが返り討ちにされていたかもしれないんだぞ。寧ろこの程度で済んだ事に礼を言ってもらいたい物だ」

「なっ!？」

俺の言葉に根本は信じられない顔をする。他の連中も同様に。

「修哉はああ見えて、俺と同様に腕が立つぞ。アイツは以前から觀察処分者の吉井や、騒ぎを起こす問題児達を簡単に鎮圧している。だからお前達が集団で襲いかかった所で返り討ちされるだけだ。もついでに言っておくが、修哉は向かって来る相手には容赦しないぞ。たとえ相手が女でもな」

『……………』

俄かに信じられないような顔をしている連中だが事実だ。

「まあ信じる信じないは勝手だが、これだけは言っておく。根本、今回は試召戦争前だから見逃してやるが、また俺の前で不快な行動を取ったら……………どうなるか分かってるな？」

「！！！！……わ……分かった……」

俺がほんの少しだけ殺気を出すと、根本は怯えた顔をしている。この程度の殺気で怯えるとは……やはり小物だな。修哉だったら簡単に受け流すぞ。

おっと、どうやら女子も怯えさせてしまったみたいだ。すぐに殺気を引っ込めなければ。

「女子の皆、怖がらせてすまない。君達まで巻き込んでしまったって大変申し訳ない」

「あ……き……気にしないで佐伯君」

「私達はそんな……」

俺が笑みを浮かべながら謝罪すると、女子達は気にしてないように言っている。

だけど俺としては本当に申し訳なかった。

「そうは行かないよ。お詫びとして、放課後にクレープを奢るよ。どうかそれで許してくれるかい？」

『……………はい……………』

女子達は顔が物凄く赤くなりながらも許してくれた。

男子全員は揃いも揃って修哉に襲い掛かってきたから何もする気は無い。無論、俺によって気絶している奴にもだ。

午後の補給テストが終わった放課後。

「坂本、Bクラスには明日の午後に試召戦争をやるって言った
た」

「よし、後は明日の午前中のテストが終われば開戦だ」

「もうついでに言っておくが。やはりBクラスはDクラスと同様、
使者にリンチをやるうとしていたぞ？」

「……………」

「もし明久を行かせてたら、酷い目に遭っていたらうな」

「……………」

「やはりお前は今の内に体罰を与えた方が良さそうだ」

「ま…待て！ 明久の代わりに天城が行ったんだから問題は……………」

「問答無用だ。歯を食い縛れ」

「ギヤアアアアアア~~~~~!!!!!!」

俺が折檻すると坂本は断末魔の悲鳴を上げるのであった。

第八問（後書き）

早くもオリキャラの登場です。

佐伯和人については後ほど紹介します。

第九問

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

天城修哉の答え

『 C_6H_6 』

コメント……明久と土屋がバカな回答をしたら職員室に連れて行かせます。

教師のコメント

言うまでも無く正解です。

それとコメントについてですが、その時はお願いします。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

いえ、天城君に頼んで二人纏めて連れて来させた方がよろしいですね。それでは天城君、お願いします。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本が手を置いて俺達の方を向いている……昨日、俺が体罰を下した所為か未だに痛そうな顔をしているが誰もそれに突っ込まなかった。

つい先程の午前中に全科目の補給テストが終わって昼食を取ったところだ。今回のテストで俺の全科目は点数があるので万全な状態で

試召戦争に充分挑める。とは言え苦手科目は余り万全な点数ではないのだが。

まあそこは置いといて、とにかく補給テストが多くてかなり大変だった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

坂本の言葉にFクラス達は大声を上げる。やはりモチベーションを維持する為には設備交換をしない方が良かったみたいだな。

俺としては設備交換して、満足している奴と結託して試召戦争を終わらせたかったが。恐らく坂本はそれも考えて設備交換をしなかったと思う。

そう考えている最中、坂本は作戦を説明し始める。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下は絶対に負ける訳にはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらおう。野郎共、キツチリ死んで来い！」

「が、頑張ります」

若干引き気味になっている姫路は一步前に出てペコツと頭を下げると……。

『うおおーっ！』

前線部隊が姫路と一緒に戦えると分かって、士気が最高潮に達していた。

流石に姫路をすぐ前線に出さなければいけないと坂本は考えたのだろう。Fクラスの点数ではBクラス相手に負けるのは一目瞭然だから、最大の奥の手である成績優秀者の姫路を出さなければいけない。主戦力の姫路が敵を倒している最中、他の前線部隊は姫路を守る為の盾だ。坂本が死んで来いなんて言うから、姫路以外の前線部隊はただの時間稼ぎ部隊だ。まあ犠牲覚悟で挑まなければBクラスに勝てないのだから仕方ない。

キンコーンカーンコーン！

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた事によって、Bクラスとの試召戦争が始まった。

「よし、行って来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

坂本の掛け声により、Fクラス前線部隊は一斉に教室を出るが……。

「み…皆さん、待って下さい」

「少しは姫路の事を考えればいいんだがな」

姫路は出遅れてしまった。

「それじゃあ姫路、前線は任せたぞ」

「は…はい。それでは行つてきます」

「それと天城はここに残れ。今回は数学がメインだからな」

教室を出た姫路に俺も後を追おうとしたが、坂本が残れと言われたので仕方なく残る事にした。

「確かに数学は苦手だが、一応それなりには戦えるぞ？」

「だとしてもBクラス相手にはキツイ。それに向こうは比較的文系が多いからな。万が一の事を考えて、ここに攻め込まれて文系で挑まれたら天城が対処して欲しい」

「……………ここは従おう」

坂本の言葉に従って教室に残る事にした。

「それと他に聞きたい事があるんだが……Bクラスの代表は誰か知っているか？」

「ああ、そう言えば昨日言い忘れていたな。代表は根本恭二だ」

「根本……アイツか」

俺が根本と言ったら坂本は顔を顰める。どうやら坂本も根本の事について知っているみたいだな……特に悪い噂について。

「その顔を見る限りでは知っているみたいだな」

「根本は勝つ為なら、どんな汚い手段でもやる男だつて誰もが知ってるぞ。例えば“球技大会で相手チームに一服盛った”とか、“喧嘩に刃物は当然装備”^{デフォルテ}つてな」

「……………ソイツには正々堂々と言う単語が全く無いみたいだな。そんな汚い手を使ってまで勝利を得たいのか？」

「お前からして見れば卑怯だと思うが、俺にはそんな大した事は無いが」

「……………卑怯に関する点については、お前も根本と同様だな」

少しばかり坂本に軽蔑の眼差しを送る俺。

「やれやれ。俺や和人がこんな卑怯者の代表の命令に従う事になるとは……………」

「和人？ ……………おい、ソイツは佐伯和人か？」

「ああ、俺の幼馴染だ。と言うか坂本は和人の事も知ってるのか？」

「アイツは有名だろうが……特に女の話題に関して。学園の男子の誰もが佐伯を“男の敵”と呼んでいるだろうが」

「……まあそこは否定出来ないな」

確かに和人は容姿端麗で成績優秀、運動神経抜群の3拍子揃った奴だ……おまけに女子から物凄くモテている。

「俺が知ってるのはそれだけなんだが。まあそれはいいとして、幼馴染のお前から見て佐伯をどう見る？」

「知ってるの通り和人は女性相手に優しく接する奴だ。かと言って男相手にもちゃんと普通に接するし、中々面倒見の良い奴だ」

「……意外だな。ああ言うのはてつきり男相手には冷たく接すると思ってたが」

「もしそうだとしたら、今頃俺とは仲の良い幼馴染じゃないからな」

「そうか……って違う！俺が聞きたいのはそんな事じゃなくて、試召戦争でどう戦うかについてだ！」

「ああ、そつちか」

坂本の突っ込みに俺は答える内容を間違えたと気付く。

「和人は真つ向勝負を好むから前衛に挑むだろうし、後衛で策を練るかもしれないな」

「……つまり佐伯はオールラウンダーって事か。厄介な奴が

Bクラスにいたもんだな」

「けど和人の事だから、今頃は前衛で戦っていると思う」

「何故そう言い切れる？」

「俺がBクラスで宣戦布告をした後に和人と根本の会話を見て、どうも馬が合わなさそうな感じがしてな」

「だから前衛で戦っている？」

「ああ。もし和人が後衛で策を練るとしても、根本と違って余り卑怯な手は好まない。互いの戦力や状況を見てどうやって攻めようかと考えるタイプだからな」

「……………成程な」

俺の回答に坂本は少々考える仕草をする。恐らく今の前線部隊の戦況を考えているんだろう。

「天城の言うとおり佐伯が前衛にいるなら、俺達にとっては好都合かもしれないな」

「それって姫路が前線にいるからか？」

「まあな。いくら佐伯が強くても、姫路がいたら真つ向では勝負にならないだろうし、策を使っても簡単には倒せないからな」

姫路を信頼している故の台詞だろう。

だが……。

「とは言え余り軽視は出来ない。天城、お前も前線に行ってくれ」

「そう言つと思つたよ」

坂本は後々の事を考えて俺を前線に行かせようとしていた。俺もその判断は間違つていないと思う。

「もし和人が誰かと戦っていたら、真つ先に助太刀して倒す事にする。幼馴染の俺から見ても、和人は前から掴み所が無い奴だからな」

「そう言つ奴ほど厄介な相手だな。是非そうしてくれ」

「ああ、それじゃ行つて来る」

俺は頷いて教室を出ようとしたが……。

「ちよつとよろしいですか？」

いきなり担任の福原先生が教室に入ってきた。

「福原先生、どうかしたんですか？ 今は試召戦争中ですよ」

「坂本君に用がありました」

「俺に？」

「ええ。Bクラス代表の根本君が話があるそうです」

福原先生の台詞に俺と坂本は疑問を抱いた。俺が坂本の顔を見ると、坂本は分からないと言った感じで首を横に振る。

根本が坂本に話しだすと？ 一体何を考えている？

「話って何なんだ？」

「協定について話をしたいと言っていましたよ。屋上で待っているそうです。では私はこれで失礼します」

言うだけ言った福原先生はすぐに教室から去って行った。

「……………どうする、坂本？」

「取り敢えず行って聞く事にする。一応は協定についての話だからな」

「そうか。俺はこのまま前線に行くが、どうする？」

「いや、変更だ。本隊と一緒に前も付いて来い。相手は根本だから用心しないといけないからな」

「分かった。ではそうしよう」

協定と言って実は罠だったなんてオチと言う可能性が考えられる。坂本は当然それを想定して俺も一緒に行かせようとしているのだろう。

俺は一応、姫路の次に点数が高いから……………と言ってもかなり点数差がある。それでも状況次第によってはBクラスとまともに戦える…

…相手が文系の科目で挑めばの話だが。

「それじゃ屋上に行くぞ」

「了解」

『おつっ！』

坂本と一緒に俺や本隊は屋上へと向かう。

しかしこれは根本の罠だったと俺達は後から気付くのであった。

「ようこそ、Fクラスの代表さん。待ってたぞ」

俺達が屋上に着くと、そこにはBクラス代表の根本や近衛部隊、そして和人がいた。

ん？ 何で和人がいるんだ？ アイツが根本の傍にいたとは……
どうやら俺の読み間違いみたいだな。

「和人、俺はてつきり前線で戦ってると思ってたが」

「いや、最初はそうしようと考えていたんだけど、根本の指示で行くなと言われてね」

頭をポリポリと掻く和人を見て、俺の読みは間違っていなかったみたいだが、待機させられていたのは予想外だった。

「俺としてはすぐに修哉と戦いたかったんだが、根本がこの後の……」

「おい佐伯、余計な事は言つな。いくら幼馴染だからと言っても今は敵同士だ」

「はいはい」

根本の注意に和人は頷いて喋るのを止めた。

「で、協定の内容について聞かせてもらおうか？」

和人から情報を聞き出す事が出来ないと分かった坂本は本題に入る事にした。

「ああ。今回の試召戦争で、四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時から持ち越し、その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止するって話だ。どうだ？ お互いに悪い話じゃ無い筈だ」

「……………」

根本の協定内容を聞いた坂本は無言で考えていると……………。

「……………」分かった。協定を結ばせて貰う」

少し経って承諾するのであった。

まあ確かに根本の言うとおり悪くない話だ。Bクラスを倒すにしても、かなりの時間を労するだろうし、何より一番の頼みである姫路がずっと戦い続ければ疲弊して倒れる恐れがある。そんな事になったらBクラスは一斉に姫路に襲い掛かるだろう。

かと言ってBクラスの方も長期戦に持ち込まれて次回に持ち越しとなったら、かなりのダメージを負った状態で戦うのはキツイ筈だ。

当然、坂本はそれを考えた上で協定を結んだと思う。何しろ互いにとってメリツトのある話なのだから。

承諾した坂本に根本は笑みを浮かべているが、和人は根本を見ながら不快そうな顔をしていた。まるで気に食わないと言わんばかりに

和人の不快な顔をしていた理由は俺達が教室に戻ってすぐに気付くのであった。

「……………成程、和人があんな顔をしていた訳だ」

「やってくれたな、根本の奴」

協定を結んだ俺達は教室に戻ると、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープペンや消しゴムが大量に転がっていた。

そして戻っていた明久と秀吉や前線部隊数名も、その光景に顔を顰めている。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「いくら試召戦争だからと言って人の持ち物を勝手に壊すのはどうかと思うが」

明久と秀吉の台詞に俺も頷く。

と云うか嫌がらせ以前に器物破損で訴える事が出来るんじゃないか？ うわ、俺の筆入れの中のペンや消しゴムも無残な状態になっているし。

和人はコレを知って不快な顔をしていたのか。アイツはこう言った手段は嫌いだからな。恐らく根本に対する評価はかなり下落しているに違いない。

「あまり気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に大きな支障は無い」

「雄二がそう言うなら良いけど」

「いや、修復や作戦以前に、この事を先生に言った方が良くないか？ これは明らかに問題だろ」

人の持ち物を勝手に壊したんだから。

「根本の事だ、どうせ白を切るに決まってる。Bクラスの犯行だと分かった所で、部隊の誰かが勝手にやった事だからと言って責任逃れするだろっ」

「だとしても実行した奴等には壊した筆記用具を請求してやる。それと一緒に説教もな」

まあ実行した奴等がダンマリした所で和人に聞くが。

「それはそうと、どうして雄二やシュウは教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

「協定を結びたいと言う申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「それに根本が本当に協定を結ぶかどうかの確信が無かつたから、俺や本隊も一緒に付いて行ったんだ。もしかしたら騙し討ちをするんじゃないかと思つてな」

明久の質問に俺と坂本は答えると、秀吉が意外そうな顔をする。

「協定じゃと?」

「ああ。四時までに決着がつかなくなつたら、戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間、試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「それ、承諾したの?」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がこつちとしては有利なんじゃないの?」

「姫路以外は、な」

「戦力の要かなめである姫路がやられたら、いくら俺がいても不利だからな」

明久と秀吉は調停を結んだ理由が分かると納得する顔をした。

「アイツ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日と言う事になる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうに無いね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる。まあ天城も重要な戦力の一人だが、数学以外はな」

ほっとけ、俺だってそれなりの努力はしているんだ。確かに数学は苦手だが、それでも坂本達より点数は高いっての。

「だから受けたの？ 姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そう言う事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

果たして本当にそうなんだろうか。坂本はそう言うが俺は何か釈然としなかった。

屋上で話を聞いた時には俺も坂本と同様に悪くない話だと思っていたが、教室に戻って悲惨な状態となった事に疑問を抱いた。

今思えば裏で嫌がらせを指示していた根本が、互いにメリットのあたる協定を提案をする。あの卑怯者と称される根本が嫌がらせだけで済ませる程の甘い奴なんだろうか？

それに和人もだ。アイツが前線へ出ずに根本と一緒にいた事が気になる。『この後』って和人が言ってたな。根本は後から何かをやる為に和人を傍に置かせたのか？

まあ今はこんな事を考えても埒があかないか。

「明久、取り敢えずワシ等は前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

秀吉が明久にそう言うのと教室を駆け足で出て行き……。

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

明久が手を挙げて坂本に背を向けて教室を出て……。

「坂本、俺も前線に行くが構わないか？ 明日に持ち越しとなるなら、出来るだけ倒しておきたい」

「そつだな、なるべく倒しておいた方がこつちとしても多少は有利になる。行ってくれ」

坂本から許可を得た俺も教室から出て明久達と一緒に前線へ向かった。

「明久、秀吉、今度は俺も参加させてもらおう」

「シユウも出るの？ それなら心強いね」

「数学だったら明久達と大して変わらんがな」

「そうは言っても、修哉はワシ等より点数は高いからのう。おまけに明久と同様に召喚獣の操作も慣れておるから、こっちとしても頼もしいのじゃ」

「嬉しい事を言ってくれてありがとう」

明久と秀吉の言葉に俺は礼を言いながら前線に向かっている。

「だからと言って油断は出来ないぞ。相手は根本だからな」

「うん。なんか、まだまだ色々やってきそうだね」

「そうじゃな。この程度で終わるとは思えん。気を引き締めた方が良さそうじゃ」

果たして今度はどんな狡猾な手を使うんだろうか。にしても根本の奴、宣戦布告してきた時にはFクラスを見下してたのに、いざ戦うとなればアレか。戦力は向こうの方が上だと言うのに、何である手段を使ってまで勝とうとするのか俺には理解出来ん。和人もさぞかし嫌だろうな。

と、俺がそう思っている最中に前線部隊の姿が見えてきた。

「修哉よ、お主はどここの部隊で戦うのじゃ？」

「取り敢えずは明久の部隊と一緒に戦わせてもらう。明久とはお互いに操作が慣れてて連携攻撃が出来るからな」

「そうだね。ボクとしてもシユウと一緒に戦いやすくなるから」

「そうか……ワシとしては修哉と一緒に戦いたかったのじゃが、それなら仕方あるまい。では、くれぐれも用心するのじゃぞ！」

「ああ」

「秀吉もね！」

残念そうな顔をしていた秀吉は部隊に戻り、俺は明久の部隊へと向かう。

「吉井！ 戻ってきたか！ ん？ 天城もいるのか、こっちとしては助かる」

出迎えた須川が俺を見て心強い味方が来てくれたと言わんばかりに安堵している。

「待たせたね！ 戦況は？」

「かなり不味い事になっている」

「え！？ どうして!？」

須川の台詞に明久は驚愕した。不味いと言ってもBクラスの方から本隊は出ている様子がなくて劣勢なのに、こちらとしても戦力がまだ結構残っているからかなり優勢だ。なのに何で不味いのだろうか。

「島田が人質に捕られた」

「なっ!？」

「おやおや」

今度は人質の手段を取ったか。劣勢な状況では確かに有効な手だろう。と言うか島田がどうして人質にされたのかは知らんが。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

成程。明久の部隊はそのせいでBクラスと睨み合いになっているのか。さあ明久、お前はどうするつもりだ？

「……そうだね。取り敢えず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川が前を歩き、明久と俺は後に続く。

明久の部隊の人垣を抜けると、そこには須川の言うとおり二人のBクラス生徒と捕らえられた島田と召喚獣の姿があった。その近くには補習担当行使もいる。

おいおい島田、どうしてそんな状態になっているんだよ。いつも明久を殴っているお前がその気になれば、直接ソイツ等をブチのめせる筈だが？

「島田さん!」

「よ、吉井!」

「……………」
何だかドラマみたいな流れに俺は少々呆れ顔をする。

そして……。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

「……………」

相手も相手に悪役らしからぬ台詞を言った事に俺は更に呆れた。

恐らく相手は数少ない女子である島田を戦死させるだけじゃなく、人質にして補習室送りをチラつかせて、此方の士気を下げようとしているんだろう。

内の男子達は女子に飢えている傾向がありそうな連中ばかりだからな。あまり褒める物じゃないが、こつちとしてはかなり有効な手だ。

それにこの作戦は根本が指示したと思う。和人は根本と違いこんな手は考えない。相手が女子なら尚更だ。普段から女子に優しく接している和人はそんな事をしない筈だ。

まあそんな事より、さてどうするか。こんな状況がいつまでも続いていたら島田が補習室送りにされるのは時間の問題だ。俺としてはこれ以上こんな事に付き合う気はない。島田には悪いが、さっさと片付けさせてもらう。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか!？」

明久が須川達に突撃の指示を下した。

どうせ明久の事だから、戦争に犠牲は付き物とか言っつて、日頃痛めつけられている仕返しをしようとしても考えているんだろう。

俺から言わせれば何も言い返さずに黙って島田にやられている明久もどうかと思うんだがな。

取り敢えず島田には悪いがBクラスの連中と一緒に退場してもらおう。アイツは試召戦争中にも拘らず、明久にだけは容赦しないからな。

「ま、待て、吉井！」

Bクラス生徒から待てと言いながら片手を開いた状態で前に出す。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っっている？」

「バカだから」

「殺すわよ」

明久はBクラス生徒の質問にあっさり答えると、島田が恐ろしい殺気を出してきた。

おい明久、思った事を素直に言うのは良い事だが少しは相手を見て考えような。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

島田、明久を気遣うのは悪くないんだが敵の情報に踊らされるなよ。しかも護衛も付けずに一人だけ行くなんて……もう少し後先考えて行動しろ。

「島田さん……」

「な、なによ」

島田は顔が少々赤くなっているが……。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違っわよ！」

明久の見当違いな発言によって台無しになってしまった。

けれど明久は島田に散々な目に遭わされているから、あんあ突拍子も無い事を言うのは無理もなかった……島田が普段から明久に暴力を振るっていなければ変わっていたかもしれないが。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

おい島田、そんな事を言っても対する日頃の行いが悪い故に明久は

ああ言ったんだぞ。お前が一番の原因なんだからな。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ふいつと顔を背ける島田。なんかまたドラマみたいな展開になっているな。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく……」

Bクラス生徒がやっと立場が分かったと思って要求を突きつけようとしたが……。

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ!？」

明久はまた突撃の指示を下した。

「あの島田さんは偽者だ！ 変装している敵だぞ！」

「待て明久、どうしてそんな答えになるんだ？ あれはどう見ても正真正銘の島田だと思っが」

「天城の言うとおりよ！ 何でそんな考えになるわけ!？」

「ふっ……それは簡単だよ、シユウ。何故なら……」

明久は少々もったいぶった様な感じになると……。

「あの島田さんにそんな優しさがある訳がない！ 嬉々として僕を殺りにくるに決まっているじゃないか！」

「何だよ!?!」

……島田には気の毒だと思いが、俺は納得してしまった。島田の自業自得、もしくは身から出た錆とも言えるだろう。

「否定は出来ないな」

「でしよう?」

「天城まで何言ってるのよ!?!」

ではさつさと倒すとするか。運が良い事に科目が英語だし。

「試サツ獣召喚!」

「おい待てって! コイツ本当に本物の島田だって!」

俺が召喚獣を出している最中、狼狽しているBクラス生徒。

「黙れ! 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!
! さあシユウ! 早く倒しちゃって!」

「はいはい」

とは言ってもBクラスの言うとおり、あそこにいるのは本物の島田なんだがな。

「では覚悟」

「だから本当に……!!」

『Fクラス	天城修哉	英語W	160点
VS			
Bクラス	鈴木次郎 <small>すずき じろう</small>	英語W	33点
Bクラス	吉田卓夫 <small>よしたたくお</small>	英語W	18点

シャキンッ！ ザシユッ！ ザシユッ！

俺の召喚獣は瀕死のBクラス召喚獣に居合をやって即行で倒した。

そして……。

「ぎゃあああ……!!」

「たすけてえー……!!」

近くにいた補習講師によって連行されたBクラス生徒の二人であった。

さて、後は島田をどうやって宥めるかだな。

「皆、気をつける！ 変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

……… 明久、お前はまだ島田を偽者扱いしているのか。

「よ、吉井、酷い……。うち、本当に心配したのに」

「まだ白々しい演技を続けるか！ この大根役者め！」

「そこまでにしろ、明久」

未だにバカな事を言っている明久に俺は割って入る。

「コイツは本物の島田だぞ」

「何言ってるんだよシユウ！ そんな訳無いじゃないか！」

明久、これ以上バカな事を言い続けていると流石に俺もフォロー出来なくなるぞ。

「そうよ！ 本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！ コレ本物の島田さんだ！」

そんな嘘に騙される島田もどうかと思うが、明久は漸く本物だと信じたみたいだ。

「島田さん、大丈夫だった？」

「……………」
掌を反したかのように優しく接して、床に座っている島田に手を差し伸べる明久に俺は無言になりながら物凄く呆れた。

「……………」
島田も俺と同様に無言になりながらも明久の手に掴まって立ち上がる。あの様子だと明久がおかしな事を言ったら即座に殴りそうだな。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」
「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう?」

「……………」
「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな?」

「……………」
島田のノーリアクションに明久はやりにくそうな顔をしている。次に変な事を言ったら確実に明久を殴るな。

「あー、島田さん。実はね」

「……………」
「なによ」

明久が最高の笑顔を作ると……。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ」

その台詞を言った後に物凄い勢いの乗ったパンチが明久の顔に炸裂したのであった。

明久、ハッキリ言って今回はお前が悪い。

流石に今回ばかりは明久に味方する事は出来ないので、俺はさつさと秀吉のいる部隊を掩護しに行くのであった。

第九問（後書き）

明日か明後日に更新しますので、次回をお楽しみに！！

それと感想もお待ちしております！！

第十問（前書き）

今回は今まで長く書きました、

それではどしどしー！

第十問

Bクラスとの試召戦争の最中、俺は秀吉の部隊に加わって敵をあらかた倒し、明久を制裁している島田の方に向かい……。

「島田、いくら明久が許せないとは言え、これはやり過ぎだ」

「何言ってるの。これは当然の報いよ」

島田を説教していた。その隣には明久が倒れて気絶しており、散々殴られただけでなく頭から血が出ている……まるで何かに叩きつけたかのように。

「だからと言って意識を失っている明久を殴り続けるだけでなく、頭を掴んで廊下に叩き付けるのはダメだろうが」

「ふん！ 元はと言えば吉井が悪いのよ！ ウチを偽者呼ばわりしただけでなく、気遣いまで無下にしたんだから！」

「前者は気の毒に思うが、後者はお前が普段から明久に暴力を振るっている故だ」

すぐに手が出る悪い癖が無ければ、明久も対応が変わっていたんだがな。

「何よソレ！ まるでウチが悪いみたいな言い方じゃない！」

「事実を言ったまでだ。と言つかお前は全く自覚が無いみたいだな。少しは自分の行動を反省したらどうだ？ そんな事ばかりしている

から、お前の明久に対する想いが伝わらないんだぞ」

「……………」

島田は俺の最後の台詞に顔が真っ赤になった。

「な……何言ってるのよ!? う……ウチは吉井の事なんて……………」

「そうか、ならコレだけは言っておく。何時までもそんな状態が続いていても、明久はお前に恋愛感情は抱かずに友達関係のまま終わる」

「……………」

「それが嫌なら、すぐに手が出る悪い癖を直して……………」

俺が言っている最中……………。

「ウチは吉井に恋愛感情なんて抱いていないわ!! それに今までの事は全部吉井が悪いのよ!!」

島田はいきなり大声で怒鳴りながら何処かへと去っていった。

「……………はあっ……………人が説教している最中に逃げ出すとは……………。島田には困ったもんだ」

俺は島田の行動に溜息を吐きながら呆れ、倒れている明久を担ぎ……………。

「……………どうせ捕まえて説教を再会した所でまた逃げ出すだろうな。」

全く、我侂な子供を相手にしているみたいだ……」

愚痴りながら教室へと戻って行った。

「明久、お前にも問題があるんだからな」

気絶している明久にも突っ込みを入れて。

時刻は午後四時過ぎ。

「……ここはどこ？」

「やっと起きたか」

教室にて気絶していた明久が漸く起きた。

「あ、気が付きましたか？」

俺の隣にいた姫路が目を開けた明久に声を掛けると、明久は癒されているような顔をしている。

「心配しましたよ？ 天城君に連れてこられた吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしていたんですから」

まるで見たような姫路の推測に俺は内心で正解と言う。

「いくら試召『戦争』じゃからと言って、本当に怪我する必要は無いんじゃないぞ」

違つぞ秀吉。明久が怪我をしたのは味方である島田がやったんだよ……いや、戦争と言うより虐殺同然だったが。

「ちよつと色々あつてね。それで試召戦争はどうなったの？」

明久は何でも無いように言いながら畳に横たわっている体を起こして、試召戦争の事を聞き出す……痛そうな顔をしながら。

と言うか明久、お前はあれだけの事をちよつとで済ませるのか？俺だったら即行で島田に詰め寄っているぞ。

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んで、天城が出来るだけBクラスの数人を補習室送りにさせた。もつとも、こちらの被害も少なくて無いがな」

坂本がFクラスの被害を書いたメモを読み上げる。予想してたとは

言え、被害がかなり多い。俺は後半から廊下戦に加わって多少の戦果は上げたが、全体としてはあまり良くない。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調って訳だね」

「まあな」

「だが相手は根本だから油断は出来ない。奴の事だから他にも何か企んでいる筈だ」

「そうだな。あの根本が教室の嫌がらせ程度で終わらせるような奴じゃない」

俺の言葉に坂本は頷く。次はどんな狡猾な手を使うのやら。

と言うか和人、いくら根本が代表だからと言って少しは反抗してくれ。これ以上、根本を調子に乗らせていたら度が過ぎる行動を取りそうな予感がする。

俺がここにいない和人に愚痴っていると……。

「……………（トントントン）」

「お、ムツツリー二か。何か変わったことはあったか？」

土屋が背後から坂本の肩に指を突っついていた。

そう言えば土屋は戦いには参加せずに情報係として、周囲の警戒をしていたな。隠密行動が得意な土屋にとっては打って付けの任務だ……そのスキルは盗撮にも使っているが。

まあ土屋に盗撮関係の説教をした所で無駄なのは分かっているから、俺は敢えて何も言わない。ああ言う奴は一度警察に捕まらなければ分からない奴なのだから。だからと言って俺は警察に連絡する気は無いがな。

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだと？」

「……………（コクリ）」

情報を聞いた坂本は聞き返すと、土屋は首を縦に振る。

「おい土屋、坂本だけじゃなく俺達にも教えてくれ」

「……………説明する」

俺の言葉に土屋は周りに聞こえるように話を始める。

土屋が入手した情報を端的に言うと、Cクラスが試召戦争の用意を始めているとの事だ。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「確かにそうだが、実際の戦争ではよくある事だ。確実に勝つ為に有効な手段の一つでもある」

「……………」

「どつした？」

俺の台詞を聞いた坂本は無言になりながらこっちを見てくる。

「いや、意外だと思ってな。正々堂々と戦う天城が何かしらの不満を言うかと思ってたが」

「個人戦なら不満を言ってるが、集団戦は別だ」

「……………そうか」

「と言うか坂本、今はそんな事どうでもいいだろう。Cクラスの方はどうするんだ？」

「んー、そうだなー」

坂本は考える顔をしながらちらりと時計を見る。現在の時刻は午後四時半。時計を見た坂本は何かを決断したかのように俺達の方に顔を向ける。

「Cクラスと協定を結ぶか。『Dクラス使って攻め込ませるぞ』つとか言っつて脅してやれば、俺達に攻め込む気も無くなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

明久は坂本に賛成しながら頷く。

確かに坂本の言うとおりの事をすれば、Cクラスもすぐには試召戦争を開始しないだろう……………けど妙だな。どうしてCクラスがこんなタイミングで試召戦争をやるうとしているのか。漁夫の利を狙うにしても何か都合が良すぎる気がする。

「よし、それじゃ今から行って来るか」

「そうだね」

俺が考えている最中に坂本たちはCクラスに向かおうとしている。

「坂本、行く前にちょっといいか？」

「何だ？ 質問ならCクラスに行った後にして欲しいんだが」

「まあちよつと聞いてくれ。Bクラスとの協定は無視していいの？ 一応奴等とは今から明日の午前九時までは“ 試召戦争に関する一切の行為を禁止” するって結んでいる筈だが。俺達がCクラスと協定を結んだって事を、もしBクラスに知られたらどうするんだ？」

「……………それは俺も考えてはいたが、Cクラスの行動を無視する事は出来ないからな。あくまで俺達FクラスとBクラスの中での話だ。Cクラスはそんな事をしているのは知らないだろう。たとえばBクラスに何か言われたとしても黙ってればいいだけだしな」

「……………」

坂本の返答に俺は未だに納得出来なかつた。けど坂本の言ったとおりCクラスは無視出来ないし、Bクラスとの協定と言っても口約束に過ぎない。白を切ればそれで終わるだろう。

だが……………本当にそれで大丈夫なのだろうか。

「まだ納得してないみたいだが、取り敢えず天城もCクラスに行くぞ」

「……………ああ」

俺は洪々と坂本達と一緒にCクラスに行こうとするが……。

「秀吉は念の為にここに残ってくれ」

「ん？ 何じゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

坂本は秀吉に待機の指示を出した。やはり坂本も後々の事を考えているみたいだな。

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな。俺も天城と同様に多少の不安があるからな」

「よく分かんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。万が一と言う事はCクラスに何かをやるって事か。まあ考えがあるなら俺は何も言わんが。

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

秀吉を残して、明久、坂本、姫路、土屋、そして俺がCクラスへと向かう。

と、その時……。

「吉井、アンタの振り返り血こびり付いて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

廊下に出ると、ハンカチで手を拭っている島田と鞆を肩に担いでいる須川に会った。

「つてか島田、返り血が付いたのをあたかも明久の所為にしているが、そうだったのはお前だろうが。」

「あ、島田さんに須川君。丁度良かった。Cクラスまで付き合っつてよ。」

明久も明久でさっきの出来事を忘れていたかのように島田に話しかけている。お前は島田にやられた事に対して何とも思わないのか？ 普通はあんな事されて話しかけないと思うんだが。

「んー、別に良いけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

須川はともかく、島田もさっきの事を忘れていたかのように明久の誘いを承諾する。

「……………何でこの明久と島田はこんな仲良さげに話せるんだ？ おかしくないか？ 本当にさっきまでの虐殺を忘れているのか？」

「……………」

「どうかしたか、天城？」

明久と島田の会話を見ている俺に坂本が声を掛けてくる。

「……………坂本、明久と島田は去年からああなのか？」

「そうだな。あの二人は事が済んだら、何も無かったかのような感じで普通に話しているぞ」

「……………理解出来ん」

「ま、明久はバカだから、何でも自分が悪いと決めて甘んじているからな」

「……………そのバカである明久を利用して陥れている奴は俺に何度も説教されているがな。懲りずに何度も、ね」

「……………」

俺の突っ込みに坂本は何も言い返す事が出来ずに目を逸らすのであった。

島田と須川を加えた俺達七人はCクラスへと着いた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開いて早々に坂本は大きな声を出して告げる。

Cクラスの教室には帰っている生徒が余りおらず、かなりの人数が残っていた。やはり土屋の情報通り、漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしているな。

しかし分からんな。何故Cクラスはこんなに早く試召戦争をやるうとしている？俺達Fクラス側は設備が酷い理由で入学早々に試召戦争をやっているのだが、Cクラスにそんな理由は無い筈だ。もしやるとしても召喚獣の操作が慣れるまで時間を置いて挑もうとするのだが。

「私だけど、何か用かしら？」

俺達の前に出てきたのは黒髪のベリーショートにした気が強そうな女子だ。確か小山友香だったか？バレー部のホープとか呼ばれているみたいだが。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

坂本の問いに小山はいやらしい笑みを浮かべている。俺の勝手な予想だが、コイツはあまり性格が良く無さそうだ。

あの笑みなんか根本に似ていそうで………ん？ ちょっと待て、
去年の俺のクラスメイトの女子が小山は彼氏がいるって聞いた事が
あったな。確かその彼氏は………ハッ！ 不味い！

「ああ。不可侵条約を………」

「待て坂本！！ それ以上は言うな！！」

「ん？ どうした天城？」

俺が坂本が言っている最中に大声を出して遮ったが……。

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本くん？」

チツ！ やはり聞こえていたか！！

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？ 根本君！ Bクラスの君がどうしてこんな所に！」

Bクラス代表の根本がいきなり出てきた事によって、明久は驚愕の
声を出す。

やはり根本が潜んでいたか………小山の彼氏である根本が俺達Fクラ
スに協定を結んだ理由はこの為だったか。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。師匠戦争
に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言っ……」

「先に協定を破ったのはソツチだからな？　これはお互い様、だよな！」

明久の言葉を無視した根本が告げると同時に、他のBクラス生徒達が動き出した。その中には和人もいる。アイツが言った『この後』とはこう言う事だったみたいだな。

和人は俺を見て申し訳無さそうな顔をしているが、今はそんな事を気にしている場合じゃない……げっ！　数学の長谷川先生を連れて来ているのかよ！　よりもよって俺の苦手科目で……。

「長谷川先生！　Bクラス芳野よしのが召喚を……」

「させるか！　Fクラス須川が受けて立つ！　試獣サモン召喚！」

Bクラス芳野が坂本に対して攻撃を仕掛けようとした所を、間一髪で須川が身代わりになった。良い判断だ。もし代表の坂本がやられたらFクラスの敗北が決定するからな。

「僕等は協定違反なんてしていない！　これはCクラスとFクラスの……」

「無駄だ明久！　コイツ相手にそんな言い訳は通用しない！」

「天城の言つとおりだ！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾に白を切るに決まっている！」

「ま、そゆこと」

あのヤロウ、こうなる事が分かっていたくせに抜け抜けと……！

「屁理屈だ！」

「屁理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久！ 天城！ ここは逃げるぞ！」

「ちっ！」

「くそっ！」

坂本の台詞に俺と明久は戦闘中の須川に背を向けて、Cクラスから離脱しようと駆け出す。

『Fクラス

須川亮

数学

41点

VS

Bクラス

芳野孝之

数学

161点』

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！ 佐伯！ お前は天城を討ち取るんだ！」

背後から聞こえてくる根本の指示と複数の足音。おまけに和人を使つて俺を倒そうとしてやがる。アイツの事だ、倒されるなら幼馴染の方が良いだろうと思って指示したに違いない。

ハッキリ言っただけは本当に不味い。今のFクラスでBクラスを相手をするのは無理で、一番の戦力である姫路も数学の点数は消費している。恐らく根本は廊下戦で姫路が数学を消費していると知ったから長谷川先生を呼んだんだろう。卑劣な手で癩に障るが効果的な事には間違いない。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

俺達が廊下を走っている最中に姫路が遅れ始めた。大して運動神経が無い上に体が弱いのが、全力疾走は厳しい筈だ。

「あ、あの、さ、先に……行って、ください……」

息が物凄く上がっている姫路が言う。このまま姫路を連れていたら確実に追いつかれてしまう。だからと言って、ここで姫路を戦死させる訳にはいかない。姫路がいなかったら明日の試召戦争での勝率が大幅に下がるし、明久の事だから女の子を見捨てる事は出来ないと考えている筈だ。アイツは前からそう言う奴だからな。

「雄二！ シュウ！」

「なんだ明久！」

「いきなりどうした？」

明久の大声に坂本と俺が言い返すと、明久は立ち止まって……。

「ここは僕が引き受ける！ 雄二とシユウは姫路さんを連れて逃げてくれ！」

自ら殿しんがりの役を立候補した。

やはりそう来たか。お前って本当に誰かの為に自分を犠牲にする奴だな。

「よ、吉井君、私の事は、気に、しないで……」

「……分かった。ここはお前に任せる」

姫路の言葉を遮って、坂本がそう応える。坂本も今のままだと姫路がやられると思ったから明久の提案を承諾したのだろう。

「……………(ピタッ)」

「いや、ムツツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから」

一緒に立ち止まる土屋であったが、逃げるように言う明久。

「んじゃ、ウチは残っていいのかしら、隊長どの？」

「……………頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

明久の隣に立って一緒に殿をやるうとする島田に、明久が頼む。

「……………（グッ）」

土屋は明久に親指を立てながら走り去っていった。

「で、明久。お前が殿を務めるなら、当然何か策があるからなんだろう?」

「うん。僕に考えがある……………ってシユウ! 何で君は逃げないの!」

「お前だけに任せると何か失敗しそうな気がしてな。折角だから俺も付き合わせてもらおうよ」

残っている俺に明久は驚いているが、俺はあまり気にしないように言い返す。

「……………僕ってそんなに信用無い?」

「いつもここぞと言う時に失敗しては、俺にいつもフォローされているのは誰かな? 必要ないんだったら俺はこのまま逃げるが?」

「……………お願いします。どうか僕と一緒に残って下さい」

俺の言葉が聞いたのか、明久は俺に残ってくれと言ってきた。

「素直でよろしい。と言う訳で島田、俺も残らせてもらおうからな」

「……………あっそう。勝手にすれば」

島田は面白く無さそうな顔をしながら背ける。大方、俺がいる事に

明久と二人だけで戦うのが出来ない事に不満なんだろう。それに試召戦争中に俺が説教した件もあってか、俺の顔をまともに見ようとしれない。

まあ俺としては今はそんな事どうでもいいので、取り敢えず向かって来るBクラスの方に意識を集中する。

と、その時……。

「漸く追いついたよ、修哉」

俺達の目の前にいきなり和人が現れた。

「和人……」

「うわっ！ いつの間……」

「アンタいつからそこにいたのよ!？」

和人のいきなりの登場に俺は大して驚いていないが、明久と島田は物凄く驚いた顔をしながら和人を見ている。

相変わらず神出鬼没な奴だな。他のBクラスより先に行つて一番に着いたんだろう。以前から和人はいきなり現れては姿を消したりしているから、俺はもういつもの事だと思つてもう慣れてる。

「さて修哉、根本に指示通り俺と相手をしてもらつよ」

「何よソレ！ まるでウチと吉井は眼中に無い言い方ね!!」

「おつと失礼。そう言う風に言つたつもりは無いんだが、そう捉えてしまったなら謝罪するよ。申し訳無い」

「なっ……………」

島田の憤りに和人は訂正しながら手を胸に当てて頭を下げる。その事に島田は和人の突然の謝罪に大きく戸惑つて顔を赤らめた。

コイツは試召戦争中で女子が敵であつても優しく接するんだな。感心するか呆れるべきか……………そんなのはどっちでも良いか。

けど……………」

「……………やっぱり佐伯君は僕の敵だ」

明久は小声で言いながら和人を目の敵にしている。女子にモテる和人に、その逆である明久にとっては男の敵と認識している。

「ねえシュウ、佐伯君は僕が相手していいかな？ 今だつたら佐伯君を倒せるかもしれない」

「バカ。今のお前じゃ和人の相手にならん」

「修哉の言うとおりだぞ、吉井。そんな怒り狂つた状態で俺に襲い掛かっても無駄だ。お前は以前から俺に突進して来ては、勝手に自滅しているんだからな」

「……………佐伯君はともかく……………酷いよ、シュウ」

明久が黒いオーラを出して笑みを浮かべながら俺に和人の相手をさ

せろと言うが、俺だけでなく和人にも無理だと言い返されていじけてしまった。

和人とそんなやり取りをしている時……。

『いたぞつ！ Fクラスの吉井と島田と天城だ！』

『ぶち殺せ！』

『佐伯く〜ん！ 私達が掩護するわ〜！！』

和人以外の追っ手が追いついて来た。長谷川先生も一緒だ。

やっぱり数学で相手をしなければいけないか。和人は俺と違って数学が得意だから、こっちはかなり不利だ。おまけに他の追ってもいるからな。まあそんな事を言ってる場合じゃないから、やるだけやるしかない。

「Bクラス！　そこで止まるんだ！」

と、俺が召喚獣を出そうと思った矢先に明久が突然大きな声を出して、Bクラスを呼び止めた。

「良い度胸だ。たった三人で食い止めようつてののか？」

「いや、その前に長谷川先生に話がある」

長谷川先生だと？　一体何を話すつもりだ？

「何ですか、吉井君」

明久に呼ばれた事で長谷川先生が前に出てきた。

「Bクラスが協定違反をしている事はご存知ですか？」

どうやら明久は審判である長谷川先生に違反の事について訴えるつもりみたいだな。

「話を聞く限り、休戦協定を破つたのはFクラスの様子ですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」

やはり長谷川先生は根本に前もって言い包められたみたいだな。根本自身が仕組んだ事は伏せて、全てFクラスが悪いように説明したに違いない。

さて、ここまでは予想通りの返答だ。果たして明久はどんな風に言い返すのやら。

島田も島田で明久に期待するかのよう片目を瞑っている。

そして……。

「……………万策、尽きたか……………」

『コイツ馬鹿だあーっ！』

明久の台詞に此処にいる全員が明久を罵倒するのであった。

コイツは本当にもう……………バカだ。和人も完全に呆れ顔だよ。

とは言え、俺は明久のバカな行動は既に予想していた。此処は俺が出て何とかしよう。

まだ戦闘前だから此処でBクラスと戦わずに済むかもしれないからな。

「あー、明久のバカは放って置いて下さい。長谷川先生、俺から話があります」

「何でしょうか、天城君」

俺が前に出ると長谷川先生はこっちを向いて来る。俺を見て今度はちゃんとした回答を持って言うのだろうと思って真面目な顔をしていた。

「長谷川先生は根本から話しを聞いたんですよね？」

「ええ。根本君がFクラスは自分達Bクラスが提案した協定を破ったと言われて私が来ました」

「それは根本本人がちゃんと言ったんですか？」

「勿論です」

「ふむ……………」

俺の質問にBクラスは『何言ってるんだコイツ？』みたいな顔をしている……………和人は何か期待していそうな顔をしているが。

「質問はそれだけですか？」

「いえ、まだ他にもあります。長谷川先生は根本に言われて、一緒にCクラスに潜んでいましたね？」

「そうです」

「根本が俺達FクラスがCクラスに協定を結ぼうとしていたのを見て、違反だと判明して戦争の承認をしたんですよね？」

「ええ……………と言うか天城君。どうしてそう言う質問をするのですか？ 私には全く理解出来ないのですが」

長谷川先生は俺の質問の意図が分からず、一体何を聞いているのだと不可思議な顔をしている。他のBクラス生徒達も同様だ。

だが……………。

「……………ふふふ、成程ねえ。流石は修哉だ」

和人が小声で呟いていた。どうやら和人は感じているみたいだな。

だがまだ続けさせてもらおうぞ。

「おかしいとは思いませんか？ 俺達がやろうとしていたのはFクラスとCクラス内での協定です。ではどうしてBクラス代表である根本は俺達FクラスがCクラスに協定を結ぼうとしている事を何処で知ったんですか？」

『！！！！！！』

俺の質問に長谷川先生と明久や島田、そしてBクラス生徒達は俺の質問の意図が分かった途端に驚愕した……………和人だけは笑みを浮かべていたが。

「それは……………確かに妙ですね。どうして根本君は知っていたんでしょうか」

「何処からか情報が漏れない限り知る事は出来ません。当然FクラスはBクラスにそんな事教えてはいません。何しろCクラスとの協定は試召戦争を中断してすぐに代表の坂本が急遽考えた物ですから」

「ふむ……………」

「もしかしたら……………Cクラスは根本から情報を得て、俺達Fクラスが協定を結ぼうと前もって知っていたんじゃないでしょうか？ そうでなければ、Bクラス達がCクラスの教室に潜んではいけませんからね」

「そうですね。考えてみれば天城君の言うとおり、Bクラスがどうして知っているのが引つ掛かります」

長谷川先生が俺の言葉に頷くと、Bクラス達は不味いと言うような顔をしている。和人は未だに笑みを浮かべているが。

と、その時……。

「長谷川先生！！ ソイツの言っている事は出鱈目です！！」

根本が急に現れては長谷川先生に出鱈目とデカイ声で言うて来た。

態々自分から来てくれるとはな…… 手間が省けたよ、根本。

「しかし根本君、天城君の話しを聞く限り、君はどうやってFクラスがCクラスに協定を結ぼうと知っていたのですか？」

「そ…それは……」

「私が君から聞いた話では、Fクラスが先に協定を破ったと言われて来たんです。これはどう言う事ですか？」

「あ……いや……その……」

根本は長谷川先生の質問に返答する事が出来ないみたいだ。だが根本、まだ追い詰めさせてもらっぞ。

「そう言えば根本、お前は付き合っている女子がいたよな？」

「そ…それがどうした！？」

「確か俺の記憶によれば、根本が付き合っている彼女って………
Cクラス代表の小山友香じゃなかったか？」

「なっ!?!」

何で知っているんだ!?!　　と言うような顔をしているな。まあそんな事はどうでもいい。

「もしかしてお前は、彼女である小山と結託していたんじゃないか?　　そうでなければCクラスがいきなり試召戦争をやるだなんて言い出さないし、俺達FクラスがBクラスとの間に結んだ協定は知らない筈だからな。さあ、何か言い返すことはあるか?　　俺の言っている事が何処か間違っていたら教えてくれ」

「う……………あ……………」

顔を青褪めている根本は完全に追い詰められている。

「何も言い返さないと言う事は事実みたいだな。長谷川先生、どうやら根本がFクラスより先に協定を破っているみたいです」

「そのようですね。では根本君、Cクラス代表の小山さんと一緒に話しを聞かせて貰いましょうか?」

「……………こ……………今回の出来事は無かった事にして下さい!」

そう言った根本は早々に去って行くのであった。

そして……………。

『おい根本!　　自分だけ逃げようとするな!』

他のBクラス生徒達も根本に続いて去って行った……和人だけは残っている。

「やれやれ、逃げた所で後日聞くつもりなんですが」

「長谷川先生、そんな事をする必要はありません。それは俺達の方で処理しますので」

「そうですか。では私はこれで失礼します。それと疑ってすいませんでしたね、天城君」

「いえいえ、お気になさらず」

「ではこれにて」

長谷川先生がそう言って職員室へと戻っていった。

「す………凄いやシユウ！！ あんな土壇場で逆転するなんて！！」

「アンタ一体どんな手品を使ったのよ！？」

先程まで呆然としていた明久と島田が急に息を吹き返したかのように、俺を問い詰めるかのように言ってくる。

「落ち着け二人とも」

「これが落ち着いている訳無いでしょ！！ だってシユウは戦う前からBクラスを退かせたんだから！」

「さっさと教えなさいよ！！」

あーもう、この二人は………落ち着いて話しをする事が出来ないな。
と、その時……。

パチパチパチパチパチッ！

「いや〜流石だったよ、修哉。見事な大逆転だったよ」

「「!!!」」

「和人、お前いたのか」

和人は拍手をしながら俺に賛辞の言葉を述べた。その事に明久と島田は驚きながら和人を見ている。

「根本を見てて滑稽だったよ。修哉にあそこまで言われて何も言い返せなくなっただんだから。笑いを抑えるのが大変だった」

「あのな………俺はお前の代表である根本を追い詰めたんだぞ？
普通は同じクラスメイトとして助ける筈だが？」

「生憎、俺はあんな卑怯な手段でしか勝てない小物を助ける気は無
い」

「「なっ!?!」」

同じクラスメイトだと言うのに根本を小物扱いする和人に、明久と

島田は驚く。

「だとしても、あそこでお前が助けなければ要らぬ疑いを掛けられるんじゃないのか？ 俺とお前が幼馴染だって事を根本はもう知ってるし」

「あの状況で言い返せなかったら、俺が助けた所で勝手に自滅しそ
うだったからな。だから敢えて助けなかった」

「そうかい……で、和人がまだ此処にいるって事は、俺に用があるのか？」

「用が無ければいちゃダメなのかい？ つれないねえ、修哉は」

「別にそんな事は言ってないが……と言うか戻ったほうが良いと思うぞ。遅れて戻ってきたら根本が何を言い出すか分からんし」

「それもそうだね。では戻るとしよう。じゃあまた明日の試召戦争
で会おう。吉井、島田さん、失礼するよ」

「あ……うん」

「え……ええ」

和人は俺達に別れを告げると、ゆったりと教室へ戻るが……。

「ああ修哉、言い忘れてた。明日の試召戦争で俺は真っ先にお前と
戦うからな。無論、正々堂々の勝負だ」

「そうか。だからと言って数学で挑まれるのは御免だが」

「そんなアンフェアな真似はしない。お互い得意科目である英語で勝負だ。じゃあな」

俺に対する宣戦布告を言っ去って行った。

「やれやれ、真っ先に勝負を挑まれるとは……………」

「……………」

「どうした二人とも？」

無言になっている明久と島田に俺が問いかける。

「いや…………佐伯君の事は前から知ってたけど…………あんなにハツキリとシュウに正々堂々な発言を……………」

「意外ね。Bクラスの代表が根本だから、てつきり卑怯な事をする奴だと思っっていたけど……………」

「和人は真っ向勝負を好む奴だからな。特に俺との勝負は…………まあそんな事より、取り敢えず教室に戻って坂本に報告だ。行くぞ」

「そ…そうだね」

「ええ…………って何でアンタが仕切るのよ」

そして俺と明久と島田は教室に戻るのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704x/>

バカとテストと召喚獣 ~常識人はつらいよ~

2011年10月31日01時09分発行